

# 演劇会議

1995年4月10日 第87号

## ■ も く じ

|                                                                                                               |     |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|
| ●グラビア(舞台) .....                                                                                               | 1   |
| ●主に戯曲について — 敗戦50周年を迎えて — 宮岸泰治 .....                                                                           | 7   |
| ●萩坂桃彦さん(演劇会議前編集長)逝去 .....                                                                                     | 15  |
| 萩さんの穴はあまりにも大きい こばやしひろし<br>引き継ぐ新しい世代を 仲 武司                                                                     |     |
| ●震災地劇団からの報告 — 阪神大震災 — .....                                                                                   | 20  |
| 劇団四紀会・梶武史・久語孝雄・田中真・清水章代<br>劇団どろ・合田幸平・小野結花・太井クリ子<br>関西芸術座・河東けい                                                 |     |
| ●"神戸でのボランティア公演を終えて" .....                                                                                     | 46  |
| 劇団銅鑼 平野真弓                                                                                                     |     |
| ●第1回 東・西合同作家会議の報告 劇団名芸 栗木英章 .....                                                                             | 48  |
| ●地域の動き — 国民文化祭 — 劇団すがお 加藤武夫 .....                                                                             | 54  |
| ●中グラビア — 顔 — (平石耕一・汲田正子・猿渡公一) .....                                                                           | 58  |
| ●忘れえぬ最後の酒席 青年劇場 爪生正美 .....                                                                                    | 64  |
| ●劇評 .....                                                                                                     | 66  |
| 「日本の風景」(大阪)・「アンネの日記」(息吹)・「河」(き<br>ずがわ) …今泉おさむ(神戸自由劇場) / 「もう一人のヒト」<br>(青年劇場) …津上 忠 / 「センボ・スギハヤラ」(土くれ)<br>…芳地隆介 |     |
| ●私の俳優体験記 .....                                                                                                | 73  |
| 関西芸術座 小笠原町子<br>青年劇場 葛西和雄<br>劇団はぐるま 三島幸司                                                                       |     |
| ●＜ロシア演劇レポート 2＞ — 不条理な世界を描く .....                                                                              | 81  |
| — 付、日本とロシア演劇 Ⅱ — 桜井郁子                                                                                         |     |
| ●『恋はビラティッシュ』 .....                                                                                            | 87  |
| 大阪府職員演劇研究会 飴谷隆治                                                                                               |     |
| ●山ちゃんのラヴレター 東京芸術座 山口みる .....                                                                                  | 91  |
| ●北から南から — 劇団通信 — .....                                                                                        | 92  |
| ●読者のページ 稽古場完成ちかし .....                                                                                        | 107 |
| ●全日本リアリズム演劇会議住所録 .....                                                                                        | 109 |

表紙絵デザイン 城谷 護(京浜協同劇団)

## 公演

◇劇団コロ 『空き缶ユートピア』  
作・井上ひさし 脚色／演出・小林 裕



◇演劇集団和歌山 『きらめく星座』  
作井上ひさし 演出・楠木幸男



◇劇団はにわ 『新版うわなり打ち』  
作伊藤豊子 演出・北原雅子



## 舞台

# 公演

# 舞台

◇柘植追悼・名芸第四十一回公演

『この街に生きて』

作・栗木英章 演出・片野耕信



◇劇団息吹 『アネの日記』

演出・木田昌秀



◇テアトルハカタ 第二三作品公演

『テッド エンド』 作・S・キングスレー

脚色・ほしみつお 演出・中村ジョー



作・小池倫代 演出・秋本博子

◇劇団弘演第三十一回公演 『恋歌は聞こえる』



作・土屋 清 演出・林田時夫

◇劇団きづがわ 『河』



文・かつやましゅんすけ 演出・いんなみさだと  
『マッチ売りの少女』 作・アンデルセン  
ちひろとアンデルセン絵のある話

◇東京芸術座アトリエ公演

# 公演

# 舞台

# 公演

# 舞台

◇下斗米謹追悼公演 『3人は翔んだ』

ーアメリカに夢を駆せた男ー

作・梶谷伸夫 演出・加藤健太郎



◇劇団埼玉 『武州鼻緒騒動』

原作・川元祥一 脚色・沢田照夫 演出・川村武史



◇劇団名古屋 『分らない国』

作・原田宗典 演出・久保田明



作・立原りう 演出・布施茂

◇劇団河童 『ホスピス』



松谷みよ子 演出・飯田信之

◇劇団さっぽろ 『なら梨とり』



作・平石耕一 演出・福田悦雄

◇演劇集団土くれ 『センポ・スギハァラ』

# 公演

# 舞台

# ——敗戦50周年を迎え——

## 主に戯曲について

### 宮岸泰治

#### 宮岸泰治氏プロフィール

1929年生まれ、1987年まで東京新聞文化部記者、著書に「劇作家の転向」(未来社)「ドラマと歴史の対話」「ドラマが見える時」(影書房)がある。専門は演劇批評。



敗戦五十年というテーマの回りをとつおいつめぐるうちに、ふと敗戦直後の劇場の雰囲気がある部分くっきりと思いついて来た。そのことから始めようと思うが、その頃の劇場は疲労困憊の極にあった。空襲を受けた劇場はもとより、戦災をまぬがれていても満足なものは見当たらなかった。ロビーや廊下の石のたたみは汚れたままむき出しだし、暖房器具は供出してないか、壊れるかしていた。肝心の燃料もなかっただろう。足元から冷えてくる場内で——どういうわけか寒かった客席の記憶ばかりが甦えるが——誰も彼もオーバーの襟を深く立てて、固い椅子に縮こまって観劇した。

その中で印象に残るのは、私の僅かな経験にすぎないけれども、観客は入っていたにもかかわらず、場内の実に静かだったことだ。静かな中で、新時代の生き方を真剣に考えよう、学ぼう、求めようとする空気が張り詰めていた。戦前に新劇のことを「日本の良心」と呼んだのは秋田雨雀だそうだが、その暗夜の一灯ともいべき良心とはどういうものだったのかを、まだ十代半ばを少し過ぎたほどの私にしても、誰に誘われたのか教わりたいたいと思って、劇場に入ったのだった。考えてみると、敗戦期の焼け跡で、ぶらぶらしている人はほとんどいなかった。皆が置かれたそれだけの場所で懸命だったと思う。観客もその気持ちを一所に集めて、劇場を埋めていたといえいいのか。



◇青年劇場 『もう一人のヒト』 作・飯沢 匡 演出・松波喬介

◇劇団未来 『哄笑 (こうしょう) - 智恵子・ゼームス坂病院にて -』 作・清水邦夫 演出・寺下 保



敗戦期から少し時間が経っていたかもしれない。まだ春先の寒い日の午後だった。電柱の貼紙で知って、近くの中学校の体育館に、全国巡演を行って評判になっていた前進座の『ベニス商人』を観に行った。よく入っていた。客の半数は両脇通路にも後方にも立ち、幾重にもかさなって観ていた。そのまた後ろにいた私などは、何も見えないために仕方なく、出入口近くでぶらぶらしていた。ぶらぶらするといつても、たぶん私にはその頃の何もかもがまぶしいほどに目新しく映っていた。これが戦争中なら、おとなだろうと子供だろうとこれだけの人数が集められたとしたら、必ず命令と統率と監視の目に射すくめられて、はらはらするほど堅苦しい思いを味あわなければならなかった。会場にはそういった抑圧感はなくなかった。そういう静かだが解放感にあふれた観衆に混っているだけで、たとえ後方においてぶらぶらしていても、気持ちには充実しきっていた。その体育館には外との連絡口がわれわれの入場した後方の口一つしかなかったとみえて、出演者たちは舞台に出るにも、引込んで外にある楽屋まで戻るにも、人ごみをかきわけて通らねばならなかった。その時目に入っただけの間近かに見る出演者たちの衣裳のひどかったことは今でも忘れない。衣裳そのものが戦争中の粗悪品なのだが、生地は薄いというよりも透けてベラベラで、それが窓から入る日差しにでもつかまろうものなら、色は飛び、しわや汚れ

が目立ち、貴族の裁判官たちがローブの長い裾を引いて通るあとにはこりが舞った。だが、それが一向におかしくも惨めにも見えなかったのは、観る立場でいえば、衣裳が貧しかろうと何がひどかろうと、そんなことは全く意に介さなかったからだ。また俳優たちも体内から噴出するはちきれんばかりの勢いに溢れていて、そんなことは二の次のことだっただろう。舞台の明かりも乏しかった。装置の色彩も単色に近かった。すべてがないない尽しだった。しかし重ねていうが、そんなことよりも、人々はこれこそが演劇の精神だというものを、これが「日本の良心」だというものを強く求めているのだったと思う。

※

※

それではその時期に、新劇は何を考えていたのだろうか。観客の強い求めに十分に応じていたのだろうか。その頃から、新劇は何度か「新劇ブーム」という呼ばれ方をした時期をもった。ブームとはにわか景気のことである。景気自体がにわかなものでもあるのだが、新劇にもたしかにそんな華やきは来たとし、来てはたしかに去って行った。

当然のこととして、新劇が敗戦期に一番に考えたことは戦前の反省だっただろう。それは時期の経った今だから言

えることもわからないが、反省が行われたから今度こそという意気込みも生まれたはず……と今日のわれわれが想像するのはごく自然である。もしも反省なくしてあの敗戦の局面を一步でも踏み出せたとしたら、そっちのほうがよほど不自然だろう。

ついつい五十年たった今日から冷静にみてしまうのだが、新劇が一番に反省しなければならなかったのは、戦前戦中にわたる弾圧についてはねのけられなかった事実、弾圧につけ入らせるような舞台を作ってしまった事実についてではなかったかと思う。国家権力が世界最悪の法「治安維持法」を笠に着ての弾圧は、初めから新劇など大衆運動をつぶすためのものだったと考えれば、それははねのけるものけないものもない、とても今日の資料等から想像できるような生やさしいものではなかっただろう。

しかし、初期のプロレタリア演劇時代には、台本も舞台もスローガンを直かに叩きつける式の荒っぽい表現に走るることによって、弾圧につけ入れられる、先回りされて台本をズタズタにされる、公演中止を余儀なくされるといった目に何度も遇い、その末に後退せざるをえなかった。そこでその運動の反省に立ったればこそだ、一九三〇年代の新劇は——新築地劇団、新協劇団に代表されるように——戦争への最後の抵抗線としての数々の名作を打ち出すことが出来たのである。しかしその後、上記二劇団の強制解散、

関係者の検挙が来る。国家権力はそうして着々と翌年の太平洋戦争開戦を準備して行ったのだが、それゆえに戦後の新劇が真っ先にしなければならなかったのは、三〇年代新劇の評価とともに、その反省だったと思う。

二劇団に対する弾圧解散は一九四〇年八月のこと、その四カ月前に発令された興業取締規制によれば「脚本」については次の十項目を取締るとあった。すなわち、皇室冒瀆、公序良俗をみだす思想、嫌悪卑猥惨酷、犯罪助成、時事諷刺、国公親善阻害、教育上悪影響を及ぼすこと、その他低劣卑俗、公安風俗をみだすおそれがあるものなど。それではもう芝居など書くなというに等しかった。その規則の下で何がやれたかというにはあるにしても、しかしそこまで追い込まれていった事実を無視して、戦後新劇の第一歩はあるはずがなかった。

反省——といっても、単純なものではなかったと思う。問題はそれぞれに関連しながら多岐にわたっただろう。たとえば新劇の祖小山内薫は、築地小劇場のけいこ場で「歌舞伎を離れよ」「伝統を無視せよ」「踊るな動け」「歌ふな語れ」と叫んだ。その檄に代表されるように、新劇は出発の時から古典芸能、伝統と手を切ってきたという経過がある。そのこととも関連しながら、新劇が三〇年代初めから本格的なリアリズム探究に乗り出した時、ついに写真主義を超えられなかったという問題もある。それも戦後が引き継

ぐべき大きな課題ではなかったか。

見えるとおりを写し取って良しとする写真主義では、届かない世界がある。現実を単に客観的にだけとらえようとする時、現実の下におおわれた、矛盾の根というものは見えて来ない。今日では、さすがに写真主義のもつ限界はもう常識化しているといってもいい。しかし、それを越えたかどうかとなれば、多くの作品、舞台が示すとおり、今日依然として写真主義の前で右往左往しているのが実状と言いつても決して誇張にはならないだろう。

※

※

一九四七年三月といえど敗戦からまだ一年半だが、劇作家久保栄はいち早く『火山灰地』以来八年ぶりの戯曲『林檎園日記』を発表した。ここでは作品の評価にふれるつもりはないけれども、この作品は戦後新劇が何を反省したかをみるうえで格好のテキストとなってくれる。私はそれを帝劇で観た。一言で印象をいえば、綴帳が音もなくすうっと上がり、静かな舞台とそれ以上に静かな客席とを向かい合わせたのち、やがてまたするすると下りて終わったというものであった。

久保は沈黙を余儀なくされた八年間について、「何とかして筆をよこさずに、ここ何年かの嵐をやりすごそう。し

かしその時期を、仕事の上で空白にすまい、というただ一つの願いでした」と書いている。その八年間には、劇団の強制解散と前後して久保自身検挙され、獄中にいた一年数カ月という時間も、その後を受けた保護監察の三年八カ月も入っている。現在の私には右の述懐は痛いほどの気持ちで受け取ることができる。ただ、年端も行かない当時の観客だった私には——思い出そうとすればずいぶん細部のことまで憶えているにもかかわらず——作者が作品にこめた思いのたぶんほとんどを受け取ることは出来なかった。場違いな観客といわれればそれまでのだが、作家志望の主人公信胤が北の国の実家に帰り、戦争協力団体の懸賞小説に応募し、それを書き上げる、しかし悩む、という彼の行為の一つ一つというか、行為の全体は私にはまるでわからなかった。あるいはわかるように描かれてはいなかったのか。とにかく信胤が喪服をまとうようにして生きる姿も、彼が戦死した友人の清廉だった志に振立たされると述べるせりふも、最後に応募原稿を焼却するまでの経過も、つまり作者にとっては一番の肝どころが私には一向に伝わらなかった。

のちに戯曲を読んで、作者の意図はある程度理解できた。信胤を作者に近い人物と考えてもいい。主人公は小説を焼却することで「手をよこさずに」やりすごした身の潔白を結局は証明しようとしている。信胤はその通りを貫いた。

だが、なぜかそこところのリアリティが稀薄なのだ。この戯曲は久保栄の私戯曲（世の私小説にたいして）といわれもしたように、写真主義の手法の中に納まっている。信胤が自らの作物を焼き捨てる前に、それではなぜ書いたのか、つまり戦争協力に積極的であろうとしたのか、その、自分の内面のなかなか言葉にしにくい、しかしそれが自分を動かしてしまうという矛盾が表われてこない。ひいては、その時期の新劇の反省がリアリティには見えてこない。

久保栄には、自己の潔白をまず長年の「同志」に伝えた気持ちがあったのかもわからない。となると、それは私信になってしまふ。言葉足らずでも同志のあいだではたぶん理解してもらえるというような、そんな狭い範囲の一方的な思いこみが、主人公のリアリティを奪ったのではないかと私は思う。しかも、作者の思いを無理にでも押しつけようとする態度は、久保がわかってもらえなかったという相手にはど首をかしげさせるということにもなったのではない。言い方をかえると、久保栄は、自分の戯曲を手渡すべく想定した観客と、実際の敗戦期に劇場を埋めた幅広い観客との間にズレを生じさせていた。そのズレは、久保には思いもかけない、八年間の空白の大きさを示すものだったともいえる。しかし、それを久保個人の責任にしてしまつてはまちがうだろう。新劇全体が行ったと思われる反

省の甘さを、この作品は創造上の面から照し出したのだと考える。

それとも関連して、では新劇が古典芸能、日本の伝統と手を切ってきた反省はどのようになされたのだろうか。その問題には、新劇が近代劇の成立を目指すためにそうしなければ何も運ばなかっただろう事情はある。しかし同時に、それは日本の歴史と切れても仕方のない選択を意味した。古典芸能をいう時、当然それが日本の古典および精神につながることを考えれば、戦争中に執筆されて敗戦期に発表された加藤道夫の処女作『なやたけ』（一九四六年）は戦前新劇にたいする反省の上に立っていたといえる。ただし、発表されるやいなやただちに着目したのは新劇でなく、古典芸能の歌舞伎であった。この作品は古典『竹取物語』を発想の下においた。いわば文学史上に残る作品が題材だった。

同じく、戦争中に執筆され敗戦期に発表された木下順二の民話劇『二十二夜待ち』『彦市はなし』（一九四六年）、『鶴女房』などは、『なやたけ』とは対照的に農民によって語り継がれた民衆の文化遺産を題材にしていた。『鶴女房』は周知のとおり戦後に『夕鶴』（一九四九年）として生まれ変わるが、作者はそれについてずっと「われら祖先との合作」という言い方をしていた。木下民話劇もしばしば歌舞伎、能、狂言の舞台上で上演され続けるが、出発点

はといえばこれも戦前新劇の、ひいては日本近代劇にたいする反省に基づいているといつてよかつた。

木下順二はそののち、自作『風浪』や『山脈(やまなみ)』を自然主義的、もしくは写実主義だと批判して、そこから超える努力に長い時間と多大なエネルギーを費したのだが、その点にいち早く気付いた理由も祖先との合作経験を通して、近代以前のものを安易に切り捨てた日本の近代化へ、批判をもったことであつたと思う。その意識を土台として、木下民話劇は次々書かれたにちがいない。当然のこととしてその仕事は、西欧直輸入の写実主義ではとらえきれないものを映し出した。従つて、木下順二が写実主義を超えんとする戦後の歩みは、この日本に、新たに、あるべき近代の道をつけて行く足取りだつたともいうことが出来る。

俳優にしても、そのような意識の下に創られた作品を、手持ちの写実主義だけで演じ通せるはずはなかつた。小山内薫、土方与志を先生として新劇一筋に歩いた山本安英が、戦後に木下作品を通して、能、狂言、歌舞伎の分野の人々との「合作」を試み続けたのも、写実主義を超えようとする努力の表われだつたと思う。そのことは、繰り返し上演された『夕鶴』『子午線の祀り』の舞台のその都度その都度の成果が物語っている。

また角度を変えてみる。アメリカの劇作家アーサー・ミ

ラー作『セールスマンの死』(一九四九年)が日本で初演されたのは一九五四年だつた。特に戯曲の手法が注目された。簡単に言えば、現実の主人公が現実にいるままで意識の世界に入つて行く。すると主人公の意識に上る過去の時間空間、そこにいた人々が、意識の中だから飛躍もし、脈絡もないままに浮かび上がる。今でこそそういう手法は当たり前のことになつたが、当時の日本では珍しかった。外国から入る新手法が日本ではすぐに手垢にまみれ、常識化して、しかも何も生まない点は問題のあるところで、それは明治以来の日本がとつた近代化のありかたとも関係が深いだろう。一言だけ言いさえすれば、外国の新しいものを、それがどうして出て来たかその歴史にも必然性にも目を向けずに、新味だけを摘み取るうとする、それが日本式だつたということである。

ミラーの手法にしても、ぼつと出て来たのではない。三〇年代のアメリカでは写実的リアリズムが行き詰まつた所に、ソートン・ワイルダーの『わが町』(一九三八年)が出現した。ワイルダーは演劇を本来の姿に復帰させたかつたと言つたというが、その手法の影響からミラーやテネシーウィリアムズも出て来たのである。

劇団民芸では『セールスマンの死』を何度となく再演したが、一つにはその手法にたいして強い関心を持ったためだろう。戦前アメリカにおいて、消費社会の花形であるセ

ールスマンを職業とした主人公は、一生働き通した末に家族の崩壊と借金と自らの孤独を認めるほか何もなかつた。結果として自死を選ぶ。それではいけないのだというミラーのアメリカへの批判は、戦後日本が消費社会へと移行するにつれて、六〇年代、七〇年代とますますわれわれに共感されるものとなつて行つた。その共感は、今もまた作品内容と日本社会の接近もあつたけれども、それにもまして劇団のとつたリアリズムの確立という姿勢が、劇空間を大きく開放させるミラーの手法といひ出合いを果たし、次第に芸術効果を上げたことも大きかつたと思う。先にみたワイルダーの意図と同じに、ミラーも演劇本来への復帰を考えていたからである。

大ざっぱながらも戦後を振り返ってみようとするとき、敗戦期に取り組まれ、また取り残された問題の一つ一つが、依然として今日の問題であることがよくわかる。戦後半世紀の新劇はどんなに先を急いだように見えても、足下を掘り下げ、演劇の本質に近づこうとした仕事だけが、僅かに足跡を刻んだにすぎないだろう。計算機のスピード化が即技術の発展につながるように手早くは、人間が体を使って創る演劇の問題などは片付かない。

手法もそうだが、いい作品であればあるほどテーマにしても、長い時間をかけなければ本当の顔は見せてこない。敗戦期にアメリカ現代劇の上演が多かつたのは日本が米

軍占領下にあつたこと、そのために新しい資料を入手しやすかつたこと、それに前出のようにアメリカの演劇は最盛期にあつたなどがあると思う。

スタインベック作『二十里と人間』(一九三八年)が戦後日本の実験劇場で上演されたのは、一九五〇年である。主人公レニーは大男で力持ちだが、おとなしくて、純情で、小動物をかわいがつたりするために、現代人にはない魅力が感じられる。ただ、もの覚えが悪くて「阿呆！」呼ばわりもされ、農場を渡り歩く仕事も長く一カ所では勤まらない。その放浪に近い彼を助けるのがテキサスに幼な友達ジョージ。二人はいつか自由な土地に小動物を飼つて暮らす夢を語り合う。しかしそんな夢がたやすく実現するとは考えられない。果たして、レニーは殺人事件に巻き込まれ、結局彼をリンチから救つてやりたいと願うジョージの手で死んで行く。

日本初演では、この作品は人間の善意、友情を訴えるものと評されて、さして評判にもならなかつた。そういうテーマも含まれてはいる。しかし、それから四十四年ぶりに昨秋俳優座劇場プロデュースで上演された時に、この劇はもっと深いテーマを持っていることが明らかにされた。私はその感想を拙稿「人間不平等起源論」を読みながら(悲劇喜劇 一九九五年一月号)にも書いたのだが、レニーは十八世紀の思想家ジャン・ジャック・ルソーが説いた

人類最初の未開人、自然児とウリ二つなのである。体だけが道具だった未開人は、森を放浪し、斧の代わりに手首の力で強い木の枝を折り、馬とともに走る体力をもっていた。しかも、他の動物とちがい、人間だけは自然の命令に従うか抵抗するか選択の自由をもった。つまり彼らは通りがかった穴ぐらに一夜の宿を求め、男女は偶然に出遇って別れた。言葉も住居もたず、戦争も同盟も知らない彼らは不平等からも遠く隔たっていたし、明日のことに煩う必要もなく、物事を記憶する手間もいらなかった。従って、今日の人間から「阿呆！」といわれてもやむを得ない。

ルソーは「彼は自然状態で生活するために必要なものはすべて本能の中にもっていた。そして社会で生活するに必要なものだけを磨かれた理性の中にもっていた」と想像し、自然は人間にその理性の支柱として「憐れみの情」を与えたという。憐れみの情は社会的美德を生み、小動物をかわいがる気持ちもそこから生まれる。とあればレニーとそっくりである。スタインベックが頭の中に直接ルソーを描いたかどうかはともかくとして、四十四年前にはそこから善意と友情しか引き出せなかった日本の舞台が、今日やっとそこまで掘り下げ得たところにも、万事演劇には時間がかかるということ、しかもそこに演劇のよこぎがあるというところをつくづくと感じさせる。

ルソーの『社会契約論』を始めとする思想は、やがてフ

ランス全土に広がり、死後十一年目に起こるフランス革命を支え、さらに世界中に充ちた嘆きの声を自由の叫びに変えて行つた。ルソーはまた前世紀イギリスのジョン・ロックの影響を受けた。ロックはまた……。週ればルネサンス、ギリシア、ローマ、どこまで行くかわからない。恐らくレニーはそれほど遠くからやって来た人物なのだろう。敗戦五十年を考える時、敗戦期にあったべきだった反省を一層激しく引き継ぐこと、そしてそのために、ワイルダーやミラーや日本の優れた演劇人がめざした本来の演劇への道を、われわれも探究し続けなければならないのだと思う。



## 萩坂桃彦さん(演劇会議前編集長)逝去！

### 萩さんの穴はあまりにも大きい

東会議議長 こばやしひろし



萩坂桃彦氏告別式。1995. 3. 15 川崎市立津田山葬祭場  
左端・長男 心一氏 中央 登久子夫人

である。萩さんの最後の手紙が今私の手元にある。

「こばやしさんに限って私の実情を報告します。実は昨年十月末頃ひき込んだ風邪が三ヶ月近くも治癒せず、食欲が進まず、それでも酒だけは(といっても一合二合位)飲み続け、正月明け、到頭ダウンしました。一月十二日病院にカミさんに連行されてゆき、胸のレントゲンを撮ったところ、とくに左肺の下部に水が溜っており、即刻入院となり、一月十四日病院のベットに入りました。

私はは数年前より糖尿病があり、アルコール性肝炎の兆候があり、丁度一年前の例の交通事故による頭部胸部の打撃などで相当に壊れていたものと思います。

まだいろいろな検査が終わらず、別の病院に行かなければならないCT検査が残っており、どうやら常態をとり戻して装束にでられるのは三月になりそうです。カミさんの予想は微熱性老人の肺炎です。……」

これが出たので、東西の作家会議、全演の創造問題にもふれ、最後に「都合あって私の入院は隠してあります。こばやしさんも一存に納めておいて下さい」隠してなんて

萩さんが逝った。とうとう逝った。いつかは別れなければならぬと覚悟はしていたが、とうとうその日が来たの

若い人は読める人がいないかもしれませんが、まだまだ死ぬなんてとてもとても、春にはもう一度芝居を観て回れを身体になると信じておられたのです。しかし、私は奥さんを通じてリンパ線の悪性腫瘍と聞いていたのです。年令も年令であり、私は絶望的になりました。

二月四日か、五日だったと思いますが、城谷さんから電話があり、「病院から会う人にはしらせて下さい、いつ危篤状況になっても不思議ではないといわれた」というのです。私は予定がぎっしり詰まっていたので、とりあえず九日に病院を訪ねました。私は下手すると間に合わないかもしれない、むろん間に合ったとしても面会謝絶だろうから遠くからお顔を見るだけでお話は無理だろうと思って病室に立ったのです。ところが奥さんがここにこして出て来られました。病室では萩さんも思ったより顔色もよく「いやいやわざわざ遠くから、昨日早川さんと境野君が来てくれましたよ。フフフ……こんな状態で」

入れ歯がないので話される言葉は聞き取りにくいのですが、三十分も話したでしょうか、私より萩さんが一方的に退院してからのやりたい仕事を、夢を語られるのです。演劇会議の別冊号として作品集を出そうというのです。奥さんは萩さんの話を聞きながら足の腫れむくみも引いたといっって萩さんの足を揉んでおられました。ひょっとしたらこの状態なら回復に向かわれるかもしれないと瞬間思いま

した。私の知人で同じ病気で治癒しているからです。私をしてそう思わせるほど、やりたい仕事をいっぱい持っていたのです。最後の最後まで萩さんは青年でした。現状に満足しない。前へ前へと頭が回転するのです。酸素吸入の個室にいてこの気力、考えられないことです。これが演劇会議八十五号出し続けた力だと思いました。

黒さん（黒沢参吉）「わが演劇遍路」を見ると黒さんとともに昭和十一年川崎協同劇団の創立に参加したのが二十二歳とあるから戦前戦後六十年間にわたって地域演劇の運動にしがみついていたのだから、まさに地域演劇運動では生き字引で他にこんな人は考えられません。全演運動が運動として今日機能しているのは他でもない、黒さん萩さんのコンビがあったからに他なりません。黒さんは三つ年下でしたが、二人は極めて対照的だったと思います。黒さんは暖かく暖かく人を包む人だとすると、萩さんは鋭く歯に衣を着せず本質に迫り分解する人だといっっていいでしょう。

だから黒さんはいいいところいいところを無理に探しても褒める方ですので、全演の創立期には組織者として大きな役割を果たしたのです。黒さんはうまい芝居を否定し、素人の芝居の良さを常に強調していたのもそのためだったのです。しかし、萩さんはそんなに甘くありませんでした。常に創造の本質に鋭くメスを入れ、観客との関係で舞台が

成立しているかどうかを見極め、その欠陥をえぐりだす、批評家の立場を明確に打ち出したのです。だから全演の現状にも全く満足していませんでした。そしてそれが言える人であり、その一言一言に説得力があったのです。いうまでもなく戦前からの蓄積は他の追隨を許しません。それだけでなく大変な読書家で、記憶力も鋭く引き出しにいっぱい詰まっている人だったからです。こういう人がいるかいないか、言葉で表せません。いつまでもいつまでも生きていてもらわなくては困る人なのです。だれもこの穴を埋めることは出来ないのですもの。

私はいつも言っていました。演劇会議は全演運動の動脈の役割を果たしている。その演劇会議を八十五号出し続けたということは萩さんの力以外にないのです。そして八十五号出すことによってこの演劇会議が演劇運動史上に残る貴重な仕事になって来ました。だからこそ、新しく八十六号を生み出すとするエネルギーが生まれてきたのです。しかし、それをさらに八十号重ねることができるか、これは大変な仕事です。そして始めて萩さんの苦勞がわかると思います。萩さんなくしてこの演劇会議はなく、演劇会議なくして全演の運動はありません。ということは全演の運動で萩さんの果たした役割がいかに大きいかかわかると思います。その萩さんが逝ったのです。



萩坂桃彦氏と萩坂夫人（登久子さん）

全リ演の運動で黒さんに続いているの大きな大きな穴です。この穴はみんなの力でしか埋めようがありません。全リ演傘下のすべての劇団の力で埋めるしか萩さんの穴は埋められないのです。そのためにもこの演劇会議はどんなことがあっても私たちは続けなければなりません。それこそが萩さんが喜んでくれることだと思ふのです。萩さんを安心させるために残った私たちが何をすべきか改めて考えましよう。そしてみんなの力で大きな穴を埋めるために頑張ります。萩さん頑張るよ。

## 引き継ぐ新しい世代を

西会議議長 仲 武司

三月四日、城谷さんから萩さんの逝去を知らされ、一瞬言葉を失った。

身体の調子がよくないと、耳にはしていたが、何かその隙を突かれたような衝撃だった。

萩さんからの年賀状は例年になく長い文章だった。千田是也さんのことから……もう八十一歳の太台にのりボツボツ覚悟しておいた方が……だから今年はいくつかまとまっ

たものを書こうと思う……。そして……何とか大阪の芝居もぜひ見たい……。関西芸術座も新しい時代に入り健闘を……とあった。

機関誌「東リ演」から、東西合同機関誌として「演劇会議」に移行して二十八年。その間、八号から八十五号までを生み出した「演劇会議」の存在は、萩さんそのものの存在であり、「演劇会議」は萩さんぬきにはありえなかったし、それは演劇史の証人ともいえるものだった。そして、さらに「演劇会議」が新たな歩みをめざして難産の上、漸く次の世代にひきつがれた矢先、まさにその矢先、萩さんは逝った。

編集プラン。原稿依頼と督促。原稿整理。煩雑な埋め記事。印刷所通い。校正。荷造り・発送。誌代請求・督促。会計。そして自らも「演劇雑感」なる数劇団の劇評を書き加盟劇団ではとどかない分野をフォローした。また時にふれ酒脱な論評、エッセイを執筆。文字通り有言実行の萩さんの一徹さを到底他が真似ることは不可能であった。

それだけに、いろんな会合では、時には毒舌まがいの辛辣さで叱咤し、遂には萩さん節がない集會は一種の物足りなさを感じるまで言われた。

いつか、萩さんが眼をわずらっていた時、見舞いをおねて、次号の原稿について電話したところ、「西」はどうなっているんだ！ と激しい調子の言葉が返ってきた。私は

聞く機会をなくしたのが心残りである。

本当に長い間、ご苦労さまでした。お疲れさまでした。さようなら。

「西」は毎号編集会議を持ち、プラン表は送っているはずと思わず激しくやり返したが、萩さんに向けて初めての声高かな反論は、気まずさだけが残った。ところが翌日、萩さんからビールを飲んでいたので……、失礼したと電話があり、その翌日再びプラン表のこと失念していたのでと丁重なハガキがとどき、その配慮に、逆に恐縮したことがあった。

まさに、阿修羅のような萩坂編集長だった。その背骨には、確かなリズム演劇への志向が貫かれ、その運動の貴重な媒体として「演劇会議」があり、全加盟劇団の血管の役割りを果たし、萩坂さんは、そのために半生を捧げた。だが、この数年、疲れを口にする回数が増したが、後事を託す人材に悩み困惑する私共を知るあまり、萩さん自身もその狭間で揺れ動いていたようだ。その間も、萩さんの身体は深部で病巣が進行していたのであろう。

黒沢参吉さんの「わが演劇遍路」の終章に、比叡山で開催した東・西合同ゼミで、萩さんの中に黒沢参吉さんと私の三人の、コップを片手に肩を組みあっている写真が載っていた。

先に黒さんを失い、今また萩さんが逝った。名古屋の若尾正也さんを含め、私たちは全リ演を創り支えた先輩たちを失ったが、それをひき継ぐ新しい世代が台頭しつつある。たゞ萩さんに、新たな「演劇会議」八十六号の、感想を



1995年 夏 関東ブロックゼミで講演する萩坂桃彦氏

◎ 神戸・阪神地区劇団の状況

加盟劇団

劇団四紀会（神戸市）連絡先＝梶 武史 ☎ / FAX 078-911-1513

稽古場＝ビル内外の壁に亀裂・剥離、大修理が必要（時期未定）

倉庫＝使用可能。道具類＝大部分廃棄

活動＝4月公演中止、夏・冬公演と演劇教室卒公ともに再構築中

劇団どろ（神戸市）連絡先＝合田幸平 ☎ 078-731-0710

稽古場＝大修理の要（天井梁破損、中二階全壊） 道具類＝多数喪失

活動＝未定

神戸職演連（神戸市）連絡先＝洲崎雅晴 ☎ 06-468-8571

事務所＝損害軽微

活動＝未定

劇団かすがい（尼崎市）連絡先＝樋口伸広 ☎ 0798-46-9564

事務所＝損害軽微

活動＝未定

非加盟劇団

劇団道化座（神戸市）連絡先＝須永克彦 ☎ / FAX 06-927-5933（移転先）

稽古場＝全焼 活動＝仮事務所を大阪に設置して継続

劇団青い森（神戸市）連絡先＝劇団 ☎ 078-412-6180 FAX 078-412-6181

稽古場＝使用可能 活動＝継続

1名重傷（経過良好）

劇団 七（神戸市）連絡先＝戸野本和久 ☎ 0794-21-7270

稽古場＝全壊、道具等損傷大 活動＝未定

劇団風斜（神戸市）連絡先＝蓬萊裕史 ☎ 078-921-2345

倉庫＝全壊 活動＝賃貸稽古場（公共施設）使用不能でメドなし

ピッコロ劇団（尼崎市）連絡先＝劇団 ☎ 06-426-8088

損傷軽微、活動継続

劇団螺旋館（尼崎市）連絡先＝嶋田三郎 ☎ 0798-65-4607

損傷軽微、活動継続

劇団神戸（神戸市）

稽古場＝使用可能 代表者夏目俊二氏宅は立入禁止で避難中。

劇団ふおるむ（芦屋市）連絡先＝小林哲郎 ☎ 078-412-3008

事務所＝全壊、道具損傷大

活動＝稽古場（公共施設）使用不能でメドなし

劇団自由人会（東灘区）連絡先＝ ☎ 078-793-2265

事務所＝全壊 活動＝仮事務所を設置して再開

兵庫県劇団協議会仮事務所

673 明石市東野町 1-5-1009 ☎ / FAX 078-911-1513 梶 武史 方

# 神戸大震災

## 震災地劇団からの報告



長田区

全て焼けた鷹取商店街



# たまげまなドニマ

一九九五年二月十九日

劇団四紀会 梶 武 史

私の家は、淡路島が一望できる海岸近くのマンション十階にある。眼下に広がる街並も、夜空に輝く星座も、明石海峡を行き来する船舶も、現在建設中の巨大な大橋も間近にみえる、眺望だけが自慢の家だ。

一月十七日未明、人間と家具とが攪拌されたような長い時間が通り過ぎた。ライターの小さな炎ですかしてみると、家中のありとあらゆる物が崩れて足の踏み場もない。暗闇のなかでしばらくは茫然としているばかりであった。

だが明るくなっても、あたりは静まり返っている。不安になって階段を降りる。道路は陥没と隆起のデコボコ道になってはいいるが、倒壊した家屋はない。やがて見知らぬ人から淡路島北部が震源地らしいと聞いたのだが、その淡路島から至近距離のわが家以上に神戸や阪神が被害を被っているとは想像もしなかった。

やがてテレビに映像が流れはじめて、その惨状に愕然とした。炎に包まれている街並に記憶がある。友人や仲間の家がある。あわてて電話器にかじりついたもののほとんど通じない。公衆電話が通じやすいと聞いて何度も列をつくる。犠牲者の数が分刻みに倍増し、交通網は途絶している。



ビルの内部



稽古場入口附近

——劇団四紀会——

全貌をつかめないいらだちのまま時が過ぎる。とりあえず二十日現在で神戸と阪神地区の被災状況の第一報を全リ演事務局と西会議各集団に送る。

西の議長団から、仲間から、四十年ぶりの旧友から、電話が届くようになる。全リ演事務局長の城谷さんからはカンパ活動を始めた、来年夏の全リ演演劇フェスティバルの神戸開催を諦めないで、と檄が飛ぶ。劇団大阪から復旧支援の申し入れもあった。

二十二日になって、ようやく劇団員と教室生あわせて七十名の無事を確認、神戸・阪神地区の各集団の状況も次第に判ってきた(別表参照)。兵庫県劇団協議会の事務局情報として、二月一日現在、十一集団で重傷者一名以外は全員無事、と関係各方面へ連絡する。

四紀会では負傷者はなかったが、全壊・半壊で住居を失った者八名、一部損壊五名で、いまま避難所生活を続けている者がいる。倒壊した家屋から救出された者もいる。大きなお腹を抱えて六甲道から明石まで二十七キロを歩き続けて避難した新婚の夫婦劇団員もいる。運営委員会ではこれらの仲間に団内カンパを送ることを決め、二月十九日現在、五十五万円が集まった。

私は二月二十五日になって稽古場に向けて出発した。神戸の街は六甲山脈によって中心街と新興住宅地に二分され、中心街への西の入口に須磨海岸がある。六甲山脈が

海にせり出したそこには源平古戦場に名高い一の谷があり、大都市に残った唯一の海水浴場がある。公園の松林には演劇フェスティバルの宿泊候補の建物も見える。

その須磨海岸を越えると街の風景は一変する。地震波は神戸の中心街を襲撃したのだ。須磨区から長田区、兵庫区、中央区へ、東へ進むほど凄惨な光景が広がってくる。崩れ、ひしゃげた一軒一軒の家から悲鳴が聞こえてくるような錯覚に襲われる。一面の焼け跡は五十年前の空襲の記憶と重なって、黒焦げの死体の山が脳裏をかすめる。因縁めくが、神戸大空襲は三月の、ちょうど十七日の未明であった。

稽古場近くの三宮は壊滅的だ。巨大なビルが軒並みに崩れ、傾いて道路にのしかかっている。じっと見ていると垂直水平といった平衡感覚を失いそうだ。瓦礫の山と垂れ下った電線や看板を巧みに避けながら、危険表示のあるビルの蔭を平然と歩いている人々は恐怖の感覚が麻痺してしまっただろうか。

辿りついた元町駅前に稽古場ビルは確かにあった。三宮とは五百メートルくらいだが、周辺の被害はそれほどでもない。だが稽古場ビルの外壁には危険印のX亀裂が無残に走っている。張り巡らされたロープを潜って恐る恐る階段を昇る。内壁は広い範囲で分厚いコンクリートが剥落して鉄筋が見えている箇所もある。薄暗い廊下はまるでお化け屋敷だ。



片づけはじめたが手がつけられない (劇団四紀会)

どこから手をつけようか

稽古場の扉を開くと、バカに明るい。部屋の間仕切り板や棚が全て倒れて、陽光が部屋一杯に差し込んでいた。床面に投げ出された照明器具、音響器材、衣裳、本、ガラス片、倒れた冷蔵庫などをヨロヨロ乗り越えながら、通電時の漏電に備えてブレーカーを切る。ビルのオーナーの話では補修可能らしいが、時期は未定だ。ライフラインが回復しても恐怖感と同居することになるだろう。

倉庫は頑丈な工場の一隅にあるが、所狭しと積み上げた道具は崩壊し、貴重な小道具など大部分を廃棄処分しにせざるを得なかった。

今年の公演計画は、三公演と演劇教室卒業公演の計四回であったが、とりあえず四月公演を中止し、予定していたホールは他の文化団体との共催行事に活用することにした。九月公演は「戦後五十年・第百回記念公演」として、神戸市民の歴史と暮しを描く新作を計画していた。だが執筆中の内田昌夫宅が全壊した。内田には執筆継続に意欲はあるものの、苦境に陥っている。十二月予定の在神劇団の連続公演「神劇まわり舞台」は、ホールが使用不可能になったので、主催者である神戸市民文化振興財団と対策を協議することになる。演劇教室卒業公演もホール使用の見通しは立っていない。

十九日現在、稽古場の水・ガスは止まったままだ。交通網は急ピッチで回復しているものの家庭と職場と稽古場の

距離はぐっと遠くなった。被災して神戸を離れた劇団員も少なくない。神戸の中心街だった稽古場周辺は、夜、無人の街になっている。つい一箇月前までフル回転していた稽古場は空家同然になった。当面、少数の会議は被災を免れた劇団員の家で、全員は日曜日の昼間に稽古場に集まって計画の再構築に知恵を傾けることになる。

今回の地震はさまざまなドラマを生み出した。当初は単発的でバラバラだったボランティアたちが、自主的に仕事を担い、リーダーを選び、次第に援助する者される者の立場を超えて連帯し協同し、避難所協同体・地域コミュニティを形成してゆく。言葉としては死語になりつつある社会主義の思想が息吹いている。

また見知らぬ人が倒壊した家屋から人を救出し、老人や病人を背負い、普段は会話もない地域の人たちが協力し合い励まし合う。医療、教育、福祉といった恵まれない現場の人たちが不眠不休で働き続ける。

こうした無数の小さな行為がどれほど多くの人間の良心を刺激し、人生の意味を考える契機となり、生きる希望と勇気を与えてくれたことだろう。

こうした無数のドラマに比べて、私たちの創る演劇のなんと非力で貧しいことか、と考え込んでしまう。

その一方で、国や自治体の無力をこれほど感じたことは

ない。住民の命と暮らしを守る本来の機能を全く果せないのだ。もちろん自治体の職員も被災者であり、交通網は途絶していた。しかも百五十万市民のうち二十数万人が避難所に押し寄せるほどの大災害なのだ。だが災害をここまで大きくしたのは、経済効率、市場原理に浮かれた国や自治体の政治姿勢にあることはもはや誰の目にも明らかだ。過去の災害経験も科学者の警告も全く生かされていない。政争の道具にさえしている国会論議に怒りがこみ上げる。

兵庫県も神戸市も、地域住民との協議によって防災都市計画を策定するという。だが国も自治体も、従来の発想を根本的に転換しなければならない。また、させなければならぬ。街づくりの思想は文化の問題である。学術、教育、福祉、医療はもちろん、文化予算が〇・一%にも満たない文化後進性を脱却しない限り、住みよい街づくりは幻になるだろう。私たちもまた今回の災害を教訓にして、それぞれの地域で新しい街づくりの運動に参画しようではないか。被災地の文化団体の前途は険しい。交通至便の区域は壊滅状態だし、被災を免れた公共施設も避難所または救援隊の宿泊所になっていて、市民に開放される日は明らかでない。会議室、ホール、稽古場、倉庫など、地震以前からの懸案事項はいっそう深刻になるだろう。

演劇集団の多くが稽古場や道具を失っている。そのため従来以上に緊密な協力関係が必要になり、具体的方法を模



崩れた（倉庫）道具を片づけはじめる（劇団四紀会）

索し合っている。だが被災者共通の願いが、家族が住む家であり将来への希望であるように、私たちもまた仲間が集まる稽古場と、地域の人々と語り合う場としてのホールの見通しが切実だ。こうした願いを他の文化団体と連帯して自治体へ申し入れるが、実現は容易ではない。地震後一箇月のいまなお、劇団員個々は生活に追われ、活動再開への確かな目標と見通しが無い。集団運営の中核部に当初の緊張が弛緩して、活動再開への意欲が萎えることが何よりも恐ろしい。被災地劇団が自立し協力しながら活動を再開すること、そして名もない神戸の人々が残したドラマを源泉に、私たちの新しい演劇を創り出したい。そんな思いに身を焦がしている。

## 阪神大震災庶民の記録

劇団四紀会 久 語 孝 雄  
本名・久保孝志

阪神大震災で大きな被害を受けた西宮、芦屋、東灘、灘、三宮、長田は六甲山脈の麓に沿って展開している町である。それが被害を大きくした一因であるともいわれるが、景観のよい町並みである。

東灘にはJRの駅が二つあり、灘には二つあって、「六甲道」はその真ん中の駅で快速列車が止まり、東の副都心

とも言われ、商業地で神戸大学があり近代的な装いを整えてきた地域だ。

私の家はこの「六甲道」駅から歩いて六分ほどのところにある。駅前地域からちょっと外れたところにある戦災を免れた昔ながらの下町である。

私の身近なおとなり付き合いの範囲は、町内八分の一ほどの範囲だ。そこには働きものの左官職の榎本さんや、高級着物専門の染み抜き屋の山本さん、室内装飾のお店を持つ林さんや、鉄工所を営む今井さんがいて、私の家のお隣には尾無さんがいて、田中さんがいて、「ござった、ござる」と言葉の端々に妙なイントネーションを持つ橋爪のおばあさんが住んでいる。北側の通りに面して中安さんとか、有馬さんが住んでいる。普通の人が住んでいて、普通の暮らしがずっと行われていた。

一月十六日の夜、私は遅くまで劇団の次の公演の台本の書き直しをしていて一小时前に床に就いた。

突然のことであつた。突然背中中に強い突き上げるような衝撃を受けた。それが最初だった。

反射的に飛び起きた。屋根がすぐに落ちてきた。同時に激しい揺れ、囲の壁や建具が一気にへし折れて、碎けるのが聞こえた。足元は経験したことのない揺れを捕らえていた。「大地震だ」直観した。猛烈な土埃と折れ重なった柱や鴨居や壁土の中で、家族の安否が気になった。うわずっ

た声で「かあさん！」「かあさん！」……娘の名も呼んだ「和子！」……二度三度、ますますオクターブが高くなる。やがて「はい」という返事。娘も返事を返して来た。「生きている」これで地震の恐怖は七割方きえた。

理性が戻って来た。猛烈な都市ガスの臭いがしてきた。火災の恐怖が全身を走る。返事はしていたが、落下物におさえつけられている可能性は高い。火が出ると助けることが出来るだろうか。そう思うと、とにかく外への脱出路を確保しなければと思った。この地震だ。近所は同じように徹底的にダメージを受けているに違いない。横に逃げ出すことは不可能だ。上に出ようと決めた。一刻を争うので、しゃにむに手探りで太いものを見つけては上に向かった。あちこちぶつかって、体を這わせて、夢中で外に向かった。暗闇の中ではあったが外の景色が目に入った。体をねじって外に出た。すぐ、妻や娘を助けに戻ろうとしたが、下に戻るのとは容易なことではない。足場が見つからない。足は手ほどに器用ではない。「こっちだ！」「聞こえるか！」「声のするほうに来い！」……「どこです？」困った。右とも左とも言えない。「ここだ、ここだ！」と言って、やたらと振り回していた手に手が当たった。もう一度当たった手をつかんで一気に引っ張り上げた。妻が出てきた。「娘だ」振り返ると、娘は自力でどこからか這い出てき

ていて立っている。

崩れ落ちた屋根に立って周囲を見ると、微かな早朝の光のなかに壮絶な風景が見えた。JRの高架は落ちて、電柱は折れ、倒れている。JRの架線を保持している鉄柱は横に寝てしまっている。町内の家は殆ど崩壊してがれきになって潰れてしまっている。通りも、路地も完全に崩れ落ちたがれきに覆われて失われてしまっている。大きな家だった角の昔からの酒屋も、風呂屋も潰れている。目を疑った。この光景は一生脳裏を離れることはないだろう。

潰れた屋根の上で、脱出の通路を捜してウロウロしているうちに、北側の商店街から上がっていた火の手が本格的になってきた。南側からも火の手が上がった。危険を覚悟でとにかくその場を離れるしかない。大きな通りの方向に進むことにした。何度も、がれきの中に落ち込む恐怖を味わいながら、やっと大きな通りに出ることが出来た。

「おじさん、助けて！ お父さんとお母さんが埋まっている」二十才くらいの男の子が助けを求めて来た。有馬さんところだ。走って行ってみると、一階は完全に潰れていて、その上に傾いて大破した二階が乗っている。その八〇センチほどになった一階にいて、生きているのだと言う。なすべき方法も浮かんで来ない。するとその隣の人が、子供が二人、埋まっていると言ってくる。どうしようもない。

私の路地の方でも、田中さんの上の子が埋まったままで、弟が助けようとしてがれきの中に戻ってしまった、と言っている。右隣の人はおじいさんが出てこないと言って救出に力を貸してほしいと言ってくる。とても一人で全ての人の要請に応じられない。右往左往するばかりだ。

かなり強い余震が来た。足は素足だった。道路はいつの間にか自力で脱出してきた人たちが、目や口や鼻の回りを真っ黒にして寒さに震えながら立っている。

消防自動車走って来た。私は中安さんを誘って自動車の前で手を広げて自動車を止め、消防手に助けを乞った。「火を消さなければ」消防手は運転手一人になっていた。

リュックサックを背負った中学一年生くらいの女の子が、私達の前を行ったり来たり、倒れた家で塞がってしまった路地の奥をのぞいたり、また遠くに行ったりしていた。

「誰を捜しているの」「おばあちゃん」。私の妻が言った「橋爪さんのお孫さんよ」。それで、橋爪のおばさんがいないことに気付いた。だれもかれもが精一杯で自分を支えている。男は埋まった家族や隣人の救出で必死だ。この子の目にはその状況が写っていたに違いない。「助けてください」も言えず、立ち去ることも出来ず、ただ路地の入り口をウロウロ歩き回っていたのだ。

その頃、私達家族の身を案じて近くの高台に住む、劇団

人力では手のほどこしようがないような状態で、まだ完全にひしゃげたがれきの下に二人いた。

東灘区で文化住宅を借りていた長男が、足を引きずりながら帰って来た。東灘区もひどい状態だった。長男の借りていた住宅も、二階の座敷が一階の床六〇センチまでずれ落ちてきて、二階の冷蔵庫がズドンと天井から落ちてきたそう。私にしてみれば無事でさえいてくれればそれでも良かった。

寒さは厳しかった。駅前の家内の店の状態がきかりになってきた。寒さを凌ぐ場所として、店の車があれば、それも利用できると思った。鍵を取りにわが家に戻った。驚いた。プレス機で押し潰したようになっていた。これでよく助かったものだ。娘のいた部屋はガラスの建具と壁土が重なった上に屋根が落ち込んでいる。ふとんを被っていたのが怪我を防いで、幸運が隙間を作ったらしい。柱が一本立っている。柱を上方向へ引き千切ったようなすごい切り口だ。鴨居がかかっていたと思われる柱の切り口は、大工さんが外したように綺麗に外れている。柱は不思議な姿で空に向かって直立していた。もう一本の柱は落ちた屋根を貫いて直立していた。

鍵を捜せる状態ではなかったので諦めて、取り敢えず近所の人たちを、比較的丈夫にできている家内の店の方に避

員の三上さん夫婦が駆けつけて来てくれた。この三上さんがすぐに橋爪さんの救出に向かってくれた。田中さんのところ、伊藤さんのところ、つぎつぎに近所の人達が、近所の人や家族に救出されてきた。近所の人達は爆発的な連帯力を発揮していた。

完全な崩壊から免れた人の家から毛布やシーツが持ち出されてきた。寒さに震えていた女性や子供はそれらのものにくるまって、道端に腰かけて成り行きを見つめるしかなかった。

余震は相変わらず起こっていて、がれきの中に入った三上さんが案じられた。どこかの、誰かの安否を気遣って工事現場の服装の人達が通りかかった。私は援助を請い、三人、四人と橋爪さんの家のがれきの中に人が入って行った。それから三十分経っただろうか、四十分だったろうか、橋爪のおばあさんは助け出された。腰の骨を折っていた。土だらけのふとんにくるまれて路肩に置かれていた。女の子はおばあさんの頭の前で立ちつくして、救助を待っていた。地震が起こってから五時間が過ぎたのだろうか。働きの左官職の榎本さんの奥さんが助からなかったという知らせが入り、近所の女の人の目がみるみる涙で曇った。榎本さんが向こうの坂道を下ってきて、「駄目だった、駄目だった」と言っていて、目の前を通り過ぎて行った。かけてあげる言葉がなかった。染め物職の山本さんも助からなかった。

難してもらったことにした。歩いて六分ほどの道のりは、ひどい状態だった。北側はまだ火が上がっていた。周辺の建物は無傷なものはなく、木造の家は殆ど全壊して私の家と同じように押し潰されていた。JRの「六甲道」は高架が



曲がりくねった線路

落ちていた。六メートルはあった高架が三メートル近くに落ちていた。柱の途中が砕けてコンクリートは飛び散り鉄筋が押し出され、それでも上は下の上に落ちている。それはすさまじい上下の振動があったことを物語っていた。私は持病の薬が持ち出せなかったし、腹部を打ったらしく痛みがあった。駆け付けた長男は足を負傷していた。それで近くの救急病院に行ったが断わられた。病院は重傷者で溢れていて、少し離れている神戸製鋼所の病院に向かった。これも事情は同じことで、それでも頼み込んで長男は傷を縫ってもらうことができた。

夜が迫ってきていた。近所の人には余震を心配して避難所に行ってもらったことにした。私たちも三上さんの家族と一緒に近くの小学校に避難した。階段も廊下も人と毛布で溢れ、通行もままならなかった。水洗便所はもはやうこの山であった。電気はなかった。水もなかった。とにかく寒さに震えた。余震はたびたび起こっていた。足を曲げればそのまゝの姿で眠るしかなかった。翌日、大学に通学するため羽曳野に下宿していた次男が避難所を捜し回ったすえに帰ってきた。大阪の吹田までは列車で、そこからゆうに三五キロ、自転車をこいで帰ってきた。

昼ごろ長男が校庭で神戸大学のボランティアの人に声をかけられたと言ってきた。マイクロスパスも用意しているという、山の上かもしれないがとにかくそこに

ってみることにした。

マイクロスパスは坂道を登り、神戸大学農学部に入った。大学の教授が陣頭指揮を取って、私たちを受け入れてくれた。大学側は農学部で一番いい部屋、教授たちの会議室を提供してくれた。じゅうたんがあり、空調設備があり、飲料水はないものの、川から引いた水は十分にあった。これで安心してトイレに行くことが出来た。

私たちの隣に五歳ぐらいの就学前の子供のいる家族が並んだ。この男の子が「なにか食べたい」と言っていた。私たちは昼間、次男の学友の家から貰ったおにぎりが二つあって、一つは私たちが分けて食べていた。非常用においであった一つを妻が出して男の子にあげた。

「よかったね」と母親に言って、三分の一ばかりを食べた。思いがけなかったのはこの後のこの男の子の行動だった。「食べる？」残りのおにぎりを、この子の祖父に差し出したのである。家内は人情的にはだされて泣いていたが後で私は勤務先でこのことを話してみた。「五歳の子供にも、何が起きているのかを理解できたのだ」と言われてやっと気持ちがおさまった。

喉がカラカラに乾いていた。破壊された我家から現金や貯金通帳、書きかけの原稿と原稿を取めたワープロだけでも持ち出したいと願って、山を下った。我家に着くまでの間にいくつもの自動販売機を見かけた。中にはウーロン茶

や紅茶がある。誰かが壊していないか思わず知らず視線がそちらに行く。倒れたもの、倒れていないものがある。それらはそのままの姿だった。私は初めて自分が神戸市民であることを、ブライドに似た感情と共に自覚した。以来、自動販売機には視線を向けることはなかった。近所の人たちは同じ思いで集まってきた。焚火がたかれた。人々はやさしい笑みで、途方にくれて視線を交わし合った。

この日の夜、あのおにぎりを独り占めしなかった子供が大変な高熱を出した。心配した家族は診察のためか避難所から姿を消していた。無事を願ったが真夜中になって帰ってきた。もう占める場所もなく、部屋の片隅で一塊になっていた。道路は閉鎖され追い返されたというのである。警察官は高熱の子供がいるかどうかさえ識別できないくらいしゅうしゅう狼狽していたのだろうか。翌日私が目を醒ましたときには、もうその家族の姿はなかった。

この日には初めておにぎりがきた。手の指の跡が感じられる手造りのおにぎりだった。神戸大学の職員の人が大声で「岡山大学からです！」と言った。こんなに心を感じた食べ物は今までに口にしたことはなかった。水が来た。自衛隊の若い隊員がいたわりの感情をみせて黙々と水を分配していた。日本人はやさしいな、と思った。

翌日には東大阪にいる弟が奥さんと長男を連れて、買物のワゴンに日用品を満載して、歩いてきてくれた。西宮北口から十七キロ被災地を歩き続けて、六甲の坂を登ってきでくれた。一回目は被災後の混乱で会えず、二回目の来神である。荷物を置いて無事を喜んで、すぐに帰った。また西宮北口まで歩かねばならぬ、そう思うと心が痛んだ。

やっと勤務先に復帰した二十五日は、職場の人たちが拍手で迎えてくれた。その時の暖かい眼差しを忘れることはできない。その翌日には、リュックサックを背負い、重い紙袋を下げて、西日本劇作家の会の東川さんと栗原さんが職場へお見舞いにきて下さった。お見舞いを頂いたうえに、たくさんのものを頂いた。ポット、お茶、下着、防寒チョッキ……何にも持ち出せなかった私たちにとって有難いものばかりだった。今思っても胸の熱くなるようなことが次つぎに起こった。先週には奈良医大から医療班の方が治療に來られた。街には救援物資を積んだトラックが走り回っている。家屋家財は失った。が、心に得るものもたくさんあった。私だけではない、多くの神戸市民はそうでなかったかと思う。

しかしもちろん、この大震災である。苦痛も大きかった。義理の姉は長田で死に、近所の人は四人が犠牲になった。私たちも、生死は紙一重だった。妻の親友は夫と娘を失ってしまった。

の断層を覗いた気がしてならない。素朴に素直に、私はこの神戸の日常を受け入れている。

## 稽古場での被災

劇団四紀会 田 中 真

家屋の全壊等、甚大な被害を被った仲間がいるなかで、私が被災体験など書かせて頂くのは誠に恐れ多いのですが、あの瞬間に唯ひとり、稽古場に居合わせた馬鹿なヤツとして、ふり返ってみたいと思います。

その前日の一月十六日、兵庫劇団協議会総会、新年会が開かれ（その会場となった劇団道化座スタジオは全焼）、実行委員の何人かで打ち上げをした後、会計の整理をしようと思ひ、稽古場に立ち寄りしました。飲んだあとだけにウトウトしていると、その内ビルが閉まる時間が近づき、帰るのも面倒でそのまま泊まることにしました。

突然の大きな揺れに目が覚めました。私が寝ていたソファは、遊園地の乗物のように私のからだを揺さぶります。ストーブをつけて寝ていたため、咄嗟に「消さなければ」と思ひはするものの、とても起きあがれる状態ではなく、頭を抱えて縮こまっているだけでした。「何も落ちてくるな、倒れてくるな」と一心に願ひながら十秒か十五秒くら

避難所では仮病を使って当番をさぼり続け、病人用にとつてあった電気カーベットを独り占めしつづけた恥ずかしい人もいた。仕切りたがり屋で無能で馬鹿な男が、貴重な援助物資を抱え込んで腐らせてしまった。やっと掘り出したふとんを盗む人もいた。三宮では壊れたシャッターから入り込んで現金を盗む者もいると聞いた。

そういうことにもかかわらず、私の心に染み付いて離れないのは、五歳の男の子の気遣いや、おばあさんが救出される順番を待った中学生の女の子、救出に駆け付けてくれた三上さん、三十五キロ、自転車走らせて帰ってきた息子、西宮北口から山の坂道を歩いて日用品を届けてくれた弟、暖かい眼差しだった職場の人たち、東川さんや栗原さんのリュックサック……そして、おにぎりや、靴下や歯ぶらしを毎日毎日送ってくださった全国の人たちの激励である。

地震があつて、一カ月が過ぎた。さまざまな善意の中で神戸は復興に向かっていく。

精神の復興、文化の復興には「希望」を欠かすことができない。その「希望」をたくさんの人たちから私や、私の家族や、神戸の人たちはいただいた。

いたわりや、同情や、人情や、連帯が震災でへしゃがったガレキの中から光りを見せている。私は戦後の民主主義

이었다でしようか、揺れがおさまりました。停電にともない、薄暗いながらも点いた非常灯に照らされた稽古場は壮絶でした。あらゆる物が落ち、倒れ、砕け散っています。肝心のストーブは埋もれて見えなくなっています。

ゾッとしました。揺れていたときよりも、爆発、火災の恐怖が頭をよぎり、正直いって「死」の意識がはたらきました。同時に、もしこれで火事となり、劇団の財産を焼失したりしようものならと考えると、「ああ、泊まるんじゃないか」と気が気ではありませんでした。

とにかく、元栓を締めようと、倒れた仕切りの壁や冷蔵庫等を踏みつけながらたどりつき、コックを閉め、ソファの辺りに戻ってストーブをみつめました。恐る恐る近くとスイッチは消火状態となっており、引火もどうやら免れたようでした。本当に、生きた心地のしない数十秒でした。

この後、私は稽古場から神戸の中心地を車で離れ、在住の姉の家に向かったわけですが、空が明るくなるにつれ、辺りの惨状が目の前に写し出され、ひしひしと事の重大さに気づかされていきました。ビルは傾き倒壊し、亀裂と段差、ガラスの破片や瓦礫、それに機能しない信号で、まともに通行できない道路、そして、姉の住むマンション八階の踊り場から見下ろした、煙でくもった神戸の街の姿、いつまでもたっても信じられない思いでした。

あれから一か月になります。極めて長い期間でした。この間、さまざまなドラマをテレビ、ラジオから洪水のように流れてくる報道も含め、目のあたりにしてきました。そんな中で、今なおそうですが、最も心動かされているのは、やはりあのボランティアの人たちです。とにかくじっとしておれない、その一心だけで即、行動に移す彼らの姿は、何だかんだと余計なことを考え、ただ手をこまねいているばかりで、悪戯に時を過ごしている自分にとって痛裂です。それは、この緊急時に限らず、常日頃から私の姿勢にも問いかけてくるものでもあります。

そんな思いのなか、劇団の仲間たち（六十三名全員無事）と、馬鹿な泊まり客がいたにもかかわらず、焼けることなく生き残ってくれた稽古場で、今後の活動について模索しています。

先日、神戸在住の画家であり、インドの紙芝居（自作）の語り手でもある東野健一さんと電話でお話した際に「あせらんでいいやん、ゆっくりやろう」と励ましの御言葉を頂きましたが、もうあまり悠長にはしておれません。演劇人、文化人の端くれとして、我々ならではの取り組みをしていかねばと痛感しています。本誌が発行されるころには、既に形あるものとして、皆さんのところへお伝えできるような頑張ります。蘇る四紀会を、神戸の文化を、どうか御支援ください!!

## 自分の居場所

劇団四紀会 清水章代

……いろんな事を計画していた。私なりに燃えていた。劇団に入団して四年目。去年まではいろいろと勉強できたので、今年は自分自身を試したいと考えていた……  
……それが、ほんの十五秒ほどで何もかも狂ってしまった……

私は毎日無駄に過ごしたのだろうか。避難してしまった私にできることと言えば、ただテレビにかじりついていただけで、自分の無力さを思い知らされるばかりだった。

避難などしたくなかった、できる事なら……。でも、あの時の私に他にできることなどあっただろうか。たとえあったとしても、選ぶ権利などありはしなかった。私は女で、末娘で、二十一才だったのだ。親と共に動くしかできなかった。自分が女であることが、こんなにも悔しいと思ったことがこれまであっただろうか？

地震が起きてから、私が動けることは殆どとていい程なかった。父は何度「女はひっこんどけ」と私に言ったことだろう。母や兄は何度「危ないから」と言っただろう。私に居場所がなかった。身体も心も……毎日惨めさと悔しさを心に積んでいくしかなかった。

劇団では性別で仕事を分けられることがない。大道具でも照明でも男女公平に仕事を与えてもらえる。やっとうちから仕事を見付けてできるようになった私にとって、この地震は私からやる気を失わせた。

そんなとき劇団から集合がかり、やっとうちの居場所を見付けた気がした。久しぶりに帰ってきた兵庫の町は、ブラウン管で見る数十倍ものショックを私に与えた。

倉庫に懐中電灯の灯りが点った瞬間、自分の目を疑った。そして次の瞬間、どう整理するんだろうと不安がよぎる……。他に来ていた劇団員がとりあえず奥まで通れる道を作ろうと指示する……。思い出そうとしても、どうやって片付けたのか思い出せない。それほど無我夢中でやれることをした。怒られるかもしれないけど、楽しかった。

あれから……祖父の家にテントを張りに帰ってきた時、私は親の反対を押し切って兄と父と屋根に登った。女でもなく、一人の人間として家族の中で働いた。そんな私を初めてみた父は「わしよりチョコチョコと動き回りよって」とブチブチ言っていたが、何かがふっきたようだった、家族のなかで。

父は少し悲しい思いをしたかもしれない。母は少し見直したかもしれない。とにかく私への見方が変わったのではないかと思う。実際に私も、これほどまでに両親が小さく見えた時はなかった。そんな二人に私は「やっとうち劇団行っ

とることが役にたったな」と冗談を言えた。

そして今、例にもれず「神戸を復興させなければ」「何かの役に立ちたい」と思えるところまでくる。

そして、それが私を立ち直らせてくれた芝居であればと願わずにはいられない。

……長い目で見なければいけない、この震災。そのなかで必ず人々の力になれると思う、芝居。だから新たな計画を立てて、私なりに燃えたい……。

## 私の体験——地震から一ヶ月——

関西芸術座 河東けい

ダッ！ 飛び上ったのか——何がなんだか分らない、ガバと半身起こした。ジャッジャッともジャッジャともつかぬ異様な音が鋭く動き、尻の下でベッドもろとも家全体が横滑りに行ったり来たり、それが一秒間に四往復の早さ——瞬間、巨大なビストンに乗せられた思いがした。何秒かのおそそで、地震だッ！ とひらめく、足をおろした。滑った！ ナンダッこりゃ、ナンダ！ 一歩出してもズルッ！ 分らん、ズルズルに波のような高低。机を掴む、タンスを掴む「マ、ーッ、マ、ーッ」と叫ぶ（助けてくれではない、起きろ！ 危いである）、廊下に出た、こもズルズル、高低、玄関のドアは開いた！ 突嗟に靴をまさぐり履く。母

の声「地震だねえ」ヨタヨタした九十六才の母の手をつかまえた。

ドドドド、、、、、家中がふるえ、外に出た。暗い。全身が緊張のあまり虚脱したのか震えているのか―あれ、隣の家がそこにある。エッ？ 近眼の目をこらす。オッ、境界のレンガ塀がそのまんま、全面ぶっ倒れているではないか。あっ、火の手やノはるか下とずっと西と三ヶ所。夜明けのほの白さの中にその赤さは妙に美しい。同時に起った火災は、音の全くないシーンとした大気の中にたちまち黒煙になっていく。それが後で報道された六甲道辺りの焼野原であり、浜の方の壊滅であったのだ。どよめきのない異様な静けさは、一瞬にして押しつぶされた人々の呻きであり、必死のものがきであったのだ……合掌。

どこからか「大丈夫ですかー」の声、人間の声がかすか遠くでも起ってきた。一応は無事にあるわが家の裏へ回ろうとして、ウッ。横巾二〇メートルばかりの塀が石垣ともども崩れて、眼下に四〇五メートルの溝の中にドサリ。足もとの土がえぐられ、途端、眼くるめいて縮こまった身体ごとドドッと滑り落ちそうな錯覚、ヒシと摺んだ壁も地面のコンクリートにも亀裂が走っていた。

ゆがんだ鉄扉をこじあげ、道路から見上げたわが家。その土台はガスパ管、下水管すべてが丸い空洞にぶち切れ、ガス器はめくり上がって今にも家ごと頭の上に傾いてくる

甥の提言で三日目の夜、老母、幼児二人を含む七名、乗用車に各々身の回りのものだけ詰めて脱出する。永年の愛犬を置き去りにする、バケツ一杯の水とドッグフードの大街。「ごめん、元気でいろよ」チャーリーはじっと見ていた。追いかけてもなかった。

大阪まで十時間かかる覚悟が、意外に早く三時間余りで着いたのは、若い甥の適確な判断と行動力、途中そここの人々が積極的なボランティアで、倒壊した家や塀で狭められた道を東から西から山から珠数つなぎにぐる車や、懸命に誘導して下さった協力であったと思う。私たちが大阪に入った三時間後、阪神間の主要路はすべて通行禁止となった。

海と山を誇った神戸と阪神間の街は潰れた。理性を奪い神経をスタスタにする恐怖というものを体験した。生か死かは隣にあった。あれから一月、まだ神経が平常に戻らないのに私は、春の公演八女の平和の演出に関わっている、おかしな毎日なのだ。

今また新しい問題が起きた。わが家を修復しなければ住めないという現実である。

五〇年前の敗戦を記憶すべき年の、この強烈な試練は何なのだろう。地球上の沢山の戦いに関わりつつ何も為しえぬ人類への挑戦か！

いずれにせよ一介の役者に課せられた、物心両面の重荷

ばかりの状態だ。「二次災害に注意して下さい」とくり返す報道に「直す人もどうなってるのか分らんよッ」と焦らだつのも空しい。そしてわが家の居間は割れたブランデーの甘い香りに満ち、大きな一山の解体ゴミの場と化していた。

余震のなか不安と恐怖の暗闇、たった一つのローソクに食欲もない。七時頃ふっと電気がついた。助かったァ！ TVは画面はグチャグチャながら音だけがきこえる。なんと火災がどんだん広がっているではないか、水は皆無、燃えるにまかせている様子、あゝ、あの人この人どうしているか、ただ無事であつてくれと祈るのみ。

水が欲しい。人々は三十分歩いて住吉川の水を汲み、煮沸して使っているそうだが、私にはもうそんな余力はない。給水車から一人ベッポトル一本の水をもらうのに何時間も待つときけば、前夜使った風呂水をありがたく飲用するのも致し方ない。

三日目、忘れていた人工骨股関節の足及び腰、動かず。何故か火事続出。余震ひんぱん、不穏なり。あの恐怖以来思考力ゼロ、真ッ白の状態。電話線無力、交通線遮断からくる甚だしい孤立感。水・ガス・電気のライフラインを切断された都会の無力、自然の巨大なエネルギーには抗しえない人間のもろさ。一瞬にして崩壊した一人ひとりの人生、歴史。

に頭かかえて、当分は居候しつゝ地震後遺症と斗わねばなるまい。

## テクノロジへの過信！

劇団どころ 合田 幸平

震災から十五日振り、自転車に乗って初めて稽古場に向かう。町は倒壊した建物の取り壊し、瓦礫の撤去が始まっているものの、まだ地震のすさまじい破壊力を示す惨状は生々しい。わたしの家は最も火災の激しかった長田区の西端に位置している。家から百メートルほどのところから東側、JR山陽線を挟んで新長田駅までの広大な地域が焼け野原になった。以前公演した『長田の娘たち』の舞台となったゴム工場群、ここは全国のケミカルシューズの七割を生産している地域だが、工場は軒並み倒壊や火災で無残な姿をさらしている。わたしの家のある町は辛うじて焼け残った。近くの小さな公園とカトリック教会の中庭（教会の建物は焼失、ここは娘たちの通った幼稚園でもあったのだが）、その前を南北に通る比較的広い道路のお陰でそこから西への延焼は免れた。その焼け跡に立つと五十年前の空襲の頃にタイムスリップしたような錯覚にとらわれる。

火災は地震の直後に発生した。激しい揺れでたたき起こされ、倒れてきたタンスや本棚、押し入れの中のものや机



全てが崩れた稽古場内（劇団どろ）

の引き出しの中まで家中のものが攪拌されたように散乱するなか、家族の名前を呼び合いながらやっとの思いで外に飛び出した。そのとき、すぐにガスの匂いとともに東の空に黒い煙と赤い炎が立ち上がるのが見えた。

一瞬、関東大震災のことが頭をよぎった。だが今は近代的な消防設備も整っている、こんな火災などたちどころに消してしまえるだろうと、わたしはうかつにもそう思った。しかし事態は全く予想を裏切った。すぐにも聞こえると思った消防車のサイレン音もバトカーの音もなかった。

一時間、二時間と時はどんどん過ぎる。火災はますますひろがるばかりだ。だが消防車が到着した形跡はない。公衆電話で非常用の一一九、一一〇を何回まわしても全くつながらない。

周りでは倒壊した家に閉じ込められた人の救出が続けられる。ラジオでは大きな地震があったことは報じているものの、その被害状況についての報道はもどかしいほど限られたものだった。情報が伝わっていないのだ。少なくとも自分の回りで起こっているこのすさまじい現実放局局には全く知られていないのだった。

地震直後から電話は通じなくなっていた。わたしたちは孤立している、見はなされているのではないか。そんな思いが頭をかすめた。

これまで、過去の大きな事件の外にいたときは、ほとん

どリアルタイムに事件現場の状況がテレビの映像を通じて我々に知らされているように思っていた。その食欲なまでの報道メディアの姿勢、存在に慣れきっていた自分にとって、このギャップは信じがたく、また恐ろしいことであった。

行政機関の初動の遅れが被害を拡大した。そしてこれは情報の速やかな伝達が阻害されたことも一因であった。しかし震災が引き起こすさまざまな事態、障害の発生はほとんど予測のつくものばかりであった。にもかかわらずそれへの備えを怠っていたのだ。わたしは恐怖よりも怒りがこみあげてきた。経済の発展、開発ばかりにうつつを抜かしてきた行政機関の安普請がもろくも崩壊し、防災への手抜きがさらけ出されたようだった。

それにしても鉄やコンクリートで作られた近代的な建造物がこんなに脆いものだとは思ってもよらなかった。ひょっとすると都市の高速道路や橋、ビルなどが堅固だと信じていたのは根拠のない幻想に過ぎなかったのではないだろうか。家の前の高速道路の橋脚の今にも崩れそうな無残な姿を見るにつけ、人間の傲慢さ、テクノロジーへの過信にたいする自然からの手痛いしっぺ返しではないかという感がしてならないのだ。

そうして、いざという時、住民の命、安全を守るはずの国や自治体が全く頼り無く、最も大事なときに役に立たな

い、助けてくれない存在であるということが露呈された。災害の緊急時、お互いの命を守りあったのは隣近所、地域の住人たちの互助的な力だった。ほとんど自治会などが機能していないようなわたしたちの地域でさえも自然発生的に人命救助のネットワークがくまれた。そして今まで顔を見たこともなかったような近所の若者がお年寄りの救出に献身的に立ち働いている姿を見た。

どろの稽古場の周辺もひどい状況だった。地下鉄の高速大開駅は地中で崩壊し、そのうえの広い道路、交差点が大きく陥没していた。稽古場のすぐ南にある四階建のホテルは一階のロビー、フロント部分が完全に壊滅、二階から上の部分に押し潰され消えていた。どろのあるビルは壁面にヒビがあるものなんとか立っていた。しかし屋上の一部にあった小さな部屋、我々が小道具などの倉庫として使っていた五階部分がボッキリと根元から折れて丸ごと落下し、北側の二階建ての民家をベシヤンコに押し潰していた。破壊された家の上にコンクリート壁の破片、小道具や衣裳、照明器具などがぐちゃぐちゃになって広い範囲に飛び散っていた。落下した際の衝撃のものとすさが想像できた。潰された家で寝ていた喫茶店主の奥さんが下敷きになって亡くなったと聞いた。胸が痛む思いだ。稽古場は天井に穴が開いた状態になっていた。南側の二つの窓はサッシごと外れて、これも下の民家の上に落下し、倒壊した家屋に交ざ

って痕跡も無かった。

稽古場の内部は足の踏み場もない有り様だった。周りにあった本箱や戸棚はすべて倒れ、中のが飛び出し、ガラス、瀬戸物の破片、本、木材などあらゆるものが稽古場の中央にかき集められるように散乱していた。何からどう片付けていいか途方にくれる状態だ。とりあえず屋根にはシートをかけ、壊れた窓には応急処置としてベニヤを打ち付けてもらったが、もとのように稽古場が機能するのがいつのことになるか、今のところ見通しが立たない状態だ。劇団員はそれぞれ無事が確認されたが、家が焼失した者、遠い親戚の家に避難している者など、交通手段が寸断されていることとあいまって、稽古場に結集することが困難な状況が続いている。しかし活動の再開へ向けて何とか知恵と気力を奮い立たせねばと思う。(二月一日)

二月五日日曜、やっと教人の劇団員が稽古場に集まった。とりあえず補修工事をするためにも稽古場を片付けねばならない。よく見ると稽古場の天井の梁はほとんどに大きなひびが入っていてとても危険な状態だ。大きな余震がくると天井が落下する恐れがある。これではとても稽古場として使用することはできない。ましてやお客さんを入れての稽古場公演など果たして再開できるのか、暗澹たる気持ちになる。オーナーは梁の部分をH型钢で支えて補強をすると言っているが、わたしたちでも独自に専門家に建物の安

全を診断してもらう必要があるだろう。次の日曜日にもう一度集まることにした。

## 命と利己心を意識した日

劇団どろ 小野 結花

ダダダーンッ！

地の底からわき起こった大音響に揺さ振られて目が覚めた。同時に、窓ガラスが割れる音に驚き、本箱が落ちかかっていた。暗闇の中で、軽い本箱でよかったと思いつつ脇にどけたら、ガラガラガシャンと落ちていく音がする。あきらかに何かひどいことが、私の身に降りかかったのだと気づく。近頃の私はめがねを捜すべく周囲を見すえた。

二階建てのアパートの私の部屋は底がぬけ、家具は瓦礫と化して一階に落ている。屋根がなく空が見える。戦争か？空爆か？！ととっさに考えた。なぜか私のベットだけが残されたのみで、となりにあった部屋がまったくきれいに裂ける格好で傾き二メートルは向うに低く倒れて止まっている。そこでうごめく家族の、安否を確認する声が聞こえる。家族は無事だ。しかし私はどうなるだろう。ベットと共に残り残こされ(実は太い鉄骨の上にベットは位置していた

のだった。)逃げ道を閉ざされ孤立状態じゃないか。焦った。これが地震なら必ず余震が来るはずだ。そしたらベットもろとも落ちるかもしれない。時が流れを止めた。頭が、目が、高速で状況を把握し行動しようとする。どうすればこの災難から逃がられるだろう。焦る。考える。焦る。窓を越えて隣の家のベランダに移り脱出させてもらおう。ベランダの鉄柵につかまり足場を探す、ここも底がなかった。だめだ。ここにいるしかない。ゆらゆらと揺れ戻しが来た。髪の毛がぬれている。さわってみると、ぬるりと手についた。これは血か？ いやだ。痛くないのかえって気持ち悪い。路上で子供の泣き声が聞こえてくる。空を見える。方角がわからない。どこかの大きな家があらぬ方向にある。自分のまわりの状況がわからない不安。しかし四角いマンションのビルがすくっと建っているのが見える。あゝ、木造家屋の悲劇なのだと考えていた。空が赤くゆらめいている。「火事が来ようで！ 近いか遠いかかわかれへんけどー」大きくなる不安のためにパニックにおちいらないようにと、言葉は冷静をよそおおうとしている。弟が外に出る通路が無事なのを確認し私を誘導してくれる。ベットのそばの壁が崩れ落ちていて、残っていた廊下に出ることができたのだった。

白々と夜が明けてくる中で、路上に出た人々が寝まき姿で立ちすくみ、一筋下の道で燃えさかる工場の炎の勢いを



倒壊・炎上した小野結花さんの住んでいたアパート(須磨区戒町)

見つめていた。私は自分が助かったことで、その時、有頂点だったのだ。町内会長であろう人が走りまわり声をかける。「若い男の人、助けて下さい。この家とあの家に○○さん夫婦と××さんが下敷きになってます。手伝って！」五、六人の男の人が崩れた家の中に消えていく。その中に弟も参加していた。心配になる。せっかく助かったのに、これで二次災害にあつたら……私の心は利己心でいっぱいになって「火事来ようで。火事きようねん。」とうろつくばかり、「消防署の人がおつたら言うて来て、ここに人が下敷きになってることを！」言われた母と私はとにかく派出所に向かった。数人の若い警官が立っている。「消防車、まだですか。人が下敷きになって救助しているんですけど！」

「どこもそうなんです。近所の人で救助してもらわんと……」納得はしたが、あつけないものだ。頼りにしていた者にそっぽを向かれた思い……あそこでも家族が泣き叫んでいる。「誰か助けて下さい。ここに下敷きになってるんです。誰か！」私では役に立たない……と手を出さない。本当に役に立たないのか?! 見て見ぬ振りのような心境だった。

ようやく消防車が到着し、消防隊員が手際よくホースを炎に向け始めた。……が、どこから消し始めるのだ。私の家はそっちではない。男の人が叫んだ。「どこにホースを

もっていくんや。そっちはもう消えようやないか。こっちに持ってこんかい！」ホースを奪いとり自分の家の方に走っていく。私の家もそっちの方だし弟がいるのだ。「人がうまってるんです。助けてるんです……」私の声はかき消されていく。利己心と無力感で役立たずな自分がはがゆかった。水の出なくなったホースはおき去られ、私の家に火が移り始めた。地震直後の火災から四、五時間はたつていだろうか。

たった何秒かの地震が、人間の無力をさらけだす。どうにかならないのか、どうにか！ テレビの報道は、その時以後、私の家どころではない悲報を伝え続けていた。

## 復興に向けて 太井 クリ子

震災から四日もたつてようやく東灘区の勤務先である公立学校に入ることが出来た。

朝、八時すぎ出勤。勤務先のひどさに「さすが」とあきれる。これでもだいぶ直したんやで、という無精ひげだらけ、寝不足の同僚たちを心で拜む。荷物を置くとすぐ年輩の同僚にくっついて校区内に出た。

あの震災の日に、電話が通じたのは受け持ち生徒三十数人のうち二人。それも、夜になってからだった。三日たつ

ても、暗闇の中でろうそくを家族で囲んでいる、と言う女の子もいた。もしもしという間もなく、父親の声が遠くになり、電話が通じなくなってしまった家庭もあった。

焼け落ちた、と聞いていた商店街の南側にあるマンションが無事立っているのを見て、八階にある教え子の家へ駆け昇る。

螺旋階段で最上階にのぼりつめると、ドアを開けてその母親が出てくるとが同時だった。

「ああ、せんせい」

大丈夫でしたか、と走り寄ると、高校生の元教え子の姉と、男の子がそろうた。

だれそれは、無事。どこそこは家がダメだった、という情報。その中で、M君がまだ崩れた家の下敷きになっているらしい、と半信半疑の案じ顔の子供。まさか、と首を振る。母親も、きつと助け出されているでしょうねと自分に納得させるように言う。デイ・バックに入っていたチャョコレートをひとつかみずつ、姉弟の手のひらにのせてやって慌ただしく去る。

階下で待つてくださった同僚の、M君を見かけた人がいるらしいとの話にほっとして、瓦礫の街に踏み込んだ。

後に、この日彼が家族と共に遺体で見つかったと聞くとは。自分ののんきさをどんなにのろったか。今だに胸がふさがる。

倒壊した家のため、道路が道でなくなっている。角の向こうからひげ面の男性が自転車で近寄ってきたが、すぐ横で声をかけられるまで同僚だと気づかない有り様。

大男の、若い先輩教師が、「この先は行かない方がいいですよ」と低く言う。「本当にひどいですから」。それでも、こちらは歩けるという道を、とほとほとついていく。全壊した瓦礫の前に、小さい木切れ。

……家屋を片づけるときは連絡下さい。この下に二人、埋まっています。……

見ない方がよかったやろ。とつぶやく同僚の声に、ほんまにひどいですねと返す自分の声に実感が無い。嘘だろ？との思い。

なんでや？ 何で神戸が？ というどうしようもない思いは今でも折々、口をついて出てしまう。

ところで、震災から一週間ほど、学校では外のひっきりなしのサイレンに負けないくらいに、電話のベルが鳴っていた。そちらにだれそれが避難していませんか？ 呼び出してくれませんか？ と言う具合に。真夜中もおかまいなしなのは一台しかない電話回線が通じないからだ。電話をかけてくる方も必死だからだ。教師が二十四時間体制で電話番をする。せめて、伝言板だけでも残してあげなくては、との思い。

五日目くらいか、避難名簿を避難本部から借りてきて尋

ね人を探してこいと言うご婦人がいらっしやった。

私は被災者なんです。本部は目の前なんですよ。避難民が三千人だろうが、三千人だろうが、私だったら、探しますよ。どうして、おたくはしてくれないの。失礼ね、その教師なんですよ、名前を言いたくないよ。伝言板だけなんてね、馬鹿にしてるわよ。こちらは灘区にね、避難してるのよ。被災者なのよ。そこまで行って探して来なさいよ、ちょっと、聞いているの！……うんたらかんたら。

このおばさんがこれだけ文句を言っている間にも、県外からの問い合わせの連絡や、生徒達からの安否を知らせる電話がかかっているかもしれない。そう思うとやりきれない気がした。

呼び出しをしようにも、停電しているのにできないではないか。出来たとしても、ひっきりなしの校内放送は、余震におびえる避難民や附近住民の気持ちを逆なでするだけではないか。受話器を置くと同時に次のベルがなり、かつ職員の数も足らないこの現状で、いるかいけないかもわからない人物を何百人の中から探して歩けと言うのだろうか。

「もう、どうしようもないんです」

と、上司に受話器を渡すと、黙って聞いていたが、

「あんなね、じゃ、ここへ来て手伝って下さいよ。来ればわかりますよ」と言ってきた。



焼け落ちた昭和筋商店街アーケード（長田区）

で停電はなしですよ」と笑って告げてくれた、その声を覚えてる。

そのご婦人は「私は、被災者なんですよ、やと」

灘区からなら、歩いても来れない距離ではない。本当に心配なら、探しに来るのが本当ではないのだろうか。みんな大変な時に、どうして自分だけが被災者だと、何かしてもらって当然だと、開き直れるのだろうか。ひどく悲しくなって涙をこらえながら伝言板の手伝いをした。

政府の対応が遅かった、とよく言われる。確かに、長田区などの火災への対応はひどかった。いくら水がないとはいえ、自衛隊の導入がもっと早ければ、ここまで死者はでなかったろう。倒壊家屋の下敷きになった犠牲者も同様だ。素手の力では「どうしようもない」レベルの倒壊も、もう一日救援が早ければと悔やまれる。

一方で市民の生活を元通りにするために、円滑にするために働いている人達が、良く頑張っていると私は思う。自分がそうだから、というのではないが特に公務員がボランティア的精神で本当に良く頑張っていると思う。

他にも、サービスして当り前と一般の人に思われがちな（実際にそうなのだろうか）職種の人達にエールを送りたい。

泊まり込んで診療、保健指導にあたる保健所の、丁寧な物腰には感心させられる。

冷たい小雨の中も、夜中もライフラインの復旧作業に努める電気会社、水道局、ガス会社の人達。「もう、これ

ひっきりなしのサイレンの中、排気ガスにまみれながら交通整理に努める人達。中には、ドライバーにくっついてかわられて弱りきっている気の毒な若い警察官も見かける。（すでに過労死した警察官もいらっしやるとか。）自分の家が全壊しても、市民を助けるために働いている警察官を知っている。

すみません、トイレ貸して下さい、とトイレットペーパーを握りしめて校舎に飛び込んでこられた機動隊員の、「一週間ぶりなんです」と恥ずかしそうな照れ笑いを覚えてる。

思わぬ災害で、ストレスがたまってきた一般の人達の影で、黙々と復興に向けて頑張る人達がいる。目立たないけれど、そういう人達の事を考えると、私も頑張らねば、と思うのだ。

蛇足だが、被害の少なかった地域や阪神間外の人達は、「援助」の仕方を再検討するべきではないかと思う。やみくもに食べ物を送ればいい、と言うのでは、本当に必要としている人に必要なモノは届かない。また、自分で何とか出来る人に、物質的な援助は必要ないのだが。

マスコミの取り上げ方には、ただ同情をあおるだけで、実際にこれからのような援助をどこに、していくべきかなどという配慮に欠けていると感じるのは、私だけであろ

# “神戸でのボランティア公演を終えて”

劇団銅鑼 平野真弓

舞台は、オープンテントです。照明はあるが、屋外なので陽がでている間は効果なし。音響の設備はある。客席にはテントがないので寒い。雨が降った時でも、数列分のテントしかない。ここではまだ、演劇を上演したことがないという。この様な状況で「やろう」と決めたのは、被災者と「フラワーテント」設立に関わっている照明のスタッフさんらの呼び掛けがあつてからです。このテントの状況では「芝居は無理・六月にホールが動き出してから」との声もあったが、この被災状況を打開しようと頑張っている人、心が荒んできている人、等、今やらなければ意味がないという事で、三月十日、三宮「フラワーテント」で『センボ・スギハアラ』を上演する事になりました。五日前の事でした。

「フラワーテント」とは、被災者のために「心の復興」「精神のボランティア」の言葉をかけ、力とエネルギーが必要」と呼びかけていた「テントシアター」です。あと五日しかない中、交通機関・宿泊・食事などの状況

を調べ、神戸にある劇団・労演・おやこ劇場・日生協・マスコミ・学校などに呼びかけをしました。いろいろな事が決まってく中、一本当にやれるのだからかーと思ひました。

九日に松坂での初日を迎え、旅班は京都の宿に。トラックス班は、神戸に入り当日を迎えました。当日は朝から雨で旅班が現地入りした昼には大雨になった。「できるのか？」という不安の中、フラワーテントの人達はこんな事ではびくともしないという感じで設備の説明をし、こちらからの質問にも答え、お互いに案を出していくうちに、劇団側も動き始めました。まず、雨の中で科白がとどくように。そして道具類も濡れないようにと、舞台から客席までテントで包み込む事にしました。照明は、四時三十分開演という事で地明かりのみ。音響の設備はテントから離れた場所に設置してあり、そこに観客がたたないようにロープをはり見通しをよくした。客席はバイブイスで約五十席設置。セットは小道具と袖用のパネルを使い、台本は、二時間物を

一時間三十分にカットし、稽古しながら打ち合せていきました。そうこうするうちに雨はやみ、客入れへ。初めは、二十人ほどでしたが、会社帰りの人々に、フラワーテントの人達が呼び込みをし、最終的には空席がちらほらという感じになった。客層は、まちまちですが、後から聞けば、隣の神戸市役所で避難している方が多かったようです。神戸労演、劇団四紀会の方々が観に来て下さり、また、前日にフラワーテントで上演されたシアター想夢さんから差し入れもあり、心強くなり、開幕になりました。

上演中、席を立った人もいたり、チャットとのぞいただけで行ってしまふ人、喰いいるようにして観る人、泣いていた人、最初から最後まで笑顔をうかべながら観ていた人、等、従来の普通の公演と変わりない反応のようにも思いますが、何か違う雰囲気があったように思いました。役者の方もお客さんが目の前にいるので、いつもと違う状況の中、緊張していたようです。無事に終わった後、「とても良かった」「こんな所で芝居が観れるとは」との感想が多い中、酔って寝ていると思えた人が「もう行く所がない」と隣の席の人に言ったとたん「オレもだよ、オレも行くところない」と話していた。

パラスをおえ、テントの人達と笑顔で別れ、私達は京都の宿に戻りました。今回の公演は貴重な体験でした。「何かできないか」と話してはいましたが、神戸に行き、

街を見て、人と話をし、まだまだ被災状況が続いているのだと気付いた時、そして「久しぶりの芝居だ」と手を休めて観ている人々の姿を見て、今やってよかったと心から感じた。しかし人々の心に泣いたり笑ったりする感情が素直にだせる時

がはやくくればいいと思いました。

フラワーテントの皆さん、劇団関係の皆さん、神戸の皆さん、がんばって下さい。今回の公演でいろいろと教えて頂きました。遠くからですが応援しています。



# 第1回 東・西合同作家会議の報告

劇団名芸 栗木英章

## 一、はじめに

演劇フェスティバル等を通じて東・西の仲間も三年に一度は交流できるようになったが、書き手同士も一場に会って話したいという声があがるようになってきた。昨年七月だったか、名古屋で西の栗原・楠本両氏と私がお会いし、事務局レベルで一九九五年二月開催の合意形成ができたので、その後全リ演全体のバックアップ等も受けて、去る二月四日(出五日)、馬籠民宿・桔梗屋で開催した。会場の設定や車の便など、地元の劇団夜明けの協力をいただいたことに感謝したい。

さて、直前の阪神大震災により、参加予定の方もふくめて、西の仲間の被害に心痛んだが、清水巖氏(神戸市北区在住)が身内の方の罹災で欠席連絡があった他は総勢二十一人の参加を得て、楽しく、にぎやかに行うことができたので、この場をお借りして概要を報告させていただく。毎度のことながら、作家会議の前身といったものは、文字で伝えるに、主観的になってしまうが、西の東川氏の感想なども併読していただき、理解してもらえれば幸いである。(尚、限られた紙面のため、敬称を略させていただく。了解よろしく)



## 二、参加者と提出作品

宇都宮吉輝(名古屋演劇鑑賞会・事務局長「基調報告」)、矢作京介(北海道)、大峰順二(銅鑼)、平石耕一(東京芸術座・アポストロフィ)、藤井康雄(京浜)、小島真木(静芸)、中村和光(RIN『忠臣蔵』)、布施佑一郎(からっかせ)、こばやしひろし(はぐるま『裏の畑でボチがなく』)、藤本昭(はぐるま『明治の光・森巻耳伝その一』)、丸子礼二(演集『チェルノブイリを見ている』)、栗木英章と共作)、栗木英章(名芸)、鈴木弘文(夜明け)、吉村登(名古屋友人)、鈴木正彦(名芸友人)、熊本一(大阪)、東川宗彦。楠本幸男(和歌山『天神町一番地』)、栗原省(いこら)、広島友好(演劇街『安吾往来』)に、栗原省の健康上のつきそいとして、夫人の茂登子さんがオブザーバーとして同行して下さった。また作品のみについては、やませの証谷伸夫作『弓人は翔んだ』が届き、病に伏せられた萩坂桃彦老からは、いつもながら、ていねいで鋭い劇評が寄せられた。さらに、東・西から十八人の欠席のアンケートをいただいたが、各地で奮闘されている様子が伝わり、とても力強く励まされるものであった。

## 三、基調報告——宇都宮吉輝氏

報告してもらおう人の名前は色々あがったが、舞台を観る

運動をしている立場から、「観たい芝居、期待する作品」といった内容で、名古屋での鑑賞運動や全国の幹事として尽力され続けている宇都宮氏にお願いした。予算が乏しく、全くの交通費のみで快諾して下さった氏は、会員のアンケートや、中部・北陸ブロック企画委員会のまとめなどを基に、具体的にわかりやすい問題提起をされた。その概要を大雑把にまとめてみると……

「九十二年(九十四年の例会のベスト2を列記すると九十二年は『翼を下さい』(青年劇場)、『シャンハイムーン』(こまつ座)、九十二年『遺産ラプソディ』(青年劇場)、『雪やこんこん』(こまつ座)、九十二年『日本の面影』(地人会)、『文七元結・おもん藤太』(前進座)、九十四年『唐来参和』(しゃぼん玉座)、『雨』(こまつ座)である。特徴的なことは、作者としては井上ひさしが多く(四本)、演出家としては木村光一が多い(三本)ことと、青年劇場の健闘ぶりである。寄せられたアンケートなどもまとめていくと、井上作品が支持されているのは主に次の三つの理由による。

一、従来の新劇臭にない面白さ。二、明確なメッセージがある。三、結末はなんとなく明かしく励まされる。つまり、新劇が伝統的に持っていた良くも悪くも啓蒙主義から、現在では毎日の生活の同じ次元で考えていくドラマが好評とされる。また、どんなことを描いた演劇を観たい?という設問に対する上位五項目は、一、家族・夫婦。二、人生の挫

折と希望。三、忘れてはいけない歴史。四、人間の尊厳。五、男女の愛。となっている。世代や性によっても内容は異なるが、一言でくくると、「時代を切り開いていく新しい家族を描いた演劇」が期待されているのではないか。

鑑賞運動も様々な紆余曲折から、現在は上からの縦形組織でなく、みんな考えていく横形組織に移行しつつある。受身の鑑賞から、創造団体と正しく組んで、触れ合い、例をいかに充実させていくかに注力している。評価も単なる良かった、悪かったで終わらせず、感想文を寄せるよう呼びかけ、地方ではまとめない程多くの声が集まっている。そして作者との交流も方針の一つとなってきたので、これを機会に色々交流していきたい。」と結ばれた。作品評価にとどまらず、民主的運動のあり方で示唆に富んだ話を限られた紙面では紹介し尽くせないが、今後の具体的な舞台創りや、あるいは会場問題、消費税反対の運動など、今まで以上に力を合わせられたら、とあらためて感じた次第。

#### 四、提出された作品討論

従来、「東」では、提出された全作品についてほぼ均等に時間配分して話を進めた。これは、若手も含めて作者には励みとなるが、他方突込みが浅くなる弱点もあった。そんな思いから、今回は、「西」では『天神町一番地』を、

「東」では『裏の畑……』を選んで、重点討論しようとしたが、『裏の畑……』の台本数不足もあり、十分にはできなかった。しかし、『天神町一番地』を中心に率直な話し合いができたので、印象に残ったことを記す。

この作品は今年六月に広島で園山土筆演出によって上演されることが決まっており、すでに作者は現地との数次におたる話し合いを終えて、第四稿となるもので、昭和二十年八月六日の一瞬の閃光で消えた街の人々のドラマである。被爆したあとの苦しみの劇や物語りは多いが、これはそれ以前の住民の様々な人生が描かれており、その意味では既存作『トモロウ』とも通ずる貴重な作品といえる。萩坂はそれを受けた上で次のように指摘する「……この街に居たかもしれない、或は居そうな人物を作者の好みによって描かれるのです。その点楠本も達者でヴァリエティを見せますが、私にはそれは作者の創造というよりも、あちこちから借りて写しとってきた人物に見えてなりません。……街の家並、風景はスケッチされましたが、この街の、その時代の歴史を織りなす人物が居ないのです」と。

「西」の面々は、現地との話し合いに基き、誠実にこたえて、そのスピードと粘りで改稿を重ねてきた楠本の経緯を知るだけに、弱点を抱えつつ、よくまとまってきたところに評価点が出されたが、全体的には萩坂評につながる批判が多かった。話の枠組みとしてはいいものの、つきつめ

ていくと人間の存在感が弱いということであろうか。一つの例が、戦争批判のセリフが、書き手の生の言葉として書き込まれていることと指摘された。私なども色々な団体の要求や運動に応じて書いていく経験が多くあって、戦後五十年の広島で、こういうドラマを上演する積極性の方へ追い風を送るのだが、作品を独立して論ずる立場からは容赦のない辛口の意見が続いた。東京で、戯曲を書いてメシを喰う、といった修羅場にたくましくいる平石や大峰らは、少ない人物に絞っての劇化挑戦の必要も語った。たまたま私は、現在、地元劇団（名劇協）合同公演の作品を準備中で、やはり五、六十人の出演者を考えている共通点もあり、考えさせられることも多かったが、他の参加者にはどうだったろうか。どうも企業の中でバランスをとりつつ日々すごしている為、折り合いというか、ほどほどのところで、まあまあとすませてしまいがちの立場からすると、西のエース楠本にはしんどい討論だったのではと、余計な気を回してしまったが、交流会後の深夜に及ぶ同世代同士の熱っぽい討論を聞いて、全リ演運動の次への手応えを感じたものである。

『裏の畑……』は、三重国民文化祭への公募作品にこぼやしが手を加えて演出したもので、舞台化の成果はうかがえるが、それ以上の討論には進まなかった。

遠く山口より、飛行機で参加した広島友好の『安吾往来』

は、タイトルの通り坂口安吾を扱っているせいもあり、皆の注目を集めた。筆力もあり、好感がもてるが、作者の惚れ込んだ安吾を通して、何を訴えたかったのが希薄だという指摘が多かった。安吾は昭和七年、二十七才のとき女流作家の矢田津世子を知り、一目惚れするのだが、彼女の男の介在を知り、破壊僧的な生活を送りつつ、津世子を観念的に純化し、理想化していく。結局、兄事した牧野信一が目殺し、安吾は津世子へ絶縁状を送って五年越しの思いを断ち切り、長編『吹雪物語』を書き始めるのが実相のようだが、そのモメントがくっきり描かれていないため、作者の気持が十分伝わらないものとなっている。参加者は一様に上演を勧めた。劇団（演劇街）の事情やら、広島自身が役者としての魅力がありすぎるせい（？）か、自作が上演される機会が少ないようだが、宇都宮報告にもあったように、観客と四つに組んで対峙し、舞台化を果たすことで彼の内在する創作力が急激に開花するのではないだろうか。その他『チェルノブイリ』を見ている『は、論議はされなかったが、あまり実態を知られていない世界を描いた面への評価と、斬り口の凡庸さへの批判（例えば、翌日の馬籠散策時、こぼやしは、チェルノブイリ近郊では子供たちが自分の寿命を知り、登校拒否をして学校が成立しない、その深刻さから描いていくことの指摘）などがあった。今回も新作『忠臣蔵』のユニークさをもって参加した中村、高

校演劇の場で教員仲間と運動を進め、作品を書き続けている藤本の『明治の光……』などに触れられなかったことを申し訳なく思いつく、馬籠峠に近い民宿の寒さに勝てず八時近くから交流会と相成った。尚、作品のみ参加した笹谷の『弓人は翔んだ』は、一貫して地元視点をおいた骨太い仕事であり、注視されていること。また、こばやしが会場で配った大学生の習作『高校生』他に、新鮮なひらめきを感じたことを付記しておく。

## 五、交流会

東・西リ演の交流会に酒はつきもので、ましてや屈折した(?)書き手が、寒さの中集まればたちまち賑やかな交歓の場となり、なんと飲んだ酒(一升瓶)が八本――

民宿のおばさんにびっくりされるやら、あきれかえられるやらで、深夜割増料金もふくめて予算ギリギリでかろうじて納まった。作者としては女性一人の参加で元氣吐いた真木さんは、久しぶりに明かるく最後まで討論参加で、東と西のメール交換も心配したエキサイティングシーンもなく、いつの間にか各々炬燵にもぐり込んだ。うとうとしつつ、参加した幾人かが、真木さんの『陸橋』を読んだことも、あるいはそういう作品の存在すら知らない実情を考えた。最近でこそ書かれていないが、東川の作品や西の和田澄子の『身検』など、思いつくまゝあげても、東・西リ

演はその時代、時代に立向かった作品を生み出してきた。現時点での批判も評価も自由だが、ともあれ、それらの作品を再読する機会がどこかにあれば、と感じつつ、深い眠りに陥った。

## 六、絞めくりと散索

民宿から峠まで歩いて十分。標高八百米からの眺めは、あいにく曇り空で絶景とは言えなかったが、中山道を通って峠へ行く道程は、藤村の『夜明け前』にも描かれたところで、ふと歴史を感じさせる朝でもあった。参加者の都合やら、馬籠宿散索の要望などもあって、二日目は討論を割愛して、絞めくりとさせてもらった。「西」からは、『ドラマの森』第二集への取り組み報告やら、阪神大震災の実態が写真紹介もふくめて報告された。遠路北海道から参加の矢作は「知ってる範囲で」とことわりつつ、北海道の劇団と、東・西との交流への期待を語ってくれた。最後にこばやしは、時間不足で尽くせなかった思いをぶつけるように、持論でもある地方からの文化発信のあらためての意義と、戦後五十年を迎えた今日の戦争責任について問題提起した。自治体主導の「地方文化」も話題になりつつあるが、それらは「建物」をつくり「東京」から「著名」な演劇人を招いて「教える」ようなあり方が多く、地域の人たちの要求に応えるものではない。全リ演に集う各地の劇団の役

割と課題が増々大きくなっていると言える。また、いまだに日本がアジアの国々に残虐な侵略戦争を行った事実さえも認めようとしないうえに、為政者が牛耳る我が国の病巣、突きつめていくと私たち自身の精神風土、思想の根っこに突き当たっていくわけだが、そこに杭を打ち込む創造が求められている時期といえる。「演劇会議」八十六号の、こばやし巻頭文の思いもそこにあるだろう。

今回の作家会議へ参加して、各々は少しでも感じたものを持ちかえり、栗原の言う「二、三年あとにまた」という気持で、記念写真を撮り、ひとまず閉会した。

急いで帰る組と別れて、過半数の面々で馬籠の宿街へ向かい、藤村記念館にも寄った。藤村に大きな影響を与えたのが北村透谷であり、彼は明治維新の変革を「革命にあらず移動なり」と喝破した。そのあたりを語りつつ散索という考えもあったが、にわか仕立ての銜学披露はやめて、それぞれが明治のたたずまいに触れた。おだやかな陽差しの中、歩きつゝ阪神大震災で被害に遭われた方々の復興と、入院された萩坂老の一日も早い回復を祈った。

## 七、おわりに。

進行や酒と勘定の心配をしつゝのまとめはやはりしんどく、不十分なものになってしまったがお許しいただきたい。萩坂が寄せてくれた手紙の最後に、「演劇会議」とは別に



いろいろを囲んでの討論

戯曲研究・相互批判の雑誌を、同人制でもいいから持てないか、と記してあった。その仕事量を考えると仲々踏み出せないが、今回の交流をきっかけに、その意とするとところ少しでも追求していけたらと思う。それと、身近な兄弟劇団の仕事を見る度考えるのだが、作品と共に、今、演出の力量も強く求められているのではないか。夏のセミナーでも、そのあたりの論議ができる場が必要のように思う。と少し話を広げたところで、まとめらしからぬまとめとさせていただく。

## 地域 の 動き

# 国民文化祭 みえ '94を終わって

劇団すがお 加藤 武 夫

今年度の国民文化祭みえ'94が終わりました。まだまだ一般的にも私たちの間でも遠い存在かもしれませんが、アマチュア文化の祭典として行政が積極的にかかわりをもとうとしている時、私たちも少し関心をもった方がいい方ではないでしょうか。三重県の事例について簡単にその取組みと問題点について報告致します。

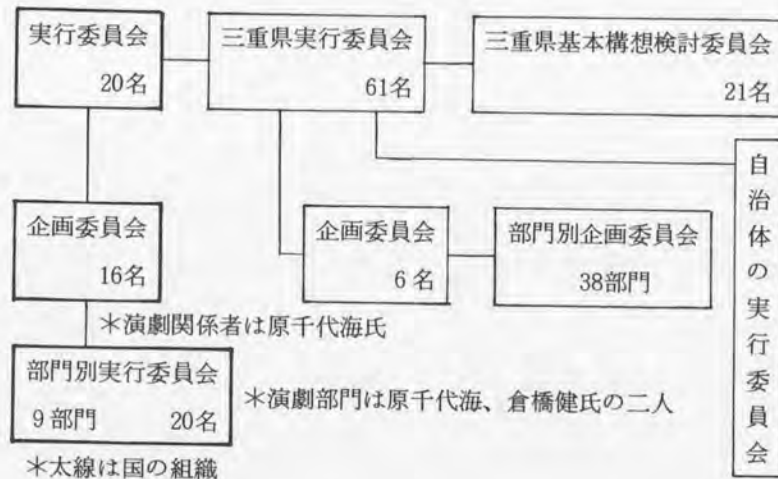
一、国民文化祭は当時の文化庁長官の三浦朱門氏の発案で始まったもので、国民体育大会の文化版として昭和六十一年東京都での開催をかわきりに各県持ち回りで始まりまし。今年度は第九回、三重県で開催されました。今後、栃木、富山、香川と続きます。

二、国民文化祭には別表のような組織ですが、実質的な組織は部門別実行委員会での組織は殆どがセレモニーです。

この部門別実行委員会の演劇部門は、高校演劇連盟から一名と地域劇団協議会から四名、気心の知れたメンバーでの構成でした。あとは開催市町村の代表と事務局です。

演劇祭の企画はこの実行委員会の仕事ですが、県の資料

別表 国民文化祭の組織図



提供は懇切丁寧ですが、先催県の資料が一杯で前例がいかに重要視されているかです。限られた時間で限られた予算で前例に倣いながら、かつ三重県らしい特色をだせという最初のうちは「大金というのはいくら万円オーダーをいいますから少々の事は……」という話でしたが、その後のパブルの崩壊で県の財政が厳しくなると話は一転しました。

この財政の規模は三十八事業全体で十六億七千七百円という私たちに天文学的な数字です。

三、出演者の公募は、前年の国民文化祭が終わるのをまつて各県を通じて行いますが、翌年の三月には出演劇団の決定を求められます。ですから水面下の出演交渉をしておかねばなりません。

出演者は派遣県の推薦によりますから、まず推薦がなければ出演ができません。県は必ずしもウマイ劇団を推薦するわけではありませんから、主催県から逆指名で出演依頼の必要もあります。そうしなければ一定の水俣が保てません。応募のあったいくつかの劇団から選択するのは大変にむずかしい限りです。

四、予算は、前年に予算要求をしなければなりません。しかし、その時点では企画も出演劇団も未定です。そんな中で作成した予算書が今度は事業を制約して来ます。企画画の上で議論が伯中して、こと予算に及ぶと「そんな予算は組んでない」と言った形です。

この予算が、文化庁のガイドラインとやらで、主催者は出演者に旅費は一切支出せず、宿泊負担として一泊三千円道具類の運搬経費の実費の半額程度です。残りは派遣県(市町村)が負担するか個人負担です。ですから劇団はぐるまの関係者三十五名という『ブッタ』ですら主催者からはわずかに二十四万円程度の補助しか支払われていません。例えば詩吟部門は参加者が約二千四百名といいますが、一度の出演者二十〜三十人、舞台で数分吟じておしまいです。それも演劇もみな同じです。

五、一事業で約二十万円程度金はかけます。会場費、スタッフ経費、印刷費、出演者、関係者の弁当代、パーティ経費、旅費等会議の経費、スタッフジャンパー代、看板代等に僅かな出演者への経費です。金のかけ方が逆転しています。

六、入場料金は一切取れません。アマチュアだからでしょう。ですから観客動員は大変です。宣材の作成も、例えば四日市市での開催事業は四事業の開催ですから全部の宣伝はしきりに行いますが、演劇の出演劇団の紹介とか、

作品の紹介は一切できないという。あわてて自前の金のかからないチラシを作成した次第です。

観客動員は「演劇祭」で二日間、六作品で延べ三千六百名、「一人芝居・民話語り」で昼夜あわせて千百名（主催者発表）でしたからまああてでした。

七、こんな中で、地元劇団としては行政の呼びかけで事業の成功に向けて専門委員会に結集しました。また、地元八劇団による創作劇をこばやしひろし氏の協力により成功させました。地元高校もやはり創作劇にチャレンジして日頃できない贅沢な芝居作りができました。

このことは地元劇団の芝居づくりの楽しさを満喫させ、かつむずかしさを知らしめ、そして大きな連帯を深めることができ、国民文化祭の大きな収穫でした。

八、演劇部門では、芝居の講評を試みました。折角遠来の上演劇団も上演したらハイサヨウナラではあまりに淡泊と、早川昭二、広渡常敏、しかたしん、加藤益弘の四氏に講師をお願いして、作品毎に上演後六十分程度の講評とミートイングを行い出演劇団から感謝されました。

九、国民文化祭を初めからかわってきた者としての感想は、一生懸命頑張ってみたものの、前例主義、予算の効率的配分等私たちでは行政の大きな力にはかないませんでした。しかし、もし適当にしか関わらなかったら、もっとハートのない事業にしかならなかったのではないだろうか。

#### ◎演劇祭の上演作品

##### 〔現代演劇〕

四日市文化会館

『岩魚の日記』万生満也／作 劇団F（福井）

『HERO』山縣直行／作 石川県立工業高校

『ブッタ』こばやしひろし／作 劇団はぐるま（岐阜）

『夢見る頃を過ぎても』清水喜美子／作

三重県高校演劇合同

『テンペスト』シェイクスピア／作 五頭良二／脚色

劇団創造市場（茨木）

『裏の畑でボチがなく』多川春海・

こばやしひろし／作 三重県地域劇団合同

△この作品は、脚色を含めて全てオリジナル作品です▽

##### 〔一人芝居・民話語り〕

河芸町民会館

一人芝居の部

『とら』田中千禾夫／作 劇団文芸座

『虫づくし』別役実／作 劇団白戦

『雨ニモ負ケズ野ざらし紀行』

劇団何なんじやもんじや

ゲスト『母』河東けい 劇団関西芸術座



##### 民話語りの部

細越雅子（岩手） 渡辺澄子（栃木） 市原麟一郎

（岡山） 浜崎けい子（宮崎） 河芸町朗読サークル

（三重） ゲスト 松谷みよ子／米屋陽一

演劇関係ではこの「演劇祭」とは別に「芭蕉フェスティバル」が上野市で開催され、全国公募による（賞金百万円）演劇作品を上演した。

『蝶の宴―夢は枯野を廻り終え』島田九輔／作・ふじたあさや／演出 県下六劇団の結集で上演し注目を浴びました。この報告は、別途上野市民劇場の杉森氏より報告される予定です。

三重県の場合は、本番までに「カルチュアフェスティバル」という形でアマチュア文化団体の育成に当局が尽力して来ており、そのお陰で二回にわたる「全日本演劇フェスティバル」が開催できた訳で、その収穫は大きかったと言えます。また、このフェスティバルの成功は、当局に対する演劇部門の発言力を増したとも言えるでしょう。

劇団はぐるまの『ブッタ』のような大作の上演や、講師による講評はこれまでの国民文化祭にはなかった事で、今後に続いてほしい。

全リ演の各劇団が行政に積極的にかわり、文化行政に影響力を行使する時期ではないでしょうか。

＊いま事務局では最後の報告書の作成に余念がありません。間もなく立派な冊子となって報告書が完成することとします。詳しくはその報告書等待つとして観客と出演者の数だけでも事務局に聞きました。

＊出演者総数 千六百六十六団体 二万四千六百七十七名

観客 八万三千六百名

＊今年度からポスト国民文化祭の事業として、県民芸術文化祭が行われることになりました。

# 顔

平石耕一

劇作家

東京芸術座・劇団アポストロフィー



## 『霜柱の下より』

演劇集団「五色の花」・演出 玉野井 直樹

冬。一面に立った霜柱。土の中の水分が柱状にこおって地表を持ち上げるため、一見何の変哲も無い地面に見えるが、その下には自然によって創り出された氷の世界が広がっている。早朝、まだ誰の足跡もついていない真っさらな霜柱。自分が最初に踏みつけるのだと、密かに、その時の快感を想像しながら、ゆっくりと最初の一步を踏み出す。「ザクッ！」やったと思った瞬間、「ズシン」。脳天に鈍い感覚が走り抜け、我に返る。美しい氷の世界の下に土が、大地がひっそりと存在していたことを今更のように思い出す。「ああ、自分は忘れていた」と、暫し呆然。その後何故だか後悔に似たような情けないような気持ちに駆られる。そしてそれは、こんな自分にも血が流れている事、自分も全体の一部なのだということを、無言のうちに靴底から気付かせてくれる。

私が平石作品に出会う度、いつもこれと同じ思いに駆られるのです。



最初は只面白く読んだ戯曲が、何度も読み返すうちに、何本もの見えない糸によって構成されていることに気付き始める。見つけたぞと言わんばかりに、糸を一本一本手繰ってゆく。すると中から、普段からは想像も出来ない程、真剣な眼差しで人間を見つめる氏の姿が現れてくる。その真剣さに一瞬たじろぎ、目を見張る。しかし、刹那、彼の顔は、照れながらも、優しく微笑むのであります。見られちゃったかと言わんばかりに。そして呼びかけるのです。「タマちゃん、逃げたらダメだ!」「みんなと一緒に生きていこうよ!」……

身動きも出来ず、呆然とした後、漸く我に返り、渾身の力を込めて「俺は逃げてはいないぞ!」と猛反発してみせる。しかし、それも徒勞。自分の顔が、みるみる赤らんでゆくのがわかる。溜め息を吐きながらうなだれると、そこに土がある。ハッとして、正面に向き直る。そこにも平石耕一という温かい土がいたことに気付く。そして、その土に、限らない敬意といとおしさを感ずる時、次回の作品を看に、又、一緒に吞みたくなるのだ。

# 顔

## 汲田正子

演出家・俳優  
劇団はぐるま



## 不思議な世界を創出する——汲田正子

「象」同人 永井 己陽子

劇団はぐるまのミュージカル「ブッダ」。作者のこばやしひろしは、ブッダの教えを通して、人の幸せのありようを問いかける。

ふくらみのある台詞、ひそやかなリリズムにめめられた祈りの合唱、うちなるおもいを伸びやかに表現する踊りによって、ギリシヤ悲劇をおもわせる王室の悲劇と、ことばではいいあらわせない法悦の境地が、解きつほぐれつ渦巻き、渾然一体となって、ブッダ敬慕に昇華する。舞台は、リアルにして絵巻物を見るような華麗さで展開し、シリアスでありながらエンターテインメント性もあわせもつ不思議な世界が創出された。

四十周年の記念公演、初演の反響は大きく、昨年の三重県国民文化祭、今年二月、東員町ホール（三重県）の公演を含めて、上演回数十五回に及ぶ。

演出をした汲田正子は「スタッフに恵まれて」と謙遜する。彼女のことばどおり、たしかに、芸術性の高い装置

（板坂晋治）、音楽（井戸清輔）、衣裳（加納豊美）ブランや、照明、効果、制作、舞台監督に支えられた。しかし、その上にたつて、ひとりひとりの俳優の可能性を親身になつて引き出し、ときには非情に見えながら、あたたかい批評もして確信をもたせるように仕向け、全体の創造のなかに組合わせ、融合させた汲田正子の演出者としての力が、秀作「ブッダ」を創りあげた。

パートナーこばやしひろしとともに、はぐるまを回しつづけて四十二年、円成寺の庫裡としての仕事、総合舞台はぐるまの経理、NHK朗読教室の講師、三月公演「カンナの咲き乱れるはて」では舞台に立つ。日々多忙。岐阜高演劇部こばやしひろしとの出会いが、料亭の一人娘、汲田正子の命運を決めた。



# 顔

## 猿渡公一

演出家

福岡現代劇場 西会議議長



## 福岡の前衛的な舞台作家だ！

侑やまざきビデオ代表取締役

山口 暁一朗

猿渡さんの私生活での寡黙さは有名である。奥さんの圭以子さんも「言葉を出すのが勿体ないのじゃないかと思うくらい無口だ」という。笑うときも声を出して高笑いすることなどほとんどない。つい声が出たとしても、自分でかみしめながらひそかに笑っている感じである。

そんな猿渡さんが、いまの若い観客からみたら、かなり饒舌な作家たちと思われるロルカやブレヒトをはじめ、清水邦夫、岡部耕大、井上ひさし、ひるがえってはソボクレスやモリエール、シェイクスピア、そして最近では、チェーホフの「かもめ」までもものにしてしまった。演出歴四十年の猿渡さんは、やはり芝居（戯曲）の言葉に、自分のコスモスのひろがり期待し、役者の肉体とともに常に新しい「世界」を共有したいというよろこびを追求めてきた人かもしれない。私生活での寡黙さは、そのための研ぎ澄まされた感覚を、つねに斬新な気持で維持していきたいという無意識のうちの「欲張り姿勢」ではなからうか。

稽古場の猿渡さんも決して饒舌な演出家ではない。役者へのダメだしも、役者が困ってしまうような短い言葉での指示が多い。でも、その短い言葉が、役者に、役どころの奥の深さやひろがりを感じさせてしまうまで（感性だけでは絶対許さない演出家だが）かなり辛抱強く待つ演出家でもある。稽古場の嫌いなわたしにはとても真似のできない芸当だが、役者が喜んでいくことを喜ぶ「男産婆」の役目を、四十年近くもつづけていることに、愚弟のわたしは敬意を表したい。

猿渡公一は、やはり福岡の前衛的な舞台作家だと思う。その前衛性がなくならないかぎり、わたしも彼の友でありたいと思っている。



# 忘れえぬ最後の酒席

青年劇場 爪 生 正 美

千田是也先生を偲び、思い出を語るといには、まだ、仲々その気にはなれぬほどの突然の急逝であった。最後に先生にお会いしたのは昨年の十月のなかば、亡くなられる二カ月ほど前である。土方与平と私は、先生に演出をお願



(演出家・俳優座) 故・千田是也氏

いした九月公演「村井家の人々」の後始末と、もう一つは「消費税の税率アップに反対する演劇人の会」の呼びかけ人になって頂くためにお訪ねしたわけであった。

「村井家の人々」は、朝のワイド番組「敬老の日」特集で、「老人パワー」という形で戦前の横浜事件の再審請求にかける人々をとりあげる、その番組づくりのプロセスを通して、戦前の言論弾圧と今日のマスコミの危険性とを重ね合わせて告発しようとする、ふじたあさや氏の作品であった。

先生と青年劇場とのおつきあいは、一九七四年、築地小劇場五〇周年記念の「海戦」の演出にはじまり「風の檻」「臨界幻想」「闇の中の白い道」「書かれなかった頁」「総裁公館」そして「村井家の人々」と、労働運動、原発、教科書検定、国鉄分割民営、そしてマスメディアへの告発と、正にその時々「今の問題」を扱った作品が続いている。先生が一番やりたいといわれる作品系列だけに、今回も、とても張り切っておられたわけであった。しかし——今にして思えば我々も知らなかった肝臓癌の影響だったわけだが——昨年の猛暑のせいもあって、脚本の改訂と演出プランの論議の段階で、ヘルベスが身体中にひろがり夜も眠れない状態がつづき、稽古には最初の数日だけで、あとは殆ど顔を出されずに、助手の私と中野千春が、先生との合意の上での演出プランに沿って代行したわけであった。

「後始末」とは、先生の代理の方から劇団の製作部に「演出料を返却したいから口座番号を教えてください」との電話が入り「それは先生のお考え違い」と、土方と私が伺ったわけである。「数回にわたる先生の御意見にそった脚本の改訂、後藤君の演じる村井明彦氏をあくまで主人公に据え、今日の少数意見も、それが真実である限り、必ず未来の多数意見になりうる」ことをしっかりと押え、先生の演出プランに忠実に舞台づくりをした。旨を力説して——先生も、その後体調が回復され舞台をみて下さっていたわけ——心よく、あっさりと申出を撤回して頂いたわけであった。勿論、呼びかけ人も御了承頂いた。そこまでは良かったのだが、では飲もうと言われて、——いつものように、ちゃんと準備がされていたのだから、不思議であるが、——次から次へと料理が出るわ、何種類もの酒がチャンポンですすめられるわ、演劇界全体の話から政治の話へと、辞去する暇もないままに数時間、決して弱くはない土方も私も相当酔っぱらったわけであった。先生も我々同様に召し上がった。

ひょっとして先生の死期を早めたのかという反省も二人にはある。しかし、先生には人生最後の「芝居を語り政治を語る」楽しい酒だったろうと思うと、それも又、良かったのではと、二人して慰めあってもいいのである。

先生は二〇才で、築地小劇場の柿落しの演目、ゲーリン

グ作・土方与志演出の「海戦」の第二の水兵役で専門演劇人としての出発をされ、築地小劇場七〇周年の年に、九〇才で現役の演出家として生涯を閉じられた。先生は常に新しいものに挑戦し大胆な芸術遍歴もされた。にも拘らず築地小劇場以来の新劇運動の初心ともいえる「実験性と前衛性」を貫き、商業主義からも時の権力からも自立した、何ものにも拘束されることなく自らの芸術的主張を貫き、社会と人間の真実に迫るという運動の原則に大切にされてきた。社団法人日本劇団協議会の会長、二国財団の理事という日本の現代演劇を代表する公的な立場に於いても、行政に対し毅然たる対応を示された。この立場こそが、先生と青年劇場をつなぐ最大の絆であった。

最後の酒席でも、正に、この新劇運動の初心が話題の中心であった。忘れえぬ数時間であった。先生からは、その後、後藤陽吉の演技に対し「千田賞」の色紙と金一封が送られてきた。そのお礼の電話をして話し合ったのがお声をきく最後であった。亡くなられる十日ほど前のことである。

今年は戦後五〇年、演劇構造の急速な様子が進む中、先生の遺志をしっかりとうけつぎ、且、きちんと、次の世代へ受け渡すことを自らに言いかけせているところである。先生、本当に、いろいろと有難うございました。安らかに眠りください。(一九九五・三・五)

## 劇評

# 「家族」という存在 及び現在へのメッセージ

今 泉 おさむ

神戸自由劇場

劇団大阪「日本の風景」

作・山田 太一 演出・熊本 一

一九九四年十月二十九日 近鉄小劇場

劇団息吹「アンネの日記」

作・ハケット夫妻 演出・木田 昌秀

一九九四年十月十五日 近鉄小劇場

劇団きづがわ「河」

作・土屋 清 演出・林田 時夫

一九九五年二月十一日 近鉄小劇場

とに気付いてしまう。この交流がうまくいけば、もっと引き締まった舞台になっただろうと、残念に思う。内容から見れば、フランク一家とダーン一家との、閉塞状況に置かれた大人たちの起きるべくして起きる確執。その中で、爽やかに生き抜くアンネの姿、ペーターとの初恋に似た感情と、戦後の新劇では大評判になった作品である。

「家族」という面からみると、デュッセルを含めると見知らぬ三家族が急に共同生活をして、日常的に角付き合います。プライバシーがなく、しかも乏しい食料という条件が人間それぞれの利己的な面をむき出しにする。その非人間的な生活があらさまになることによって、ナチスによるユダヤ人差別と戦争の悲惨さが胸に訴えられる。その中でも、潑刺と生きたアンネを鮮やかに描くことによって、その彼女が理不尽にも収容所で死んでいったことが痛烈に胸を打ち、人種差別と戦争反対を鋭く訴えることになる。

ただ、初演から感じていることだが、唯一生き残ったオットーに気兼ねしてか、あまりにも彼を立派な人物として描いてしまっているために、人間的な葛藤がオットーによって解決されすぎて、ためにナチスの、戦争の惨禍が薄れてしまっている。観客の視点の広がりを見せてしまう。

アンネ役には、どうしてもキラキラとした新鮮さと華が必要である。そこが表現しきれていない。そのつまづきが全体に影響する。演出が書いているように、世の中、右旋

今年は時あたかも「国際家族年」、二つの劇団が意識したのかどうかは定かではないが、「大阪新劇フェスティバル」参加作品に、期せずして、特色ある「家族」の姿を舞台上に描き出した。

「アンネの日記」。民芸が上演したのは、ほぼ四十年前である。私も高校生の時に労演例会で観劇して、感激したのを思い起こす。当時は目新しかったオーディションによるアンネ役・三井美奈に人気が集まり、申し込みは抽選となり、吉行和子のほうで、残念に思った記憶がある。

その後の再演、再々演、そして他の劇団が上演したものも含めると五、六回は観ているだろうか。「息吹」自身も再演であるそうだが、舞台はじっくりと真摯に取り組んでいる。その姿勢に共感を持つのはやぶさかではないが、見終わって、まず感じたのは長すぎるという、見疲れた感じである。世の中確かにテンポもリズムも変わり、演劇も二時間半程度を見慣れてしまっているもので、三時間ともなるとそれだけで、という思いが先に立つ。その原因は大人たちにベテランを配して、彼等はしつかりと着実に演じているのだが、未熟なアンネたちを包み込んで育て、共に伸びていくだけの余裕までは感じられず、ドラマをうまく盛り立てられなかった。これが、劇全体のレベルを向上させられずに、並列的な舞台となり、若い演技者の未熟さを目立たせてしまい、ドラマとしての興を欠いてしまっているこ

回して、それがほとんど定着してしまい、「戦争を知らない子どもたち」どころか、戦争があったことさえも意識の底に乏しい時代になってしまった現在。オットーの幕切れの『あの子のことを思うと、私は慙愧に耐えないんです』という台詞が観客の心にフィットできないこの時代環境には、何らかの舞台表現上の手立てが必要ではなかったかと思えるのである。しかし、オーソドックスにしっかりと創り上げていった成果は、十分に感じ取れる。

「大阪」はラフカデオ・ハーンを描いた「日本の風景」を上演した。幼い時から家庭的には恵まれなかったハーンが、四十才で来日してその年に二十三才の小泉セツと結婚する。それも当時よくある来日外国人の現地妻ではなくて、正式の結婚であり、またセツの縁者六人をも抱え込むことであった。それはどまでも、彼にとって「家庭」は憧れの対象であったのか。となると、当時の日本の「大家族」制は、より彼にとっては、好ましいものであったようにも思える。『科学ハ、世ノ中ヲ、ダメニシマス』という台詞で批判しているのは、「核家族」に慣れてしまった現代人には、うとましくてやりきれないだろうが、雑然騒然とした中で、泣き笑い、いがみ合い慰め合う「大家族」の姿を描くことによって、人と人との温もりを失ってしまった現代の家族の姿を批判しているようにも感じとれる。

神津晴朗は、不器用な持ち味をうまく生かして、真面目

さの目立つハーンを好演している。これに新人で、必死に演じているセツ役の岩崎樹と、非常にはまった夫婦になった。そして、取り巻く家族をベテランで固めた配役の妙でよりハーン夫妻を際立たせた。この配役構成に演出の意図があったならば、これは見事に成功している。

大家族の日常をベテランのやりとりで、多少喜劇タッチで描いていき、それによって真面目で融通のきかない性格と、日本の民間伝承の掘り起こしにのめり込んでいくハーンの姿を対照的により浮き彫りにさせた。

ただ、登場人物が全て心優しい人々のみであるので、未だ封建社会そのままの明治の時代に、外国人の嫁となった出戻りの若い女性に対する世間の風当りの強さが、ほとんど描かれていない。そのため、実際のセツの心根がどうであったのか、その心の振幅が埋もれてしまっている。見えない。となると、うっかり現代社会の心情で、舞台を見てしまいかねないという危険性がある。

二つの舞台を「家族」のドラマとして見ると、双方ともに著名な人物を主人公にしているので、観客はすでに時代背景を知っているものとしてしまいがちになる。だがそれは、案外抜け落ちていくものである。社会状況の中で人間は葛藤する。その視点を補助するのは必要なことであろうし、よりドラマを鮮明にする。この心配りが共通して、い

ま少し必要ではなかったかと感じる。

と、まとめたところで、劇団「きづがわ」の舞台もいうことになった。「河」。今は亡き、広島月曜会・土屋氏の力作である。関西では、二十年前に「関西芸術座」「四紀会」がほぼ同時期に上演して以来であろう。戦後間もなくの民主主義運動高揚期に、鋭く原爆を告発して若くして逝った詩人・峠三吉の半生とその取り巻く人間模様が暖かい眼で描かれている。戦後すぐの四十八、五十三、世の中が変革される予感を感じて、若者たちを始め、多くの人々が新しい日本が生まれると信じて活動していった。しかし一方では、逆行する動きも徐々に姿を現してきていた。この時代が……ということとは別に、舞台を見ていくうちに、ある懐かしさがこみ上げてきた。それは、ほぼ三十九、四十年前頃となろうか、職場演劇・サークル演劇が盛んな時期に、このような題材が好んで書かれ、上演されていたことを思い出す。人物は案外と典型的で、善玉の労働者と悪玉の職制が出てきて、事件が起き迂余曲折の後、希望のもてる終幕となる。この舞台は雰囲気は似ているが、しかし描き方が全く異なる。それは、この時代に生きた人々の心の行動が描かれていることである。主人公・峠三吉も声高には叫ばない。芸術に重きをおく画家・大木英作の生き方も否定されていない。取り巻く人々はそれぞれに悩み傷

付きながらも、自分を返りながら生きようとしている。そこには時代を生きた生まの人間が息付いている。

「きづがわ」の舞台は、その悩みを抱えながらも生きようとしている登場人物の姿を丁寧に描こうとしている。対するものが人物として舞台上に現れないために、より一人ひとりの人物の形象が大事になっていくのだが、それを舞台の雰囲気明るく作りあげたことによって、逆に個々の内面の悩みが分かり易くなっている。峠三吉にしても業病を抱えながら悲痛ではない。そのエキセントリックな芸術家の面は、中屋光雄は好演している。が、「病氣」がいつ発病するかという脆さと心の揺れまではまだ見えていない。見田の喜田和雄は若者の一途さだけが強調されて、恋に、組織の使命に、揺れる心までは届いていない。だが、若者たちの集団は、次第に形勢が悪くなっても、明るさで乗り切ることによって、その逞しさが表現できている。この一見今更古いと思われるような作品を、郷愁ではなくて、人々が現実を直視しない閉塞状況にも似た現在に、一石を投じようとする劇団の意気込みを感じさせる舞台であった。

ただ、装置は下手の「三吉の家」と上手の「家の前・若者の作業する場」が横に同一並行に作られたので、転換しても単調な感じになった。また、当時に表現するニューススライドが下手上に映されたが、家の壁に段差があるうえに、暗く不鮮明なために、ほとんど分からない。こういう

た「裏方」の面では当時の手作り演劇ではなく、照明も含め、新しさを取り入れたもう一工夫が欲しい。



## 青年劇場

# 「もう一人のト」を見て

津上忠

冒頭に断っておきたいことは、編集の早川氏から依頼されたのは劇評なのだが、わたしとしては、「劇評」なるものに永年悩まされ続けてきたのを想起こすので、こういうことはやるまい、いや、少なくともやりたくない、かねがね思っていたのである。だからといって劇評の存在を否定はしない。ただ批評的な書き方を粧って当事者たちに、いかにも知ったかぶりのお説教をたれたり、ときには高飛車的に罵生雑言を浴びせるなんぞは何としてもいた

けない。そういう「劇評」にあうと、芝居づくりの苦労を知らない劇評家の「裏」が見えてくるのである。

さて、前おきが長くなって申しわけない。そんなわけで、以下、芝居を見た感想で勘弁してもらいたい。

「もう一人のヒト」については、二十五年前の初演（民芸）のとき、甞右衛門の特別参加について宇野さんからの申し入れがあり、当時、わたしもその折衝にあった一員であっただけに想い出深い。ことに実際の舞台での香椎宮の滝沢さんと、甞右衛門の小沢中将の競演は、まさに横綱相撲の感があった。たしか戦前の映画「逢魔の辻」のエリート与力の滝沢さんと下級同心新吾役の甞右衛門の顔あわせ以来であり、芝居では初めてだった。

何せ、この作品は飯沢戯曲のなかでは傑出したべきである、このときの上演を見てわたしはそう思った。そのいちいちはいわないが、それを青年劇場が再演する。これは快挙といっている。また二十五年の歳月を経たこんにち、この劇団の俳優たちが、いかに成長したかのバロメーターになるとも思った。

それにしても青年劇場のキャスティングを知ったとき、「民芸」初演と比較イメージを浮べるつもりはないが、しかし飯沢戯曲の面白さは俳優をアテこんでのえがき方をしているだけに「適役」が必要条件で大いに気になるところなのである。わたしなりに青年劇場のキャスティングが

生きるの、おそらく靴屋の一家であろうと予測した。むしろ「民芸」のときの宇野さん、小夜福子夫婦も面白く見たが、こんどの森三平太と小竹伊津子夫婦もきつと面白く見せてくれるちがいないと期待していた。案の定、見ての結果は、わたしの予側はあつた。しかも「もう一人のヒト」という、いかにもアイロニカルな題名が生き生きとひびき、あらためて内容の新鮮さを感じた。

思い返してみれば、初演のときは滝沢、甞右衛門の演じ方に目を奪われ、ついつい主題の中心たる靴屋の宇野さんの印象が、わたしには弱かった。こんなことを書くとき宇野さんが生きていたら「お叱り」を蒙るかもしれないが、敢えていわせてもらえば、わたしにはそういう印象だ。それが青年劇場では逆に、いっぽうの香椎宮（千賀）と小沢中将（後藤）の印象が弱かったせいかもしれない。

それにしても、あらためて飯沢戯曲、というより、この戯曲の域と、運びの伏線を各登場人物のセリフに散りばめるといふ、オーソドックスな技巧的なうまさ以上に思想としてのドラマツルギーを感じる。ただ惜しむらくは、各場が進展していくなかで、次第に戦場へと追いこまれていく情況の変化に対する演出上の加味、或いは各登場人物への反映等があまり感じられなかったのは足りない点であろう。そうはいながらも、青年劇場の戦後五十年・創立三十周年にふさわしいこの再演は成功したといえよう。そして、ま

さに「変革のリアリズム」に対応できる飯沢喜劇があつたればこそである。



## 『安定した舞台成果 『センポ・スギハアラ』を観て

芳 地 隆 介

当時、杉原という外交官がいて、ユダヤ人を助けたという史実について、ぼくは寡聞であった。勉強にもなり、この上演は状況的にも大いに意義あり、と思わないわけはなかった。にもかかわらず、劇団「銅鑼」の『センポ・スギハアラ』の初演を観たとき、主として脚本に対してではあるが、かなり不満が残った。

国内的な背景や国際状況との関係をもっと描くべきではないか。膨大な時間を要する舞台にならざるを得ないとい

うことであれば、登場人物だけに限定しても、その関係をもっとリアルに描くべきであろう、そのことによってでもある程度解析可能であろう、というのが雑駁ではあるが、不満のおおよその内容であった。

例えば、杉原と幸子の関係においては、何もおこらず、そして何もなかった。などというところが、果たしてあり得るか。ユダヤ人同士の確執が、リアルに描かれることによつて、ヤンクルの人の良さが、観客にとってもっと身近なものとなりはしないだろうか。

脚本を読んだ。感想は変わらなかった。

「土くれ」の上演は、それらを熟知したうえでのことであらう。

その意味で言えば、外交官執務室とユダヤ人の隠れ家が交互に転換されるという単調なドラマ作りに問題はあつたにしても、柱の向きを変えるだけで、それらを表現したのは、工夫の効いた装置であつた。そのことによつて、劇場構造の悪条件をそれなりに克服していた。

きわめて演じにくい役柄、好人物としてのみ描かれている杉原外交官を、生硬なところもあるが、石塚幹雄は好演していた。欲を言えば、心情表現に振幅の大きさがほしい。ヤンクル役である、快演の安原昇にもそれは言えた。達者ではあるのだが、単調に見える。川村富雄もいい味を見せてた。庄司雅子のひたむきさもよくでていた。大村洋代は面

白い役者だった。近藤千津絵ののびのびした表現にも好感がもてた。なかでも、とらえどころのない幸子役を、客演の箕山友梨が端正に演じていたのが面白かった。等々、こう見てくると、殆ど舞台は破綻を見せず、実に堅実。集団の力量の向上や、演出の福田悦雄の才腕を見せた舞台であった。

演劇公演というのは、より多くの観客に喜んでもらえて、従ってそのことによってではあるけれども、演じた側にも一定の成果が共有され満足感が得られれば、それで充分である、と言えなくはない。客席ではそのように感じられた問題はこうであらう。

舞台を作る側が、表現のリアル（真実）さをどれだけ追求しようとしているか、そしてそのことによってではあるが、観る側の観察眼もより磨かれ高められるという関係を、絶えず目指していこうとしているか、でないか、であらう。

それは、ときには新しい表現の試みとしてみられ、あるときには実験的にもなる。そのことが舞台から伝わってくるかこないか、である。予定調和として舞台と観客が向かい合っていくことも決して悪くはない。が、それはそれである。

役者・スタッフ等々、力量ある集団員を揃えた「土くれ」に、みずみずしい試みを絶えず志向してはほしいと願うのは、決してないものねだりにはならぬ、と思う。

（80頁より続き）

何回も同じ板の上で満員の観客の中で芝居ができることは役者を成長させます。役者の成長に刃物はいらぬ。同じ板さえあれば良い！空間を支配する、大袈裟に言えば私は支配者です、と思えるときを味わえる場はそうはない。一点を起点にコンパスで円を描く、その円の中で自由に羽を伸ばし、自由に泳ぎ回る、私だけでなくこの場の誰もが夢を、喜びを、悲しみを、一人の人間のすべてが百人の思いのすべてが一つになる。そんな事が普通できますか！呼吸を一つにできますか！ここではそれが可能だ。演出なんぞやってそれが実感できるときはそれこそ死んでもいいと思う。

一つ一つ振り返れば、その時々には様々な思いが交錯する。ふつと、このまま去りたいと思うことがある。矛盾するようだが、それもまた現実である。至福の時を何時までも続けるわけにもいかないことは歴史が証明している……。何ていっても、けど、多分、やっぱり、やっているでしょうね。俺がいなければ、と自負する悪魔が潜んでいる。どこかで……。この悪魔がいる限り、皆さんとまたどこかでお会いすることになるでしょう。悟りました聖人にはやっぱりなれない。煩惱のおもむくままに、合掌。（ブッダを終えたばかりの為せブッダより）

## 私の俳優体験記

### 満洲育ちの大陸的気質

関西芸術座 小笠原 町子

関西の三つの新劇団（五月座、民衆劇場、制作座）が合して、職業専門劇団、関西芸術座を創立したのが、一九五七年だから、その二年前、制作座で、椎名麟三の「第三の証言」で初舞台をふんでいる私は、今年で役者生活四十年を迎える事になる。

只今、六十三歳の姥ざかりingで、東京海上のOL時代同期生の女子社員達は、立身出世の後、めでたく定年退職して、優雅に海外旅行など楽しんでるという情報には、正直、ふとうらやましくなる時もある。

「役者に定年はない」と、見栄をきってみても、劇団内結婚の、私のような夫婦役者はますます貧乏生活に落ち込んでゆく。

老後はどないなるんやろ と、弱気になる日々もあるの

だが。……バタバタと朝から晩迄、劇団運営の事、新しい作品の稽古、学校公演の制作、自主企画の一人芝居の事などで、頭がいっぱい。ようこれだけいそがしいこっちゃと、感心する毎日のだから、まだ現役まさかりと、自称させて頂いても、いい事にしよう。

ま、この原稿を書かせて頂く事で、我が演劇人生を洗い直してみるのも、けじめとして私のためになるかもしれない。

幼少時は、満洲の首都、新京（現在は中国の長春）で育ち、資本主義侵略の先兵であった父親の故で、生涯唯一のお金持生活の数年に、内地からぞくぞくやってくる、超一流の歌舞伎、オペラ、コンサート、バレエとかを数多く、鑑賞する習慣を身につけた事は、その後の演劇生活に大きく役立ったし、今でも借金してでも、観劇が優先する意欲は、老いても、ますます盛んである。

猛烈社員父親は当然のように、肺結核になり、引きあげの一年前に高知へ疎開して、敗戦を知らずに死ぬ。母子家庭のみじめさ、疎開村のいじめられっ子から逃げるように、母と大阪へ。エリート企業であったらしい東京海上入



『姥ざかり』関西芸術座公演——向って左端の着物姿（小笠原町子）

社で、母はひと安心したらしいのに、組合ですすめられて初めて観た新劇、大阪労演例会の「あゝ、荒野」に、強烈なショックを受けて、こんな芝居もあったのだ、世の中が

に続く事を予感した。

「働き蜂」「湿地帯」「小麦色の仲間たち」と、労演全国統一例会の長期の旅公演に続けさまに参加出来た事は、観客の要求を識る上で、又、政治情勢、労働運動、文化運動の流れの真只中に身をおく事で、二十代後半から三十代前半の私の精神は強靱になった。

六十年安保斗争にも積極的に加わり、母親大会、原水禁大会にもとり組んだ。

芝居だけにとどまっていなかった、関芸の理念と、体質に私は感謝している。

しかし、この三十年、文化情況は大きく変った。とだえていた京阪神労演に「一銭五厘の旗」で二十一年ぶりに復活。その後も、「姥ざかり」「虫」と、全国の市民劇場、演劇鑑賞会、労演にボツボツながら、順調に広がりつつあるのが嬉しい。

発足当時からその組織づくりにも参加していたおやこ劇場と関芸の歴史も長い。

しかし今、観客組織の要望、作品を選ぶシステムは、大きく変わろうとしている。

その観客の視点に感性にひたと身を寄せて、関西人の柔軟さで、新しい創造を産み出してゆこうと、関芸百余名中の一人だ。

関芸も大きく変った。創立当時のメンバー十八人全員が

変っていくのだ。と、二十歳の血はさわいで組合の演劇部に入り、戦後の職場演劇が最もはなやかな上昇期を迎えていたコンクールに優勝したり、私の青春は倅せにも演劇でスタートをきる。

うぬぼれのほせて、もっと勉強してプロになると、制作座の研究所に毎夜通う事になり、残業拒否で上司とトラブル。高給をふりすてて、その夜からアルバイトサロンにもぐり込み、母を暗澹とさせてしまった。

水商売のバイトは、六十過ぎてても、まだ足を洗えないのだから、因果なものだ。

関西芸術座の創立に、おとんぼの研究生として参加。指導者層が三倍にふえ、研究生も四十人もいて、役などつきそうもない最下段から、満洲育ちの大陸的気質とやらを発揮して、不器用！下手！熱演ばかりするな！と、ひんしゆくを買いながらも、先輩の代役をしたり、当時は一日三回公演の、児童劇で大奮闘したりで。三年目には、老舎作、岩田直二演出の「北京の車夫」の主役につく。

これが大きかった。私はダメだ！。何にも出来ない！という自覚を、やつと持った。

若さの荒けずり熱演体の私を、リアリズムの岩田演出は、ていねいにきびしく鉈をふるって分解した。身も心もボロボロになった私を、千終楽の幕が降りてもまだ続くダメ出しに、私は、はつきりと、自分の演劇生活が、永く、未来

六十歳をこえた。二十代、三十代がひしめいている。この若い力がほんとに活性化したら、関芸はグイッと前進する。

たしかな足音は、まだのろい。だが私は、関芸の歴史と、関芸の未来を見守る生き証人の一人として、舞台に立ち続けるつもりだ。



力不足に  
さいなまれながら……  
未来に向って

青年劇場 葛西和雄

先輩俳優が本来書くべきところを、その代打を、おちちよこちよいの私が後先考えずに引き受けてしまっ、まさしくしまったと思ったときには締切目前でした。「もう一人のヒト」の公演中のことです。三時間の上演時間、休憩を含めて全く楽屋の席を暖める時のない役、一日二回公演やら、会場変わりやら、諸会議やらで大きな計算がい、他のことは一切手に付かない状況でした。しかし、もう後



葛西和雄

がありません。編集部の内容とはかけ離れてしま  
いそうだし、熟考などできず体験談とはせいぜいもの笑い  
になるだけと心細くなったが……書くしかありません。

私の俳優体験は二十一年前から始まります。養成所卒業  
公演、大橋喜一さんの「煙突のあるオアシス」が初舞台で  
した。黒沢参吉さんの「とろいめらい」との二本だて、し  
かも三十名近い卒業生でダブルキャスト、一回きりの出演  
でした。ちなみに私は養成所の第五期生で今は二十七期生  
卒業公演も今では三日間四ステージは行われています。当  
時の養成所は夜間週三回で一年間の養成期間。私のような  
高卒者から大学生、社会人、地域劇団からの派遣など多種

多様な生徒が、多いときには三十人以上もいたのだから、  
週三回一日三時間の授業ではキメ細かな教育など望めませ  
ん。今にしてみれば「促成栽培」に近かったと言えるでし  
ょう。実習以外の座学も何も学んだかはほとんど覚えてい  
ません。（これは自分の責任ですが）

そんな養成所を修了して青年劇場に入団したのですが、  
すぐに学校公演の作品「グッドラック」に配役され特訓の  
後はじめて出演手当てをもらって舞台をふみました。しか  
し惨憺たるものでした。多分劇団としては期待に比べてく  
れなかった、自分としては何をどうしていいかわからない、  
という結果だったわけです。一年間回って私は役をおろさ  
れ、今度は学校公演の普及の仕事を与えられ、一人東北地  
方を歩きました。悔しさ——これがなかったら私はとうに  
退団していたことでしょう。又、見た高校生達からの手紙  
激励されたり感動してくれたり、何よりもそれらの体験が  
この仕事に引き止めてくれたのかも知れません。（当時の  
高校生が今なお劇団の芝居を見に来てくれています）役を  
おろされたことはまだあります。千田是也先生を演出に迎  
えての稽古二日目、私が配役されていた役は大幅に書き直  
され大先輩がやることが発表されました。戯曲構成上の変  
更とは言え大変なショックでした。入団九年目のことです。  
このことがあって逆に腹が据わったというかこりや相当の  
ことがあって当たり前の世界だ、小さいことに一喜一憂し

てはいられないぞと覚悟ができたように思います。

そうは言っても最初の十年、二十代の殆どの時期俳優の  
何たるかを掴めないまま、いつも自分の力不足をつきつけ  
られていました。この時期はむしろ俳優以外の劇団の仕事  
普及や道具作り、スタッフの仕事に喜びや充実感を感じて  
いました。又、地方公演を通してあちこちに友人ができ、  
再会の楽しみ、次はもっとうまくなって見てもらいたいとい  
う意欲も出てきて、俳優業というより劇団活動一般として  
この世界で頑張っているという腹が据わってきた時期でし  
た。

入団十年目に飯沢匡先生のご紹介でジェームス三木さん  
が劇団のために作・演出を引き受けてくださり私も出演す  
る機会を得ました。又、三木さんの作のテレビや商業演劇  
にも出させていただき初めての外部出演で、劇団の内と外  
の違い・劇団制の優点、外の世界の厳しさにわずかながら触  
れ大きな刺激となりました。全リ演加盟劇団の先輩俳優と  
も一緒に暮らしていろいろと教えていただきました。

あるリハサルするとき津川雅彦氏が「今の若い人はスタ  
ニラフスキーシステムを勉強しているのかな。僕はそれ  
で育ったんだけどなあ。」とおっしゃたのが新鮮で、見渡  
せばマスコミと言えどすっかりした方々の演技はみんなリ  
アリズムだなあと考えさせられました。私達の演技基礎も  
スタニスラフスキーシステムによる俳優教育のはずだが、

私と言えは「俳優の仕事」を慣れぬ文体に辟易しながら一  
応読んだものの、あとは実践あるのみと殆ど再読すること  
はありませんでした。経験主義の演技を積み重ね様々な悪  
弊を身に付ていったのです。そして、外の仕事でも力不足  
を痛感し、何も一気ではなくてもいい、少しづつ読み返して  
いこうと再読を始めました。

今現在、俳優としての自分に確信がもてているわけでは  
ない、いまだおっかなびっくりなのです。稽古初日からト  
ーン高くやりたいけれどあいにく私はスロースターターで  
あれこれジグザグしながら、初日があくかどうかという  
きによりやくこれかなあと方向が見えてくるという情けな  
さです。それでも二十代三十代、道に迷ってばかりいた時  
期からは少々進歩して、迷ったときの解決方法なり道筋な  
りを遠くにぼんやりみながら歩いていけるようにはなっ  
た気がしています。

今にして思えば結婚相手の外見のみに惚れ込んで結婚し  
たもののいわゆる相性というものが全くあっていなかった、  
本当ならとうに離婚してもおかしくなかった、そんな俳優  
生活だったのかも知れません。しかし、それが互いにとつ  
て幸せだったのかどうかはわかりませんが何と二十年以上  
も続いてしまいました。日本がヨーロッパ並の文化水準で  
俳優教育が徹底しその地位も高いものだったら私なんか今  
ごろこんなところでうろろしてはいられなかったでしょ

う。しかし現実には、今の日本では俳優を志した人が俳優になれる、そしてなつたからには演劇と俳優の地位を価値あるものと認められる為に力を尽くさなければ将来はないのでしょう。私の俳優生活はこれからも力不足にさいなまれる日々でしょうが、できることなら演劇という結婚相手と一生添い遂げていきたいものと願っています。ずっと、尻にしかれるのはわかっているのですが……。



## 続けるということ

劇団はぐるま 三島幸司

書けない、困った。といってすでに何日も経つ。そういう心境にない。と言うのはいいわけにすぎないから、何とか埋めようと思う。「ブッダ」がちょうど二週間前に終わったばかり、今度は「カンナ……」の本番が三日後に迫っている。いつもこんな繰り返しで今日まで来た。私は岐阜県の職員である。なにをおいても事が起ければ直ぐに駆け

分らない、そんな境遇にあつてここまでおおむね二十二年。

「オセロ」など確か二十三ステージだからほぼ三週間毎晩六時には御浪町ホールに駆け付けねばならない、何もないうようにと祈る毎日。幸い何もなく過ぎて万歳！この繰り返しである。奇跡と言ってもいい。継続は力であるとは、師こばやしひろしの言葉であるがこの継続がなかなか難しい。

あたりを見回すと旧い人は数えるばかり。もう相当な古手と言われている。人の動きもまた繰り返しである。旧い人はあえぎあえぎ、若い人はそれこそはつらつと喜々として動き回る。これも繰り返しである。加納ちゃんだけはいつも変わらずしっかりプロデュースしてくれる。どっしりと根をはっている。

さて、私は高校時代はサッカーをやっていた。メキシコオリンピックでわが日本チームが銅メダルをとった。野球では芽が出なかったからこの新興スポーツに飛び付きスターになってやろうなんて甘い考えでやり始めたもののふんどしは前から直ぐ外れてスターは他にいたし、常に一回戦ボーイのチームであった。これも駄目だと大学でようやく演劇に手を染めることになる。安部公房など少しかじって、ピンターも入り口でやって、映画研究会で裸体になつたりしてふらふらとあっちへ行ったりこっちへ行ったりしては



劇団はぐるま公演『ブッダ』左が三島幸司

付けてきちんと職場に身を置かねばならない立場にある。例えば今度の阪神大震災など起きれば芝居もへちまもなく不眠不休の作業を続けねばならない。常になにが起るか

たと気がついた。さて、これから何をして行こうか。恥ずかしい話であるが私は労演という存在も大学になって始めて知った。大体芝居なんぞ観たことがなかった、わが学生時代には移動公演を体育館でやってくれる劇団もなかったし、あれは恥ずかしい事だと思っていた。人前で体をさらしてあゝあみつともない。これは小中の教育に問題がある。本読みに時々台詞が混じる。少し気を入れて読むと教室はなんて馬鹿なことをやるの変わった子ねえーという嘲りの目と笑い、あれで演劇の道を閉ざされたものが何人かいることは間違いない。そう、恥ずかしい事だったのだ。役に立たない、食うことに何等貢献しない、極道たちのやることだとあの頃は皆思っていた！今でこそカラオケで歌うことは当たり前、パフォーマンスこそカッコいい！と言うのとは時代が違った。食うことが最大の目標だった、運動会で一番になるのは人気者だったし価値があった。県大会で優勝でもしようものなら将来は約束されていた。芝居なんぞくその役にも立たない！これはひょっとしたらいまでも続いている考え方だ日本人の。

閑話休題。はぐるまの芝居を見たのはほとんど大学卒業間際。「フェードル」稽古場公演で三階から降りてくる作りになつていて、プロセニアムアーチなんてものはこの稽古場では作り様もなかったし、必要もなかった。小さな空間がとてつもなく大きかった。とにかくなんでも新しく僕

の目には写った。なにしろ舞台が近い、目の前で役者が動いていた。武藤幸子と言う役者の存在感は光り輝いていた。すぎまがない。緩みがない、時間を忘れて魅入った。とにかく圧倒されたのだ。

正直言うとはぐるまと言う劇団を僕は知らなかった。地元においてしかも直ぐそばにいて僕は知らなかった……おれにもここで出来ると思った。

役者って一体なんだろうとこの頃思います。うーん、よく分からないと言ったほうが正直です。無我夢中でやってきて、ここでこんなつまらない駄文を重ねてきてふと振り返ると特に実態はない。消えるものです。何年か経ってもう一度といったって、その時の状況は再現できない。消えるものです。消えることが凄いと、言った人がいます。その場の息吹で世界を現すと言った人がいます、けどやっぱり消えるものです。杉村春子がすごいと言ったって消えてしまします。何回公演したと言う記録は残ったといってもその場、その社会的情勢、雰囲気、隣にだれがいたか、なにを喋りながら見ていたか、その日の仕事でこんな辛いことがあったなどそれは一回一回違います。消えるものです。演じる我々も一回一回違います。ちょっぴり空しいと言わざるを得ません。だからこそ継続が必要なのだと思います。私は劇団では多分チケットをたくさん売るほうでしょう。なにも言わないでも向こうから「観たい！」と言っ

てくれる人がたくさんいます。貴重な人ですし、それに励まされてここまで続けてこれたと言ってもいい。止めたなら一巻の終りです。これだけ観たいといっていただけの人達に対して止めるのは責任放棄です。それが続ける原動力になっています。良いものはいいいのです。僕がフェードルを観て思ったのと同じように常がいい舞台を観る側から支えてくれている人達がいて、それが支えです、今僕が続けている原動力です。

さらに言えば、やはり仲間でしょう。スタッフでしょう。これは簡単に言いますがなかなか見付からない。思いを現実にするには一人ではなかなかできないし、また思いがなくては芝居にならない。思いの行き着く目指すところがあって、そこに衣裳が無理なくずっと自然に決まって、道具の配置も違和感なくって、明りがピタッと決まって、音がぴしっとはいつてきて、合唱が雰囲気最高潮にして盛り上げて、これが芝居たる所以でしょう。これは恍惚の瞬間です。観客は息を飲み、芝居のその瞬間を一体となって共有する。何もかも忘れて心が一つになるそれを味わうと芝居が止められなくなるのです。これが芝居の醍醐味でしょう。それが実現できる仲間が普通に隣に飯を食い、酒をのみ、くだを巻きながらちゃんとそばにいます。創造に対する信頼感が自然なのです。無理がないのです。

百人劇場御浪町ホールの完成は一つのエポックでした。

(72頁へ続く)

## ――ロシア演劇レポート 2――

### 不条理の世界を描く

――付、日本とロシア演劇 II――

桜井 郁子

時の流れは非情であり、残酷でさえある。阪神大震災の襲来もそうだが、前号の発行後間もなく、千田是也氏が逝かれた。その名を記した私には予想もできなかったことだ。氏について、いつの事だったか、遙か昔のささやかな思い出がある。『桜の園』を観た後、喜劇としての演出という事についてたずねたら、氏は身ぶり手ぶりを交えて語られた、一観客に過ぎない私に。

それにしても『桜の園』の上演は難しい。とりわけ、ラネフスカヤ役の人を得ないと、納得し難い舞台になる。モスクワ芸術座では初演のクニツベルや、来日公演時のタラーソワ、日本では東山千栄子が晩年までその役を勤めた。またその事で、彼女たちの責任ではないが、舞台がステレオタイプの印象を与えた事を否めない。自分の舞台が他の舞台とオーバーラップする等は、演出家にすれば耐えられない筈で、芝居づくりの模索と苦闘は永遠に繰り返される事になる。因みに故宇野重吉氏から「越後吹雪が亡くなったから、『桜の園』は考えていない」と聞いた事がある。

閑話休題。ロシア演劇の日本との関わりを続ける。土方与志のロシア訪問も二度。但し二度目は訪問というより、家族を同伴しての移住だった……。第一回は一九二二年小山内に弟子入りした土方は、十年間予定の演劇研究を志し、ヨーロッパはパリからベルリンへ、後でイギリス、スカンディナヴィアを旅する。ベルリンでは近く開設される演劇科に入るべく、ラインハルトの弟子などに学びつつ、印象主義や表現派の舞台も数多く観ていた。そんなある日関東大震災の報に驚かされ、焦土の中に演劇を復興させるため急ぎ帰国を決意、シベリア経由で日本へ向う途次、一週間もモスクワに滞在することになる。

かねてヨーロッパ巡演中の「モスクワ芸術座」や「カール・メイエル劇場」の舞台に接しており、文献を通じて知っていたメイエルホリドを友人に紹介された土方は、彼を介して「モスクワの劇場をことごとく知ろうと決心」する。当時V・メイエルホリドは49歳、「メイエルホリド劇場」を主

宰し、「革命劇場」を指導し、数々の革新的舞台を試みつつある高揚期にあたっていた。彼を訪ねあてた土方は、その夜「メイエルホリド劇場」で『大地は逆立つ』を見る。この舞台について土方は次のように書いた。

「客席も無装飾、舞台もガラン洞、スポット・ライトのみの照明、客席を通過して舞台に馳せるサイドカー、思い切った俳優の動き、等々、すべて新鮮なはつらつとした感じを与え、驚嘆せしめるのに十分なものばかりであった」次の夜は「革命劇場」の「リュリの湖」を見る。「舞台には『構成主義』的装置が飾られて、そこでブルジョアの頹廢的な生活が諷刺的に形式化され演じられたりした。／この二つの演出は『自然主義』的な、あるいは『印象主義』的な演出に疑問をもち、真実なものを探し求めた私にとって、真の演劇の開放がここに実現されているかのようを感じられた。／後年私は、ドイツ留学時代の観念的な表現主義とともに、このとき激しく私を捉えた形式主義の影響に長く苦しめられるであろうことに気づかず、この新たな奇智縦横ともいべきメイエルホリドの演出に圧倒されてしまった。／私は、私のドイツ劇場での研究を含めて数年間の演出の研究のいっさいは、このモスクワの一夜の観劇に及ばないものだと感じ、こうした意味のことを小山内先生にも述べたと記憶する。」（以上「内は」なすの夜ばなし」所収）

因みにバリ上陸後に見た「モスクワ芸術座」の『どん底』他の公演については、「完成美というようなものは感じたが、ひどく平板な」印象を受け、「その後長い間」モスクワ芸術座の創造に対して疑問を感じ、批判的になりがちだったのは、この第一印象のため」（「灰色の築地小劇場」より）と書いている。

築地小劇場の創始者二人の体験や資質の違いは大きい、ロシア演劇から受け取ったものはそれぞれ強烈で、築地小劇場のレパートリーを多彩に飾った。それについては次回に……。

それにしても大地震。私の家も揺れに揺れた（幸いにも被害はなかったが）。まさか、と思う間もなく数キロメートル先から大惨事が拡がっていた。「明日をも知れぬ運命」を思い知らされた。芝居は時間と空間に生きるもの。今日見たものが、明日も見られるとは限らない。状況が変わり、人間も変われば、芝居も変わる。ロシアでも昨今、名優スモクトノフスキーに次いでO・ポリソフも逝き、もう彼らの舞台は見られなくなった。だから、ささやかな観劇記も続ける意味があるのだろうか。

今回は年末年始の16日間に15の芝居を見ることができた。かねて見たいと思っていた演目、思いもかけぬ新演目に出



「ナポレオン一世」  
マヤコフスキー劇場プログラム

会えた一方、まだ出会いのチャンスが来ない作品もあった。その中のいくつかについて書いてみよう。

亡くなった演出家の遺作が稀有に甦った例が『ナポレオン一世』である。60年代人の一人A・エーコロス（一九二五―八七）の仕事が十年を経て戻って来た。美術と、ジョセフィーヌ役のO・ヤコヴレワはそのままだが、他は全く別の俳優、全く別の劇場で生まれ変わった。演出はエーフロスの教え子で新しい舞台にも師の香気を失っていないと言われている。

ナポレオン役のフィリップフはかの風貌に似ているが、英雄でも勇士でもない。権力欲につかれ戦略的な結婚を、賢いジョセフィーヌの寛容さにつけいって強行する身勝手

「現代戯曲の学校」という名の劇場で。

この劇場名は何とも日本語

としては

馴染み難い名だ、

モスクワにはもう

一つ「現代ドラマ



「椅子」 主演・演出 S・ユルスキー（右）

前号にも書いたセルゲイ・ユルスキー主演・演出のイオネスコ作『椅子』に運よく行き会えた。五年前創設された



「マクベス」ユーゴ・ザーバド劇場舞台より

きな鉄製扉二枚のみ。閉じると城門や壁を表わすが、支柱のまわりに自在に回転する扉は人びとを呑み込み薙ぎ払う。アフナーシエフ扮するマクベスは、初め勲功立てた勇士として淡々と登場するのだが、夫人の誘惑的な囁き、魔女の予言に導かれるように、狂気に駆られ奈落に落ち込んで

の学校」という名の劇団があって、こちらの方は実験劇場としてハイな閉鎖的な集団だから「学校」の名はふさわしいかもしれないが、「現代戯曲」の方はむしろ開かれた人気が劇場の一つである。仮りに英語の頭文字でSMPとでも仮称しておこう。このSMPのある建物は18世紀には「冬のエルミタージュ」と名づけられていた。社交クラブの一つ、かのチャイコフスキも結婚式を挙げたという所、豪華なシャンデリヤと壁の鏡面、レリーフ、テラスへの巨大なガラス扉も当時そのままだ。このホールは可動舞台で、演目の一つでは中央に舞台が設置され前後に狭んだ階段席が客席となった。ここで評判の演目の一つにチェーホフの『結婚申込』他を舞台化したミュージカル風の『何だよ、お前、おめかしして?』がある。私の滞在中には上演日はなかった。品のよくないパロディだと酷評する人もいるが、二年前のチェーホフ祭以来、絶賛する人も多い。この劇場は既に名のある俳優数名と演出家その他スタッフのみで編成されているが、レパートリーを六つ持ち、毎年海外公演を行っている。

ユルスキイがバリで幕開けした『椅子』をもって、この劇場に参加しているとは初めて知った。さて『椅子』。シンプルな壁の前に椅子二個。彼と彼女、二人だけの登場人物が坐っていて幕が開く。老人と老女、夫婦、恋人、母に甘える息子のように、時と所が移り変わり、ユルスキイはさ

まざまな表情を瞬時に演じ分ける。この不条理劇を物語るのは難しい。ただ彼と相手役のチェニコワのかわすせりふはあくまで日常的ながら、テーマは人間と世界に及び、舞台は空間的にも時間的にも自由に飛翔し始める。時には抒情的に、時にはグロテスクに、また喜劇的なまでに雰囲気を変え、やがて男の主張を聞いてもらうため、客が、つまり椅子が招じ入れられる。舞台いっぱい椅子と炸裂する火花。月と星と日輪をかたどったようなメイキャップは、ユルスキイがイヨネスコに借りて言おうとしたことを暗示しているとも思えた。

小劇場ながらモスクワでもっともアンサンブルの優れて生き生きと活動している劇団の一つが「ユーゴ・ザーバド」劇場だ。ここでシェークスピアの『マクベス』を観た。SMPは定員三百五十だが、ここは定員百二十。この日は日本からの観劇団三十数名も加えて、ぎゅうぎゅう詰めで幕が開いた。

舞台も広くない、壁も床も黒く塗りこめてある。左右の出入口から客席前の通路、壁の穴まで狭い空間を生かす俳優たちのすばやい行動、瞬時に変わるミザンシーン、要所のみを照らす照明、それを助ける音響、音楽、スピーディで祝祭的な劇的空間。これがV・ベリヤーコヴィチ演出の特徴だが、『マクベス』でも遺憾なく発揮された。

装置はシンプルで、舞台中央二本の支柱で支えられた大

行く。裸の背、仮面の三人男が扮する魔女が、この運命の不気味な雰囲気をはきかてた。

この劇場は一九七七年創立、一時存立さえ脅かされた事もあったらしいが、グラスノスチ以後はロシア劇場の代表者の一つとされた。海外公演は八六年から、九〇年には『ハムレット』をもって来日、ヨーロッパ、アメリカ公演は数知れず、イギリス、アメリカの劇団の交換公演も受入れている。

久しぶりにモスクワ芸術座(チェーホフ名称、実はもう一つゴリキイ名称の芸術座がある)へ行った。A・ソルジェニーツィン作、O・エフレーモフ演出の『鹿と堀立小屋』を見るために。原作戯曲は『労働共和国』の題名で五年前雑誌「テアトル」に載ったが、書かれたのは五四年のこと。作者の『イワン・デニソヴィチ』が発表された六二年に上演が企てられたが、検閲によって阻止されたもの。ご存知のように作家は作品が禁止になったばかりか、国外へ逐われた。ことわっておくが、私は彼の忠実な読者ではない。しかしエフレーモフが三十年前に果せなかった上演を実現させ、テーマが収容所の物語というので、先ずは一見せねばと出かけたのだった。

舞台前面には収容所を外界と遮断するための有刺鉄線の扉、回り舞台上に三階建の建設現場や工場、収容所内各部が設置され、登場人物は囚人多数の他、民間人・警備隊あ

わけて延べ四十人を超える、大がかりな芝居である。

上演題名の「鹿」とはのろま、あほの事、「堀立小屋」は身持ちの悪い女、娼婦を指すとは、囚人用陰語辞典で知った。芝居は全体として囚人のそれぞれの生活を群衆劇の形で描き分けられているのだが、中心にあるのが一組の男女、陰謀や虐待の渦巻く最低生活の中で心を通わせる男女のラブ・ストーリーである。この二人がそれぞれ自らを鹿、堀立小屋と自嘲的に呼ぶ。この芝居の中でも、女は愛する男の他に、運医にも身を任す。そうせざるを得ない酷薄な収容所生活。ごく最近までの民族の歴史の一コマ、しかしエフ・レーモフも言っている「いかに卑小なものに支配されているか」この世の不条理についての芝居」であらうか。

今ロシアは「芝居どころではない」雰囲気ではありませんか、とよく聞かれる。なる程チェン共和国との血生臭い紛争の最中だし、経済混乱で生活も苦しいし、正直のところ、毎回私もいささかの危惧を持ちながら出かけている。しかしロシアの芝居は生きている。大劇場で消滅した名は聞かないし、小劇団は最近また増えている。八〇年代の終わり、自由化の波で首都に生まれた数百のスタジオ劇団は、その後の経済混乱の中であえなく消えた。しかしそんな俄か作りでない小劇団は生き延びているし、演劇大学などを基礎にした若い劇団が生まれている。そんな事がど

こでわかるかと言えば、モスクワの情報紙、毎週土曜発行の「ドスーク(余暇)」による。私の観劇の旅もこれなくしては実行が難しい。例えば九五年一月九日(十五日の一週間に三十五の劇団が、一月十六日(二十二日の一週間に三十八の劇団(何れも音楽・オペラ・人形劇場を除き)が名を連ね、演目を発表している。しかも毎日演目を取り替えるレパートリー制で。

どの劇場も新しい演目を作るのは容易ではないようだが、新作も絶えてはいない。昔は国の援助で生きていた演劇が今はスポンサーを見つけるのに少々馴れたのだろうか。

観客はどうかと言えば、さすが満席の劇場は減ったものの、相変わらず切符入取難の所も少なくない。私の今度の旅でもあれやこれやの手を打つのに忙しく、ぶっつけ本番で何とかしたのは十五の中四位である。切符代も高低が激しくなった。マチネの児童劇五百ルーブリは桁違いに安く、概ねは五千ルーブリ、最高は『ナポレオン』の一万五千ルーブリだった。それでも満席だった。

いちばん頼もしく思うのは、前号に書いたジェノヴァチのような若い演出家が作品をどんどん発表している事、若い俳優たちも活躍している事。また次号に書くつもりだが、ベテラン俳優たちの競演による舞台などに、熟年の観客がつめかけている。芝居好きのロシアはまだまだ健在なのだ。

## 『恋はビラティッシュ』

### 飴谷隆治

(大阪府職員演劇研究会)

男と女、朝の通勤客めあてに、駅前  
でビラとティッシュをそれぞれ配っ  
ている。

女 おはようございます。行ってっしや  
いませ。おはようございます。行ってっし  
やいませ。

男 オハヨッス、オハヨッス。

女、たまりかねて。

女 ねえ、じゃましないでよ、ティッシュ  
配れないじゃないの。

男 ええ！でも俺だって、これ配んなき  
や生活、『オハヨッス』だから生活かかって  
んだから。

女 『あつ行ってらっしやいませ』でも私  
だってこれ九時までに配り終えなきゃなん  
なのよ。

男 ナニ配ってんの。  
女 ティッシュじゃないの。

男 ロンだろう。  
女 そうよ、ロンハッピーよ。  
男 サラ金だろう。

女 いやな言い方しないで、今はリテール  
っていうのよ『おはようございます。行って  
らっしやいませ』あんたこそ、何配ってんの。  
男 ビラだよ。

女 わかってるわよ、なんのビラよ。  
男 首切られたんだよ、ワット電機から。  
女 首って。

男 やめさせられたんだよ会社に。  
女 仕事さぼったの。  
男 そうじゃないよ、俺は自慢じゃないけ  
ど仕事はさぼったことないよ。

女 ヒトは見かけによらないわねえ。  
男 エエッ！俺そんなにだらしなくみえ  
るかなあ。

女 みえるわよ。  
男 ハーハッティッシュン。  
女 これ使いなさいよ。

男 ありがとう。(鼻をかんで返す)

女 いいよ、こんなもの配れないじゃない。  
男 ああ、そうか。  
女 だったらどうして、やめさせられたの。  
男 組合に入ってるからだよ。  
女 クミアイ？  
男 労働組合(と腕章を示す)。  
女 うちの学校そんなのなかったよ。  
男 学生にはないよ。会社に入ったらある  
んだよ。

女 ヘー、うちの会社そんなの無いよ。  
男 ない会社もあるんだよ。  
女 それでクミアイってなにするとこ。  
男 そうだなあ、まあ給料上げるとか休み  
をとれるようにしろとか、会社に言うとかだ  
よ。

女 ヘー、そんなとこの。でも、そん  
な事言ったらやめさせられるの当たり前じゃ  
ない。

男 そうじゃないよ、労働者が労働組合を  
つくったり、入ったりするのは憲法で保障さ  
れてるんだ。

女 ケンボーって憲法記念日の。  
男 そう、そうだけど、とにかく結社の自  
由なんだ。

女 ケッシャ。  
男 そう、どんな団体に入ろうと、どんな  
グループをつくらうと自由だってことだよ。

女 じゃ、すみれ会みたいなのね。  
男 すみれ会？  
女 そう、『宇ちゅう族』の高橋君のオッ  
カケグループよ。私、それに入ってるの。  
男 ウチュウゾク？  
女 あんた、『宇ちゅう族』も知らないの  
いま一番のジャズグループよ。  
男 ああそう。  
女 そのボーカルの高橋君のオッカケやつ  
てんの。こんど一度テレビ見てもらいたい。  
十一時からムーンテレビでやってるから。  
男 ああ、一度みるよ。でも、その時間は  
組合事務所だな。  
女 ヘー、仕事もないのに忙しいのね。  
男 仕事がないから忙しいんだよ。  
女 あんたの言ってることわかんないよ。  
男 だから、こんなビラ作ったり、弁護士  
さんとうち合せしたり。  
女 ヘー、弁護士さんもクミアイに入っ  
てるの。  
男 そうじゃないけど、応援してくれてる  
んだ。  
女 ヘーいいじゃない友達がいって。  
男 友達じゃないけどさ。  
女 私なんか、ひとりぼっちよ。  
男 フーン、郷里はどこ。  
女 九州。

男 九州のどこ。  
女 小倉。  
男 福岡か。  
女 そう。  
男 その割になまりがないじゃないか。  
女 なまりが出ない様に頑張ってるの。  
男 どうして。  
女 なまりが出たんじゃない、オッカケできな  
いじゃん。すみれ会にもバカにされるわ。  
男 たいへんなんだね。  
女 あんたは。  
男 うまれば大阪。  
女 地元じゃない。  
男 でも親父が沖縄にいらんだよ。  
女 どうして。  
男 もとは沖縄なんだよ。仕事で失敗して  
俺ひとり大阪に残ったわけ。  
女 フーン。  
男 ワット電機の寮にいたんだけど、クビ  
になって、いまはアパート。  
女 でもそんな事、私の会社じゃ当たり前  
よ。毎日だれかやめさせられてるよ。『ティ  
ッシュの配り方が遅い』って『君は二箱しか  
配れなかったのか、明日からも来なくてい  
い』とか言ってる。  
男 ヘーそんなもんなの。  
女 とにかく、向こういつてやってよ、私

まだ一箱しか配れてないんだから。  
男 でも俺だって、ここで配らなきゃ、運  
動にならないし。  
女 運動なら、その辺走ってくればいいじ  
やない。  
男 その運動じゃなくて、そのなんて言う  
のかなあ、ハアーバックション。(と鼻をテ  
ィッシュでふく)  
男 俺、花粉症なんだ。  
女 かわった名前ねえ。  
男 名前じゃないよ。花粉症、鼻がゴソゴ  
ソするんだ。  
女 ああ、あの花粉症、かわいそう。まだ  
鼻の横についてるよ。  
男 真心の店、ローンハッピーか、即決五  
十万。  
女 でもねえ、そんなじゃないのよ。私  
の給料なんか、いつも十日遅れだわ。  
男 そりゃ、不当だよ。  
女 フトウってなによ。  
男 いや不当は不当だよ。  
女 英語なの。  
男 いやそうじゃないけど、いけない事っ  
ていう意味だよ。  
女 ヘーいけない事って不当っていうの  
じゃ、私の彼はフトウね。  
男 彼って。

女 ワアーン(と泣き出す)  
男 ちょっととちよつとどうしたの。  
女 ワアーン。  
男 みんなこち見てるよ。どうしたの。  
女 私ね。三日前、彼に捨てられたの。  
男 ああ、そう、失恋したの。  
女 ちよつと、このティッシュといっしょ  
だわ。使いつてよ。不当だわ。  
男 いやそれが不当かどうかわからないけ  
ど。  
女 だって彼って『ティッシュ配る様なカ  
ッコ悪い仕事はやめろ』って。私だって好き  
でやってるわけじゃないのに。  
男 そりゃそうだよ。  
女 彼って『おまえがそんな事したら、友  
達からティッシュの女とつきあってるってか  
らかわれる』んだって。  
男 べつにいいじゃないの。それが仕事な  
んだから。  
女 本当はね。彼、私の事好きじゃなかつ  
たのよ。ワアーン。  
男 これでふきなよ。  
女 (涙をふいて) あらっいやだ、私まだ  
一箱よ。これ配らなきゃ社長からしられる  
わ。  
男 いいよ、いいよ、俺もいっしょに配っ  
たげるよ。

女 ダメよ。男じゃ。まして、あんたに配  
られると、ヤクザのローンって思われるわ。  
男 そんなこわい顔してるかなあ。  
女 ごめんね。あんたはやさしいけど、そ  
んなもんなのよ。  
男 ヘー、じゃ頑張って配んなよ。俺じ  
やましくないから。  
女 いいよ。そのビラ貸しなさいよ。私が  
ティッシュつきで配ったげるから。  
男 いいのかい、そんなことして。  
女 あんただいたいヘタクソよ。だれもと  
っていかないじゃない。  
男 だってそんなもんだよ。みんな関心が  
ないから。  
女 そんな事言ってるからいけないのよ。  
地下鉄三年JR八年って、コッがあるのよ。  
男 コッ？  
女 そうよ。  
男 どんなコッがあるんだい。  
女 まずは、明るく配る。どんなつらい事  
があつても、笑顔で『おはようございます』  
って言うのよ。あんたみたいに『オハヨ  
ー』って言うじゃ、だれも、とらないわよ。  
男 そうかなあ。  
女 やってごらんさいよ。  
男 『おはようございます』本当だ、とっ  
ていったよ。

女 それに、とってくれたら『行ってらっ  
しやいませ』と言うのよ。  
男 エエッ!! そんな事俺、ビラ配りで言  
ったことないよ。  
女 なにこども愛をこめてよ。  
男 愛をこめてねえ。(配る)『行ってら  
っしやい、ああ行ってらっしやい』(と追い  
かける)  
女 ひとりにあいつしてどうするのよ。  
キヤッチセルじゃないんだから。それから  
あんた、配り方があらつぽいよ私のをみてな  
さい。  
『おはようございます。ワット電機でござ  
います。行ってらっしやいませ』  
男 ちよつとちよつと、ワット電機ですっ  
て、そこに首切られたんだよ。  
女 いいのよ、そんな事、これ読めばわか  
るじゃない。  
男 それじゃ、ダメしてる様なもんじゃな  
いのかい。  
女 あんた、不当な事されてクビになった  
んでしょ。それぐらいやりかえさなくてどう  
すんのよ。  
男 そりゃそうだけど。  
女 さあさあ、私も配るけど、あんたも、  
ここにティッシュがあるから、いっしょに配  
りなさいよ。

女 『おはようございます。ワット電機で  
ございます。行つてらっしゃいませ』  
男 『おはようございます。ワット電機で  
す。行つてらっしゃい』

(と二人、無心に配ると、向こうから  
会社の職制がきた)

男 あつ。  
女 どうしたの。  
男 会社の連中がイヤがらせに来たよ。  
女 どこ？  
男 ほら向こうに、胸にワット電機つて書  
いた、制服着た連中がいるだろう。  
女 ああ、ああ、たくさんいるわよ。  
男 時々来るんだ。  
女 どうすんの。こつちに来たわよ。  
男 いいよ慣れてるから。  
『オハヨース、オハヨース』(職制と  
からみ合っている様だ)  
男 ぼうがいはやめろ！ こは公道だぞ  
何を配ろうと俺の自由じゃないか、やめろよ。  
やめろよ。会社は不当な首切りをや。押すな  
よ。やめろよ。  
女 やめなさい!! あんたたち、ナニよ。  
大勢でこの人やつつけて、それがワット電機  
のすることなの。私、みんなに言うわよ。『ワ

ット電機が、この人をいじめてます。皆さん  
助けて下さい。この人は悪い人ではありません  
ん。皆さん助けて下さい。クミアイっていう  
ところに入っただけです。すみれ会みたいにな  
もんです。この人は悪い人ではありません。  
男 ありがとう、ありがとう、もういいよ  
向こうに行っちゃったよ。  
女 何っていう人達なの。あのグループ。  
男 会社のエライさんだよ。  
女 ヘー。おかげでまた、ティッシュ配  
れなかったよ。  
男 ごめんね。  
女 いいのよ、なんとかごまかすから。  
男 ごめんよ。  
女 ああ!!  
男 どうしたんだい。  
女 むこうから彼が来たわ。  
男 彼って、さっきの。  
女 そうよ、黄色のジャンパー着た人よ。  
男 こつちにくるよ。  
女 こんどはあんたに助けてもらう番ね。  
男 助けるって。  
女 私言ってるわ。新しい恋人だって。  
男 おい、じょうだんはよせよ。  
女 じょうだんだけど、それぐらいは助け  
てよ。  
男 別にかまわないけど。

女 さあ、しっかり配ろう。またいいこと  
があるよ。  
男 君は明るいね。  
女 そりゃそうよ。ティッシュに涙は似合  
わないわ。  
男 そうか。  
女 ちよっとキザだったわね。  
男 アハハハハッ。  
女 おはようございます。ワット電機です。  
行つてらっしゃいませ。  
男 おはようございます。ワット電機です。  
行つてらっしゃい。

完

~~~~~

今号の掲載戯曲は楠本幸男氏の『天神町  
一番地 広島・あの頃・消えた町』の予定  
でしたが、特集「阪神大震災」との関係上  
次号に送りました。その代りではありませ  
んが、編集委員の赤松比洋子氏のご推薦で  
大阪府職の館谷隆治氏の短いコントをご紹  
介することにしました。(編集委員会)

~~~~~

## 山ちゃんのラヴレター

東京芸術座 山口みる

山ちゃん、目の前にいないあなたについてこうして書いて  
いることに、納得がいけないのです。悩んで立ち止まっ  
た時、くやしくてどうしようもなかった時、どんな時にも  
最後には、山ちゃん、あなたの「ガンバレ、頑張れ」のエ  
ールに支えられてきたような気がするのです。

権威を嫌い、嘘や欺瞞を嫌い、卑怯な生き方はするな、  
といつも言っていた山ちゃん。生きることに全力投球で、  
気をぬくことを知らない人のように私には思えました。芝  
居を観に来てくれた日は、  
客席のどこにあなたがいる  
のかは、姿をみないまでも  
すぐに判りました。誰より  
も一番あなたの笑い声が響  
いていましたから。困った  
ことが周りで起こると、す  
ぐに勇気を發揮して、解決  
のために東奔西走するあな  
たの姿を何度もみました。

一度、劇団の女性陣で、



関東ブロック合同公演「西風に起つ」の舞台上で中  
央に立っているのが山口あきおさん——

太鼓を教わったことがありました。帰りの電車の中で、必  
死で覚え込もうとする私の隣で、小さくリズムを刻んでい  
てくれましたよね。  
山ちゃん、あなたがこれからもみるはずだったものを、  
私たちがみてゆくのです。この時代の中で、あなたが望ん  
だことを、私たちが望んでゆくのです。そしてなによりも、  
山ちゃんが愛してやま  
なかつたお芝居を創り  
続けてゆくのでしょ  
う。  
今いえることは、あな  
たの芝居に対する思い  
は、これからもずっと  
私の中に生きつづける  
だろうということです。  
それでは、いつも別  
れる時の最後の言葉、  
「じゃ、また、ね。」

(上は山口あきおさんの  
自筆。いい仕事をした  
い、また、ね。)

山ちゃん、  
おはよう  
ございます

# 北から 南から 劇團通信

## 劇団湖

十一月五日(土)午後六時三十分より、三笠市の隣りマチの美唄市民会館において、渋谷健一(劇団シアターII)作、加藤つよし演出の「冬の提灯」の公演が行われました。これは、七月の一般公演、学校公演に続く三回目の公演で、美唄市地域文化交流サークル主催、美唄市教育委員会後援によるものです。劇団としての制作活動は殆どやらずに、五百名の観客動員と百万円のギャラを得た喜びには格別なものがありました。劇団の忘年会は、はじめて寿司屋でやることができました。とまれ、応援を頂いた劇団「川」、劇団さっぽろの皆さんに心からお礼を申し上げます。十二月二十三日より三日間、札幌市やまびこ座プロデュース公演、松谷みよ子原作、飯田信之演出の「龍の子太郎」に劇団湖から、

竹田すゑむ、加藤元の二人が出演参加しました。劇団さっぽろ、劇団「川」、劇団新劇場、それにオーディションの子役の皆さんとの稽古、本番はとても楽しく、いい思い出となります。敗戦五十周年のことし、劇団湖もかかるべき作品をと模索中ですが、なかなか分相応のものが見つかりません。選挙など忙がしい年になりそうですが、なんとかしなければと思っただけが先走っているところです。

「ドラマの森一九九三」に収録されています。  
(641) 和歌山市和歌浦南一丁目一四四  
(〇七三四一四五・四五三三)  
劇団だいこん座  
◎阪神大震災で被害を受けた劇団のみなさんに心からお見舞い申し上げます。  
最近、地震が多発しているのです、どこにもおこり得ることだと考えて日頃の対策を考える必要があります。  
◎劇団は現在、五月公演、トミー・アングラー作「すてきな三人ぐみ」に取りくんでいます。だいこん座としてはあまり得意でない歌あり踊りありのミュージカルなので大変です。やっと歌もおぼえて、踊りの先生もみつかりましたので、これから本格的な稽古に入ります。  
◎今年創立二〇周年を迎えます。秋には地元の作家・佐藤治助氏の「ワッパ一揆」を戯曲にして、上演しようと準備をすすめています。いろいろな不安材料はあるのですが、劇団外の人々の力も借りてぜひ成功させたいと思っています。二〇周年記念誌の発行、パティーもやりたいと忙しい年になりそうです。  
(997) 山形県鶴岡市青柳町二二三二

たんぼぼ保育園内  
〇一七五―二四一六八八  
劇団阿波っ子  
昨年地人会公演「この子たちの夏」の上演実行委員会に関わってから劇団として、演劇(文化)を愛する私達にとって平和とは?を考へ、戦後五〇年と言う年を演劇(文化)を通じて平和の大切さを伝えて行けたらと、昨年十二月には「ベトナムのダーちゃん」の上映成功のために協力したり、「この子たちの夏」を一人でも多くの人に一人でも多くの人と読み継いで行きたいと、いろいろの集会に出掛けて行って少しでも時間をいただいで読ませていただいています。

ア劇団が月に一回集まって演劇協議会のようなものをはじめました。地方の演劇の発展に繋がればと期待しているところです。

「戦後五〇年を考える連続講座」は一回目五月十六日、二回目六月二十日、続いて七、八、九月と開講します。

東京芸術座  
(771) 徳島市佐古三番町八十七  
(〇八八六―二二一五六七〇)  
年明け早々から、あわただしく「ピート」(作/平石耕一・演出/印南貞人)と「冒険者たち」(原作/斎藤孝司・脚色/平石耕一・演出/杉本孝司)が、稽古と本番。

学校公演は「12人の怒れる男たち」(作/L・ローズ、演出/稲垣純)五月十二日、「あわて暮やぶけ芝居」東京空襲3・10(作/大橋喜一・演出/杉本孝司)五月二十二月巡演。

引き続き、「あの日は私」(構成/乾一雄・演出/山口みる)と「花」(原作/田宮虎彦・脚色/平石耕一・演出/印南貞人)「橙色の嘘」(作/平石耕一・演出/早川昭二八銅)「研究所第三十一期生卒業公演」(雲わかれゆく)「作/町井陽子・演出/薄井勲」が、交互に合間を縫って稽古と本番。一月から三月までの間に、三つの稽古場で六作品の稽古と超過密スケジュール。

阪神大震災では、劇団員の二軒(家族三名)が全焼。三軒が自宅より避難。他に十数名が家財道具に被害を受けました。  
劇団は新稽古場完成直後で損害はなく、去る二月三、四日、落成祝賀会を自粛しながらも約四〇〇名の来賓を迎え、新稽古場披露会を催し、九萬三千九百円の震災救済募金あり。新稽古場のスタジオ(二〇〇名客席)公演こけら落しは「女の平和」アリストパネス作、高津春繁訳、田中千禾夫・早川寿郎台本、河東けい演出で、四月五日・九日、七ステージの上演。

いろいろな取り組みの中で戦争を知らない世代がその次の世代へと語り継いでいかなければならない時が来ていると感じます。一人では何もできない私達ですが、好きな芝居を通して自分の子供達も含め一人でも多くの若者達と平和や命の大切さを語り合いたいと「この子たちの夏」にこだわっていったらと思っています。

敗戦五〇年記念企画は四月東京公演「花」四月十六日から二十二日、九月東京公演「私」は貝になりたい(原作/加藤哲太郎・放送脚本/橋本忍・劇化/乾一雄・演出/山口みる)九月八日から十七日。

他にスタジオでの公演は、三月十一・十二日附属演劇研究所38期生終了の発表会「新羅

三月二十五日には、とくしま生協の記念行事の中で「この子たちの夏」の自主上演をする予定です。また、地域では地元のアマチュ

他にスタジオでの公演は、三月十一・十二日附属演劇研究所38期生終了の発表会「新羅

生門」横内謙介・道井直次演出。七月八日  
二十三日までの土・日曜九ステージで「夕  
やけ色のトンネルで」北原宗作・宮地仙脚  
色・松本昇三演出を上演。続いて九月には新  
中・高校生団体鑑賞用、新作。十一月に一般  
公演を予定し、まさにスタジオ公演花ざかり  
です。

スタジオ外では、大阪労働例会（五月十八  
日二十日）。泉南・和歌山・紀北の演劇鑑  
賞会例会（六月十八日二十四日）七ステ  
ジを藤本義一作・道井直次演出「虫」を上演  
します。今、劇団は新稽古場を中心に新たな  
活動を開始しました。

(557) 大阪市西成区岸里東二一〇一二  
TEL 〇六一六六一二二二二  
FAX 〇六一六六一二〇六〇  
旧住所は 大阪市阿倍野区文の里四一  
一四 です。新住所は右記です。（編集部）

#### 劇団銅鑼

阪神大震災により、神戸・大阪の劇団や関  
係団体なども大きな被害を受け、活動不能に  
陥ったところもあるとお聞きし、胸が痛む思  
い。その困難の克服には、大変なご努力  
とご苦労が予想されますが、一日も早い活動  
の再開を劇団員一同、お祈りしております。

さて、私も銅鑼は、一月を創造月間と名  
付け、『発声訓練』（やまもとりのこ氏）、演  
劇講座『日本現代演劇史』（大笹吉雄氏）、ワ  
ークショップ（ヴォルフガング・コルネーダー  
氏/ドイツの演出家）など、諸先生方のご協  
力をえて、劇団のパワー・アップをはかる。

◎『橙色の嘘』（平石耕一・作/早川昭二・  
演出/東京芸術座と共同制作）は、三月五日  
より約三か月間、九州、近畿、中部、中・四  
国などの各地で公演。

◎『センボ・スギハアラ』（平石耕一・作/  
平石耕一、山田昭一・演出）は、台本を大幅  
改訂し、三月八日を皮切りに長期旅公演。

◎銅〇、三年ぶりの新作『俺たちの甲子園』  
（石原哲也・作/大峰順二・演出）が、九月  
六日より十日まで、東京・板橋の成増アクト  
ホールにて、公演決定。

乞う、ご期待！

(175) 東京都板橋区成増五一二  
米沢ビル 〇三一五九九七九四六一



演劇サークル妻の会  
言語に絶する未曾有の大惨事である阪神大  
震災にあわれた在阪劇団の仲間皆さん、本  
当に御見舞い申し上げます。一日も早く創造活  
動が出来る様御祈り申し上げます。

さて、私達は昨年十月に永年暖めていまし  
た「泰山木の木の下」を上演しました。お陰  
様にて、評判も悪くなく無事終えることが出  
来ました。現在は秋の公演にむけて上演台本  
の選考に入っています。意欲的な作品の候  
補が数本出ていて目下検討中で三月下旬に総  
会で決め、四月中頃に稽古に入りしたいと思います。

(133) 東京都江戸川区北小岩七三二〇  
三〇一三六五九一七〇四  
吉岡 利根雄

#### 劇団はにわ

私達は、この二月九・十日（四ステージ）  
の公演「新版うわなり打ち」（伊藤豊子作・  
北原雅子演出）を好評のうちに終え、ほっと  
したところです。劇団初の企画で、地元他の  
の女性劇団や朗読グループの協力を得て、総  
勢三十二名の舞台でした。はじめのうちはと  
まどいもありましたが、稽古が進むにつれて、  
次第にうちとけ、互いに刺激にもなり、新し

い仲間の輪も広がって、貴重な経験になりま  
した。でも、ほととばかりしてもらえませ  
ん。次回公演が、十一月二十八・二十九日、  
愛知県芸術劇場小ホールに於て、栗木英章作  
・北原雅子演出による、「ながらえて明日」

（仮題）と決定しているからです。台本は、  
まだ載いていませんが、必ず成功させようと  
気をひきしめて待期中です。随分先のことの  
様ですが、稽古が、追込み以外は、週二回  
までが基本なので、短いものでも半年ちかく  
かかります。その様にして、年二回公演を目  
標に続けて来て、再来年は、二十周年を迎え  
ます。その記念公演に向けて、今、劇団の体  
制を見直し、若い仲間を迎えて、年令層の厚  
い集団にしたいと計画中です。

劇団はにわの将来を担う若い方、（自称も  
可）ぜひ、参加を。

(462) 名古屋市北区福徳町十八A一五〇七

〇五二一九一五二二九

下高原多美子

#### 劇団名芸

名芸は、現在久しぶりのシェイクスピア劇  
場に取り組んでいます。十五年前、名芸ゆか  
りの呼続小劇場サヨナラ公演ともなった『真  
夏の夜の夢』の再々演です。稽古をしながら、

当時演出を担当してはりきっていた故柘植を  
なつかしく思い出しています。人手が足らず  
OBの応援も頼んでの厳しさですが、楽しい  
舞台に仕上げたいと思っています。

◎第四十二回公演『真夏の夜の夢』

脚本/栗木英章 演出/佐野秀明

四月二十一・二十三日 名芸平針小劇場

その後は恒例となっている子ども劇場で、

五月からスタートします。

◎天白/南子ども劇場

脚本/栗木英章 演出/片野耕治

七月十五・十六日 名芸平針小劇場

九月九・十日 名古屋南文化小劇場

並行して、地元の文化団体とつくる天白文

化ふおらむ主催。音楽劇『狐ものがたり』

にも協力し、また秋の、若尾・柘植・岡部追

悼名劇協合同公演『明治転回』（仮題）の作

品を、栗木が苦戦しつつ書き進めているとこ

ろです。その他、戦後五十年を記念する「反

核舞台人の集い」等もあり、超多忙な一年と

なりそうですが、劇団の悩みは若手、それも

男性劇団員が不在に近い状態ということ。す

妙案があれば教えて下さい、といったムジ

のいいお願いをして、まずは劇団通信でした。

(468) 名古屋市天白区平針一八〇八

〇五二一八〇三二二九二二

急な連絡や小包み類は左記へよろしく。

(457) 名古屋南区汐田町十一一八

〇五二一八二二一三六九二

#### 劇団息吹

お久しぶりです。劇団息吹です。阪神大震

災により被災された仲間劇団の方々に心より

お見舞い申し上げます。我々の劇団は幸い被

害を受けずに済みましたが、日頃地震とは縁

のない私達にとっては、本当に怖い体験

でした。それにしても行政の対応の悪さが目

につきます。大阪府知事の発言でもわかるよ

うに住民そっちのけの体質があらわになった

といえるでしょう。

さて、劇団の当面の活動予定は次の通りで

す。

三月十九日 和歌山県金屋町給与者組合依

頼公演（金屋町文化ホール）

「アンネの日記」木田昌秀・演出

四月一・二日 研究生卒業公演

「11匹のネコ」田中実乗・演出

七月上旬 自演連合同公演

追記  
昨年一年間の劇団公演は、春に井上ひさし

の「頭痛、肩こり、樋口一葉」を大阪春の演劇祭りと取り組み。秋には、戦後五十年を前に、アンネ没五十年に当る年であるために、「アンネの日記」を十一年ぶりに再演しました。この公演の取り組みの中でぜひ和歌山でと声がかかり三月の公演と合いました。

(578) 東大阪市中野二四四一十四

劇団テアトルハカタ  
○七二九一六四一四四四一

第二三作品公演「デット エンド」(S・キングスレー作、ほしみつま脚色)を中村ジョーの演出で八回公演(一月十八日・二十日)を終わったところだ。

十七日にあった 神大震災の影響で観客動員はいまいちでしたが、会場で義援金を募り十二万五千五百円を福岡市阪神大震災災害救援連絡会議に託すことができました。

地震にあわれた劇団の皆様の一日も早くの立ち直りをお祈りしています。

今後のテアトル ハカタの予定を紹介しします。(○印は本公演)

4・29 春日市民ミュージカル

ふれあい文化センター柿落し  
○6・11・4 「ひめゆりの塔」菊田一夫作

少年科学文化会館 終戦50周年記念  
○8・11・12 児童劇団テアトルハカタ

作品は検討中 ガスホール

○9・19・24 「神露瀾村夜叉伝」石山浩一郎作 大博多ホール

10・15 博多区民ミュージカル 大博多ホール

12・10 県民手創りミュージカル 市民募集

アクロス福岡 県庁跡地対策課  
その他に実験劇場、巡演等があります。

(812) 福岡市博多区綱場町一〇一六 多角ビル5F

劇団からつかぜ  
○九二二七二一五〇九〇

しずおか文化の祭典94・第34回浜松市芸術祭参加として、第26回公演「モモ」―少女と時間どろぼうたち―を上演しました。

十二月三日浜松市福祉文化会館ホール、原作ミジヤエル・エンデ、脚本栗木英章、演出布施佑一郎、モモは新人の鈴木貴子でおこないました。村人達やその子供達は、稽古場のあ

る篠原地域でくらししている四家族の参加を得て上演しました。お母さんや子供達は、本番はエネルギーにのりまわって演技

していました。観客動員は七百八十人くらい

でした。定員オーバーで立ち見で観てもらった人が百名以上いました。

アンコール公演として一月二十九日に稽古場公演を打ちました。五十人位の子定観客でしたが百五十名のお客さんに入っていました。客席は一杯になってしまいましたので、舞台上にセットされた円形劇場用客席で芝居を観てもらいました。

この日は、名芸から数名この芝居を観にきていただきありがとうございました。はるばる浜松にある稽古場まで足を運んでいただきました。

この芝居では約三十名の活動者でしたが、この芝居にだけの参加者が大半をしめていてこの結果、十名位の人数で本年の活動をするようになります。三月十八、十九日にはからつかぜ定期総会を開き、本年の活動を決めていくことになります。

上演したい作品は数本あるのですがやはり人数が足りません。(西井 学)

(431) 02 浜松市篠原町二一五〇五

○五三三四四九一〇九三七

## 名古屋演劇集団(演集)

先号でお知らせした「アンネの日記」の稽古が大詰めに入った劇団演集です。よい公演にするため、只今奮闘中です。乞御期待!!

その最中二月十四日、若尾正也に関わる著名人が一同に集い、「若尾正也を偲ぶ会」が行われました。若い頃の若尾さんの意外な側面がみられとても楽しい一夜になりました。中でもスライド上映した、正也さんとおタカさんの戦時中に四十五通の往復書簡を通して結婚されたお話は、とてもロマンのあるお話で是非お芝居にしてみたら?との声がかかるほどでした。

この日、若尾さんの写真の横にビールが置かれていました。煙草を持つ若尾さんと、そのビールが妙に似合っていて、その写真が会場に集まってきた方々に笑い掛けているように思いました。みなさんが、この笑顔に集っていたんだと思うと、あまりの偉大さに感動しました。

今後の活動予定ですが、秋に若尾・柘植・岡部追悼 名劇協合同公演(作/栗木英章、演出/木崎裕次)を予定しています。

(451) 名古屋市中区西区庄内通り四一六一三

## 劇団「弘演」

○五二一五二四一五九七五

まだまだ雪の降る日がありますが、日差しが日に日に強くなり春の兆しが見えています。二月初旬に総会をやり今年の活動がましました。今年の秋は県民文化祭が私たちの地域を含む津軽地域で行われます。いろいろ予算面での問題はありますが、第五回目となり定着しつつあります。

今年の公演は戦後五〇年を考える企画として春の公演に、村田喜代子・原作/飯沢匡・脚色「鍋の中」、また秋の公演では県民文化祭参加作品として、水上勉・原作/小松幹夫・脚色「ブンナよ木からおりてこい」を決めました。それぞれ七月・十一月に公演の予定です。また八月には実行委員会形式で「この子たちの夏」の上演が予定されており、劇団でも中心になって参加することになっていきます。統一地方選挙・参議院選挙と慌ただしい年ですが、劇団の責任ある公演を持続していきたいと思っています。また新人事で次のようになりました。

代表 青山 司 文芸部長 秋本博子  
事務局 宮崎英世  
再任になりましたが今年一年またよろしく

お願いします。

(036) 弘前市品川町一 喫茶ブラジル内

一七二一三五一四六六〇

## 劇団きづがわ

阪神大震災に遭われた神戸をはじめとした各劇団並びに被災者のみなさん、心よりお見舞い申し上げます。

私共にとっては念願の『河』公演を直前に控えた大事件で、劇団員や手伝って頂いたスタッフの一部に被害があったものの、幸にも公演中止を考える程には至りませんでした。

けれど、夜明け前、突如襲った激しい揺れと恐怖、目を奪われ続けた刻々と広がる被害の惨状、被災地を訪れた時の生々しい衝撃などは、到底忘れられるものではありません。

そんななかでの『河』(作・土屋清/演出・林田時夫)公演も無事終えることができましたが、普及面では震災の影響も随分とあり八百名少しと振るわず、少なからぬ赤字を余儀なくされました。

(二/一・一二、近鉄小劇場。三回公演)今はやっと終えた虚脱感と疲労のなかで、芝居とは異なる別世界の忙しさに追われる毎日ですが、出来不出来はともかく、七年余り前、何かと数えられることの多かった土屋さ



んの別れの集いに参列し、心秘かに誓ったことを成し終えてホッとしているところだ。  
次の取り組みは、五年に一度の大阪自立演劇連絡会議の合同公演（やはり戦後五十周年に相応しい題材で、「浮島丸事件」を扱った創作劇上演に参加の予定だ。）（TH）

#### 劇団はぐるま

まずは、上演活動の報告から始めます

「ブッタ」（再演）十月一九、二〇日

岐阜市文化センター

二ステージ、一六〇人

「ブッタ」（移動、国民文化祭参加）

十月二十九日、四日市市文化会館

一ステージ、五〇〇人

「二〇〇万回生きた猫」（若手公演）

一月九、十日、御浪町ホール

二ステージ、二二九人

「ブッタ」（移動、岐阜南高仏教行事）

二月八日、岐阜市民会館

「ブッタ」（移動）

二月十一日、東員町総合文化センター

「二〇〇万回……」は、次の公演まで三ヶ月ほどあったため、勉強を兼ね、若手で一本

芝居を作ってみよう、ということと急遽決まった公演です。準備も何もありません、結局、佐野洋子さんの童話を脚色して、上演しました。

さて、これからの公演予定ですが、「カナナの咲き乱れるはて」を三月一〜三日に御浪町ホールで、五日に市民会館で上演します。

研究所の卒公は四月十五、十六日で、「ブナよ木からおいてこい」。なつやすみファミリー劇場は、七月二十一日から「ビーターパソン」。その後十月には市民創作野外劇「信長天下を取る」が予定されています。

（内田 薫）

（500 岐阜市西野町一丁目

〇五八二一六五一八五二）

#### 劇団やませ

去年の十二月二十八日、午後九時三十分頃。

御存じの『三陸はるか沖地震』がありました。

そして、明けて正月七日、午前七時四十五分頃。最大余震。団員の中には、断水・停電・ガス停止等、不自由な生活を余儀なくされた者もいます。建物に壊滅的破壊を受けた市民も多数ありましたが、お陰さまで、団員には

屋内の被害はありませんでしたが、家の被害を受けた者はありませんでした。そして、稽古場も

本棚等の倒壊はありましたが、建物自体には大きな被害はありませんでした。励ましの手紙・電話等、本当にありがとうございました。また、『阪神大震災』で、私達を大きく上回る被害を出した阪神地区の仲間、心よりお見舞い申し上げます。頑張ってください。さて、私達は、忙しさの中で正月を迎えました。

まず、一月二十九日（日）に、ちょっと離れた三戸郡倉石村の連合PTAから要請のあった親子劇場。続いて二月十二日（日）、隣の階上町の登切小学校新築落成記念に『海村』を公演してきました。寒い中の稽古は、ちょっと厳しかったのですが、最近入団した若い仲間もそれぞれスタッフやキャストとして頑張ってくれました。

今年は創立二十五周年です。当面は、六月に稽古場公演。十一月に本公演をすることを総会で決定しました。演目は、三月中旬頃には決まる予定です。勿論、各方面からの依頼公演には、積極的に応えようということも確認されました。

（031 八戸市大字飯町字下松苗場

一四一八三 梶谷方

〇一七八一三三一一九一三）

#### 劇団京芸

突然の震災は私たちの劇団にも少なからず影響を与えました。出演者の中には被災して家を失った人もいますが、元気に活動を続けています。

四年間全国おやこ劇場を好評裡に巡演した「そうべえごらくへゆく」は、今少し続演することになりました。

音楽劇団でんごの共演による「雪の女王」は夏まで巡演を続け、「蠅の王」の本格的な高校巡演が五月からはじまり、しばらく錯綜したスケジュールを乗り切らなければなりません。

俳優教室第十九期終了公演

「棒になった男」（安部公房作・早見栄子演出）於・京芸DDシアター。

三月三十一日、四月一日二日。

八月公演

「白いライオン」（岡部耕大作・藤沢 薫演出）於・京都府立文化芸術会館。

八月二十四〜二十六日。

今度、早見栄子が今年度の全児演正賞を受賞いたしました。

（612 京都市伏見区納所北城堀三二一八  
〇七五一六三一 二六〇九・八四八〇）

#### 劇団海鳴り

流水がオホーソク海一面を覆い寒さも厳しい毎日ですが、ツララの滴に春を感じる今日この頃になりました。まずは阪神大震災の被災者の皆様に心からお見舞い申し上げます。さて、海鳴りは二月上旬今年度の定期総会を持ち、今年一年間の活動計画を立て、現在週二回例会を行っております。まず、五月十四日（日）、紋別市、春の芸術祭、ザ・ジョイン

ト95の公演。これは第十三回目になり、市内の音楽団体、バレエ団体との発表会で、作品は「結婚の申込み」「人を喰った話」に決定しました。昨年の江別演劇祭以来団員も少し減り苦しい状況ですが、新団員確保も目ざしたいと張りきっています。九月には町内のお祭りの賛助公演、前述の二本の内一作品での参加です。又十月下旬に一般公演を予定しておりますが、作品は未定です。

（094 紋別市潮見町二一三三四〇 我孫子 正好方  
〇一五八二一三三三三八）



#### 劇団あしげ

昨秋十一月二十七日（日）浜田市石中央文化ホールにおいて「セロ弾きのゴーシュ」を公演。五十八回目的のステージとなりました。浜田では市民参加を募り、高校生から初老の方まで（中には御夫婦での参加も）三十三名参加下さり、最後の合唱シーンは大いに盛り上がりしました。

今年に入って、二月十二日には水戸で公演し、六月十一日には広島市大和町で「セロ弾きのゴーシュ」を上演します。

八月二十五日（日）〜二十七日（日）には、全リ演西会議総会と「星ふる里の演劇フェスティバル」が八雲村で開催されます。新築の一〇〇人劇場では「セロ弾き」の六十一回目的の公演も。団員一同たくさんの方々の御来場をお待ちしています。おもてなしメニューとしては、まず石臼挽き手打ち出雲そば。グルメ好みの園山の発案です。次に総会メンバーの方には、園山の自宅をゲストハウスとしてコーヒータ임을検討中。フェスティバル参加の若い方には星上山スターパークのパンガローを用意しています。あしげ後援会の手作り料理、酒あり、歌あり、踊り（?!）あり。朝まで語りあかししましょう。

劇場には八月初旬に引越す予定です。そしていよいよ十月に神落し公演。これに向けて新作を準備中で、上演許可がとれば決定です。

(伊藤寿子)

劇団すがお  
690 松江市砂子町二〇九一三  
〇八五二二七三〇五〇〇

十月末の国民文化祭の演劇祭に地元七劇団の合同公演に、はるまのこばやしさんに演出を引き受けてもらいました。約三ヶ月間の稽古に参加し感じたことは、芝居づくりに対する厳しさ、稽古は役者だけでなく全員が参加すること、毎回の稽古を本番同様の気持ちで行うという事でした。

さて、劇団は三月の公演に向けて最後の追い込み中です。六月公演の後五名が入団し、すっかり若返りました。若い力で劇団を盛り上げ、国民文化祭参加七劇団中三劇団が同じ日の公演という状況の厳しさを乗り越え公演を成功させようと思気込んでいます。

#### 次回公演

三月十八・十九日「天国から北へ三K」より「LAST DESIRE」

於・桑名市コミュニティプラザ

(511 桑名市睦美ヶ丘一〇五八)

〇五九四一三二一四二二〇  
不在の場合 〇五九四一三二一四六二六

#### 青年劇場

まず、今回の阪神大震災で被害に遭われた皆様に心よりお見舞いを申し上げます。震災当日の劇団は『もう一人のヒト』(作||飯沢匡、演出||松波喬介)の稽古中でしたが、TVで映し出された神戸の街が芝居に出てくる空襲で焼かれた東京の街と重なり、なんとも言えない気持ちになりました。

とりあえず私達に出来る事として、全劇団でカンパを募り、第一次分を神戸へ送り、引き続き公演会場でも訴えてカンパ箱を設置して、お客様にも協力を呼びかけております。全演の仲間の劇団も大きな被害を受けられたとの情報に接する度、一日も早い活動再開を願わずにはられません。

#### △東京公演V

『もう一人のヒト』二月十月初日、二十三ステージ。飯沢匡追悼・戦後五〇周年記念のこの作品、只今、劇団総力を上げての公演の真最中です。おかげさまで劇場は笑いに包まれ、好評です。

『時間のない喫茶店』(作||斎藤樹実子、演出||堀口始)五月十三日初日、十三ステ

ジ。「すみれさんが行く」で斉田喬戯曲賞を受賞した斎藤さんの第二弾。離婚して姉弟を別々に引き取っている元夫婦が思い出の家で再び出会って……。

『青春の罅』(脚本||瓜生正美、演出||中野千春)九月十四日初日。上演回数七十七回を記録した、初演から十五年、新キャスト・新スタッフによる戦後五〇年を記念しての待望の再演です。

#### △全国公演V

『喜劇キュリー夫人』三月九日岐阜初日三十一ステージ、中部・北陸の演劇鑑賞会。例会です。『キスだけでもいいわ』五月二十九日藤枝初日、静岡県内の演劇鑑賞会の例会です。『すみれさんが行く』六月一日長野初日主に長野・石川・東北。高校生に見てもらいます。『翼をください』六月一日滋賀初日、主に近畿・東北・北海道の高校生・子ども劇場の皆さんにお会いします。

さて、昨年は新劇界の重鎮、千田是也、飯沢匡の両先生がお亡くなりになりました。御二人は共に青年劇場を可愛がって下さり、多くの作品で作・演出を担当し私達を指導して下さいました。先生方の遺志をきちんと受け継ぐ仕事をこれからもしていかねければと思

っております。

今年は選挙の年、私達の舞台・生活を守るために全国の皆さん奮闘しましょう!

(中谷 源)

(160 東京都新宿区新宿二一九一〇)

間川ビル六F

TEL 〇三三三三三二七〇五四

FAX 〇三三三三三二九四一八

#### 劇団阿修羅

全演加入後の初公演がレジナルド・ローズ作、松木圓演出による第三回公演「十二人の怒れる男達」を昨年九月一・三日迄、東京下北沢タウンホールにて四回、名古屋西劇場にて九月十・十一日の二回。計六ステージを行うことができました。現在、阿修羅の団員は七人ですが女優がいません。今秋九月上旬に予定しているアサー・ミラー作「みんなわが子」は女優と子役を必要としています。その他上演台本の決定、劇場の押え等、これから詰めていく事が山積みしています。次号の演劇会誌には展望が見えたらと――。

(157 東京都世田谷区南烏山二二三一)

川崎方

〇三三三三三〇九八六三三

#### 劇団埼玉

まずは、阪神大震災で被災された皆様に、お見舞い申し上げます。詳しい情報が入らず、義援金を募る程度のことしかできずに、何かお力になれることがあればと思っているのですが……。

公演の報告としては、十二月二十五日、越谷コミュニティホールにて『武洲鼻緒騒動』を上演しました。この作品は、江戸時代に埼玉県で起った史実をもとにしており、川元祥一氏の小説を劇団員の沢田照夫が脚色したものです。

演出は川村武夫、主催は埼玉県葛郡市同和対策協議会、一五〇〇の会場は満席となり、差別問題という重いテーマでありましたが観客の方々からは好評を得ました。さらに今年七月には埼玉会館で再演も予定され、作者、演出をはじめ劇団員一同意気込んでいます。

また、来年は劇団創立三十周年にあたり、レパートリーの選定をはじめとし種々の楽しい企画を準備を進めています。

稽古場移転問題は、まだ具体的な見通しがつかず、候補地選び、資金集め、また劇団員募集と、課題はたくさんありますが、この時

期を何とか乗り越えようと劇団員一同頑張っております。

(330 埼玉県大宮市栄谷一七一一四)

〇四八八六八四一三〇八二

#### 仙台小劇場

全演のみなさま、元気でご活躍のことと思います。神戸・大阪の劇団の方々には心からお見舞い申し上げます。

さて、仙台小劇場は、春を迎えて忙しい時期に入ってきました。三月五日は移動公演の初日。「三匹のコブタのほんとうのはなし」はいつもながらの生バンド付きミュージカルですが、バードあり、ハードからヘビ・メタまでの、豪快な舞台になりました。この後時期をおいて、何カ所かまわる予定です。

四月二十二・二十三日は大和町にできたホールの神落として公演「生きのさやぎを」です。戯曲の主人公の歌人・原阿佐緒の故郷での公演がやっと実現し、うれしく思っています。前回スタジオ公演だったので、ホール用にリメイクして舞台を作ります。この大和町ホール(通称「まほろばホール」)は夏の「東日本演劇ゼミナール」の会場となる予定です。仙台で皆様にお会いできるのが楽しみです。

また、その他七月の夏休み親と子の劇場は「ブレイメンの音楽隊」を予定して、制作活動が始まっていますが、春は転勤や就職でメンバーに動きが出ています。なんとかいい芝居を作ろうと仙台小劇場は必死です。

(980) 仙台市青葉区五橋一五〇一三 平和友好会館2F ○二二二六四一三三三〇 FAX ○二二二四一三三九六

#### 劇団夜明け

ごぶさたしております。近況報告です。

現在三月十八日、十九日、二十二日に中津川コミュニティセンターにおいて、中津川市文化祭演劇参加として上演する「恋歌がきこえる」(小池倫代作、鈴木弘文演出)の稽古のおいこみ中です。

「演劇祭」というと大きな祭りといったイメージがありますが、昨年までの参加団体は夜明けだけといったさみしい状態でした。しかし今年は中津川市の二つの高校の演劇部に参加を呼びかけ、計三団体で演劇祭を行うことになり、祭りらしくなったと思います。今後これらの高校との交流を通じて、地元演劇文化により形を「力」になっていけばと思っています。

又、演劇祭は市教育委員会から会場費の免

除と、二万五千円の交付金が出ますが、来年度以降増額を働かかけたいと思います。

さて今後の予定は、創立四十周年記念公演第一弾として、夏に「11びきのネコ」(親と子の劇場)を中津川文化会館(七月二十二、二十三日)、恵那文化センター(九月二、三日)で上演の予定です。そして秋には、第二弾として稽古場で長期公演を予定しております。(三宅恵志)

(508) 中津川市北野丸山

○五七三六五〇四九三七

#### 劇団生活舞台

私も二月二十六日に劇団総会を開きました。総会では、94年度の経過の総括と、95年度の計画について討議を行いました。

今年度の計画は次の通りです。

五月三日 憲法劇団ひまわり一座公演

堀良一作・高尾豊演出

「敗戦50年—セピア色の写真」

(憲法劇団ひまわり一座は青法協の弁護士を中心に法律事務所事務員・裁判所職員・一般参加の市民と生活舞台によって構成されており、クレージー・ボーイズ・劇団道化が応援しています)

七月二十二日 非核・平和のつどいIN筑豊、

「非核の政府を求める福岡県の会」の呼びかけで毎年各地で実行委員会が組織されていますが、今年は筑豊(直方市)にて二十二日・二十三日の両日行われます。一座は「敗戦50年—セピア色の写真」を上演予定。

また、昨秋上演した「筑後川異聞」を地元要望により、公演を七月末の予定で話しを進めています。秋の公演については、候補作品検討中で三月二十九日に決定します。劇団はいま、老若男女それぞれ総会終ったばかりで張切っております。

(815) 福岡市南区長丘二一五〇一四一

四〇一 平原方

#### 京浜協同劇団

阪神大震災で仲間劇団の皆さんが大きな被害を受けられたことに心からお見舞い申し上げます。たいへんでしょうが、一日も早く立ち直れることを祈っています。

●皆さんに御支援いただいた新稽古場が完成しました。二本の芝居を同時進行で稽古できる幸せに酔いつまっています。お客さんからの資金カンパも目標の四千万円を二月末に達成することができました。総工費が当初予定より四百万円ばかりオーバーし、一億六千四百万

円となりましたので、引き続き第二次カンパ運動を展開しています。

落成祝賀会には全リ演からも大勢の方においでいただき、ありがとうございました。上京の際はぜひお立ち寄り下さい。

●劇団員山口あきお(本名、佐々木昭男)が腎臓ガンのため一月七日に亡くなりました。四十八歳でした。他に代えがたいキャラクターを持ち、努力家だっただけに残念で残念でなりません。全リ演係として仲間劇団の皆さんにもたいへん世話になり、ありがとうございました。

一年前の交通事故で入院していた劇団員鬼丸ゆりは一月に退院、リハビリに励んでいます。今はまだ車椅子ですが、聴こえなかった右耳が手術で奇跡的ともいえる快復を果たしたことで本人も自信をつけています。

●二十四年目の「かわさき演劇まつり」は三月に二会場で行われます。わが劇団は「ふたりふんのぼく—学校の怪談—」で単独出演します。戦後五十年目のことし、子供たちにも戦争のことを考えてもらおうと企画、若林一郎さんが書き下してくれた作品で、室野定子が演出します。

●稽古場の柿落とし公演は六月中旬から七

月初旬にかけて大稽古場(百五十名収容)で十二ステージやる予定です。川村光夫さんから「がんどろ」の上演許可をいただきました。演出は藤井康雄。

(211) 川崎市幸区古市場二一〇九

TEL ○四四一五一〇一四九五二

FAX ○四四一五三三六六九四

#### 劇団名古屋

◎昨秋、原田宗典作「分らない国」を、好評裡に打上げる。◎むろん神戸には電話通じず、劇団大阪へTEL。とりあえずの皆さんの無事を聞きホッとする。劇団OBにも呼びかけ、わずかでもカンパを即送金。テレビに報じられる神戸の街の惨状の中、「四紀会」"どろ"の人たちが今どんな状況にあるのか、どのように復興への道を歩んでみえるのか、折るような思いでエールを送っている。

◎娘時代に観て感動した舞台の一つに「民芸」の「ゼロの記録」(大橋喜一作)がある。いかこんな芝居を創ることの出来る劇団になりたいと思っていた。それが、今夏八月六日の前日に実現することになった。「50年」を期しての企画である。B4紙七十枚、半分に折って百四〇枚の厚みの台本! 皆から悲鳴があがる。イヤイヤ、問題は台本の重量など

ではなく、中味の重さなのだ。「これ読んでると、ぬるま湯につかるとる自分が見えてくる。こんな自分にこの台詞が言えるだろうか?」劇団員の不安は当然である。「河」(故土屋清作)の時のように、又私たちははね返されては進むのであろう。単一ではない自分の中身の最良の部分を使え、「ゼロの記録」と向き合いたいと思っている。

(ことうてるよ)

#### △記▽

大橋喜一作・久保田明 演出

「ゼロの記録」

(時) 八月四日(金) 五日(土)

(所) 名古屋芸術創造センター

(456) 名古屋市熱田区新尾頭二二二一九

○五二一六八二一六〇一四

#### 劇団火の鳥

全リ演のみなさん、こんにちわ! 静岡の劇団火の鳥です。94年は、五月公演「おっちょこちょ医」、夏から秋にかけて、朗読や絵本の読み聞かせ、紙芝居づくり等の創作活動の中で、劇団員が二十一名に増えました。若さと数を力に、精力的に量から質への変革をめざしています。

95年の春から夏にむかって『奇蹟の人』を

上演します。(W・ギブスン作、広渡常敏脚本・泉地守演出)。上演日程は、五月二十日(土)開演二時と六時三十分の二回、静岡市民文化会館中ホール、七月八日(土)、七月九日(日)昼、静岡市サールナートホールです。

誰もがもっている人間の可能性を信じ、心と心がふれあう交流が感動を生み、ヘレンやサリヴァン先生のもつエネルギーで前向きな生き方に刺激されて、稽古に励んでいます。みなさんのご支援、ご協力をどうぞよろしくお願いします。(泉地直子)

(420) 静岡市安倍口団地五―三八三〇八

泉地守方  
〇五四―二九六一―二九七

### 鋼路演劇集団

昨年十一月に創立二十周年記念として、地元の大正時代に取材した創作劇「警鐘」(大正八年一月三日西幣舞大火より)を市民の方々三十名の協力得て、キャスト五十名の舞台を上演いたしました。二ステージで七五〇名の観客でした。いま一つ観客組織が延びませんでした。が、久々の創作劇で、脚本の上がり遅かったり、公演前の稽古日程が詰まったりで、反省する事が多くありましたが、舞台

成果は好評でした。

今年四月二十二日に、地元鋼路子ども劇場の例会で、「おこんじょうるり」(さねとうあきら作、ふじたあさや脚色、尾田浩演出)を上演予定で稽古を行っております。この作品は、昨年五月アトリエ公演として上演したもので、今年一月には隣の白糠養護学校で上演しています。また、このあと地域公演を行う予定で各地への案内している所です。

また、昨年九月の北海道演劇祭イン江別が、大成功に終了し、来年の演劇祭が当地での開催予定で、地元演劇協議会を中心に動き出すとしております。今年は秋に地元劇団による合同公演を十月に予定しています。来年へ向けて忙しくなりますが、今までの地元での活動の成果が試される事となります。(尾田)

(085)

### 劇団河童

阪神方面の方々、心より震災お見舞い申し上げます。

昨年は、九月の江別演劇祭で「ホスピス」(作・立原りう／演出・布施茂)を上演。

第三十一回一般公演として、「ホスピス」を十一月十二・十三日、地元劇団動物園の賛助

出演を得て北見経済センターで上演しました。今年の上演作品は、井上ひさしさんの「雪やこんこん」です。十月十四・十五日の両日二ステージの予定です。

現在、台本作りに追われています。

(090) 北見市幸町八―三―四 扇谷国男方

〇一五七―二四一三三五七

### 劇団やまなみ

本年は、創立四十周年を迎えます。

昨年より準備を進めていますが、全てはこれからです。そのような中、春の公演は、河野通方の創作劇

『あしたは晴れ(七場)』に決定しました。

河野通方(こののみちかた・通称ツウさん)は、一九五八年入団、役者・照明・演出・装置・効果と劇団草創期の中核です。

一九六二年「長い夜の涯」(三幕五場)を書き上げ、劇団初の創作劇の公演を行いました。

一九六六年に「黒土」(三幕五場)二作目を上演しました。

しかし、七七年頃より体調を崩し活動を中断しました。その後、大手術・闘病の間を経て、昨年十二月『あしたは晴れ』(七場)の第一稿と腰に採尿袋を引つ提げて復帰して来ました。団内の作者による創作劇は七七年の

「愛よ、急げ」小谷道雄作以来十八年ぶりの事です。

創作なら良いと言うことではありませんが、四十周年の第一弾として、良い舞台を必ず創ろうと燃えています。

制作・小谷道雄、演出・梅津幸三と万全です。公演日は、市民会館開館五周年記念事業となる「こうふ演劇祭」との日程の調整のため、七月二十二・二十三日又は八月五日・六日になるか未定です。

このように報告しますと、順風満帆に思えますが、東会議議会のメインテーマ「劇団員の少量化、高齢化」「劇団員の確保、拡大・世代の引継ぎ」等、全ての問題を抱えたまま、本年も出発です。

現実には、在席数二十二名、実労働十二名か十名、六十代二名、五十代六名、四十代三名三十代四名、二十代四名、十代三名です。前月の定例の運営委員会で、「一団員、一名の仲間づくり」を決め、団員に呼びかけ仲間づくりを始めました。既に希望者がありました。在席する団員が求心力のある核に成れるか否かに掛かっているように思います。

ツウさんのほかに、モンさんも十年ぶりに復帰して来ました。四十周年を機に、新しい

仲間や今まで劇団やまなみにかかわった三百五十人もの古い仲間にも呼びかけて、充実した舞台創りを目指します。

八月の東会議のゼミには、「ヤッターゼ！」といえる報告をやりたいものと思います。

(亜)

(400) 甲府市青沼一丁目八―五

### 劇団静芸

〇五五二―三三―九五五六

◇昨年十月、十一月の「しずおか、東西南北子供小劇場」公演、ブイイスラー原作、小原輝夫脚色「ちびっこ魔女のぼうけん」は公民館、体育館での四回公演、延千八百人の子供と親たちに大評判、沢山の応援者と子供の出演で、子供劇だからこそ一層、懸命によりよい舞台をとおり組み、大成功であった。平成六年度の静岡県芸術祭、演劇部門での最優秀賞である、「県芸術祭賞」をいただき、一月の授賞式に代表の伊藤が参加する。これで二年連続、県芸術祭賞の授賞となり喜んでいいる。

◇五月二十八日(日)の第二十一回静岡文化祭と六月十七日(日)新しく出来るサールナートホールのオープン記念公演に、「アンネの日記」(二幕)を上演する。戦後五十年、今あらためて、この公演を通じて平和の問題を真

剣に考えてみようとする稽古に取り組んでいる。

若々しい十代の女性七人の応援もえて、明るく、稽古場は活気が出て来ました。沢山の人の目に映るために、劇団員は一人、二役三役の仕事をもちがなばっています。尚演出は都合により、伊藤幸夫が担当します。

◇静岡県演劇連絡協議会の講習会に劇団銅鑼の早川昭二氏が講師を担当して来静して下さって大成功の講習会を持つことが出来ました。

(420) 静岡市昭府町一―〇―一三七  
〇五四―二七三―〇六〇四

### 劇団さっぽろ

阪神大震災、ほんとうに驚きました。犠牲者や被災者の方々の事を思うと、暗澹たる気持ちです。いざという時に頼りにならない政府をもった国民はどうすればいいのでしょうか。劇団は、北海道子ども舞台祭典参加作品「へっこあねがよめにきて」をもって公演の最中もあり、新作「おぼさきてえ」も幕をあけました。また、先日、再開した付属演劇研究所の面接を行いました。予想外に応募があり、結局、定員の二十五名をうまわる人数を入所させることにしました。どんな人材が現れるか楽しみです。

今年、その他に二回、本州公演を予定し

ていて、特に、日本児童青少年演劇団協議会（児演協）創立二十周年を記念して東京渋谷周辺で加盟劇団のうち七十劇団と海外四劇団の上演が、七月下旬から八月月上旬にかけて一斉にもたれます。劇団さつぽろは八月三日（木）に北沢タウンホールで「なら梨とり」を二回公演します。昼間の公演ですので、都合が付きにくいと思いますが、ぜひご覧下さい。

（林中直樹）

063 札幌市西区宮の沢三条四一四一八

〇一六六三二六二五二

#### 劇団群馬中芸

ここ「あかぎ未来スタジオ」は、例年になく雪の少ない冬でした。でも相変わらず赤城おろしの吹きつける毎日です。

そんな中で今、春の公演に向かって、地域合同企画公演、「草原の奔馬」『ガダ・メイリン』（作・中村欽一）の稽古が進んでいます。

この公演の制作は、「ガダ・メイリン」制作委員会と、四百五十人を越える制作協力者で進められ、資金作り、チケットの販売・当日の劇場運営等に取り組む公演です。

出演者は、私達劇団群馬中芸の六人の他、数人以外はほとんどが舞台は初めての人達、

およそ三十人と、劇を進行する合唱隊約二十五人で、ふじたあさや氏の演出で、十月下旬から週二回ほど未来スタジオに集まって稽古を重ねています。

物語は、一九〇〇年代初頭の内モンゴル。帝国主義列強の干渉と台頭する軍閥の中、反響闘争に蜂起したガダ・メイリンとその無名の英雄達を描いた作品です。

日曜日以外は夜の稽古となりますが、日に日に演技が、人間が変わっていくのをまの当りにする稽古が続いています。……

△記・公演日、五月三日から七日、於、あかぎ未来スタジオ是非お出掛けください。

（秋山としひと）

371-01 群馬県勢多郡富士見村赤城山

六二六四九八

TEL 〇二七二八八二七〇〇

FAX 〇二七二八八二七九二

#### 劇団未来

劇団未来第四十三回公演・清水邦夫作「哄笑（こうしょう）」——智恵子セーラムス坂病院にて——（寺下 保演出）は、一九五五年二月十四日（火）十六日（木）の三ステージ、大阪市堺筋本町テイジンホール、二月十八日（土）八尾市ブリズム小ホール（一ステージ）

で上演しました。観客数は計六三〇人。

この作品は、「智恵子抄」で有名な高村光太郎と妻智恵子の愛の姿をかりて書き下ろされた、「清水邦夫・愛の二部作」のひとつです。

満洲事変、二・二六事件を経て軍靴の高まる昭和十一年、東京は南品川のセーラムス坂病院に入院させている妻智恵子を光太郎が見舞います。

二人が会う場所は、病院の隣りにあるセーラムス坂教会の集会室で、ここには誰れもが入りすることができません。

この戯曲の秀れていることの一つは、場所として教会のこの集会室を設定したことにより、光太郎と智恵子、教会の牧師と今は亡き牧師の妻、牧師の娘たちと麻布番三連隊の若き将校という「三つの愛」を提出していることです。

二つ目は、「この時代と愛」とを、みずみずしい無駄のない詩的な文体によって凝縮されていることです。

それを、俳優の肉体や生理をとおして、どう解りやすく観客に伝えていくかが課題になったわけですが、今までの自然主義的な表現ではどうにもなりません。必要な分だけの的

確な演技が要求されます。

その上、当初光太郎役を演ることになっていた植田耕作が急病で入院ということになり、吉田滋が光太郎役、平尾光秋が牧師役、恵兵大尉役に関西芸術座の森下鉄朗さんに客演願うということが決ったのは、十二月も押しつまってからのことでした。

平尾光秋の八年振りの復帰と、去る十一月十三日に卒業公演を終えた劇団未来第十五期演劇教室からの男二人、女三人の劇団への入団と、ここ数年来の新入団者に刺激され、支えられての暗中模索の稽古の積み重ねの結果、懸命に生き自己をとりもどそうとする人たちの可笑しくも哀しい物語を、ひとつの時代の青春のレクイエムとして、何とか観客の心の中に刻み終えることができ、ホッとしているところでした。

#### 演劇集団「石るつ」

阪神大震災は私達が考えられない大災害となり、阪神地域の劇団にはこのうえもない困難をもたらしました。心からお見舞い申し上げます。

私たちは、一月二十、二十一日と東京芸術劇場小ホールIで『天体症候群II』稲垣足穂原作・笠置リエ脚本を上演しました。

引き続き、六月公演に向けて、作品創りからの作業を始めています。

#### 劇団コーロ

一九九五年一月十七日午前五時四十六分、阪神地方を襲った「阪神大震災」は、多大な犠牲者と被災者を出し、社会的・経済的な影

## 読者の声

響を今後に引き起こす大惨事となつてしまいました。この震災により犠牲となつた方々に慎んで哀悼の意を表します。同時に、被災された市民の皆様、何とか希望を絶やさぬように激励のメッセージを届けたいと思います。

とりわけ、多くの被害を被った全リ演、全児演や児演協加盟劇団の仲間達、各地で活動している多くの劇団・演劇関係者の方々、そして常日頃から私達の演劇活動を支えて下さるおやこ劇場や、小学・中学・高校の教職員、

一つは、山本周五郎の短編『四人囃し』を前進座の津田伸さんが脚色された物です。もう一本は藤沢周平原作の短編『父と呼べ』を境野修次の脚本での二本立て公演です。

◎深川江戸資料館小劇場

◎六月二日（金）午後六時三十分

三日（土）午後二時・六時三十分

135 東京都江東区森下五十一一八

荒川ビル・吉川複写工業社内

境野修次方

電話・FAX 03-5600-0102（二七二）



# 全日本リアリズム演劇会議住所録

## 東 会 議

| B      | 劇 団 名         | 住 所                                         | 電 話          |
|--------|---------------|---------------------------------------------|--------------|
| 北海道    | 劇 団 さ っ ぽ ろ   | 063 札幌市西区宮の沢3条4丁目14-8                       | 011-663-6251 |
|        | 劇 団 新 劇 場     | 065 札幌市東区伏古11条2-396-47                      | 011-784-9908 |
| 奥羽ブロック | 劇 団 弘 演       | 036 弘前市品川町1 ブラジル内                           | 0172-35-4670 |
|        | 劇 団 支 木       | 030 青森市長島町4丁目21-3                           | 0177-77-4677 |
|        | 黒石演劇研究会       | 036-03 黒石市乙徳兵衛町51 加賀谷方                      | 01725-2-4097 |
|        | 劇 団 東 風(やませ)  | 031 八戸市鮫町下松苗場14-183 柗谷方                     | 0178-33-1913 |
| 東北ブロック | 劇 団 未 来 半 島   | 039-51 むつ市旭町12-22 沼尻渡方                      | 0175-24-1189 |
|        | 劇 団 山 形       | 990 山形市東青田町5丁目8-5                           | 0236-32-4105 |
|        | 劇 団 だ い こ ん 座 | 997 鶴岡市青柳町42-32 たんぽぽ保育園内                    | 0235-24-1688 |
| 関東ブロック | 仙 台 小 劇 場     | 980 仙台市青葉区五橋1丁目5-13<br>平和友好会館2F             | 0222-64-2340 |
|        | 劇 団 群 馬 中 芸   | 371-01 群馬県勢多郡富士見村大字赤城山大河原<br>626-498 未来スタジオ | 0272-88-2700 |
|        | 劇 団 埼 芸       | 330 大宮市染谷1171-4                             | 048-684-3802 |
|        | 劇 団 アポストロフ    | 359 所沢市山口403-2 平石方                          | 0429-28-5374 |
|        | 舞 芸 小 劇 場     | 176 東京都練馬区豊玉上2-3-15 今成方                     | 03-3922-1660 |
|        | 青 年 劇 場       | 160 東京都新宿区新宿2-9-20 問川ビル6F                   | 03-3352-6922 |
|        | 劇 団 銅 鑼       | 175 東京都板橋区成増5-1-2 米丸ビル                      | 03-5997-9461 |
|        | 東 京 芸 術 座     | 177 東京都練馬区下石神井4-19-11                       | 03-3997-4341 |
|        | 劇 団 展 望       | 166 東京都杉並区阿佐ヶ谷南3-3-32                       | 03-3393-2739 |
|        | 世 仁 下 乃 一 座   | 168 東京都杉並区方南町2-24-5<br>第二広栄ビル501            | 03-3316-9496 |
|        | 演 劇 集 団 石 る つ | 135 東京都江東区森下5-11-8 荒川ビル<br>吉川複写工業管内         | 03-5600-0270 |
|        | 京 兵 協 同 劇 団   | 211 川崎市幸区古市場2-109                           | 044-511-4951 |
|        | 演 劇 集 団 土 くれ  | 105 港区虎ノ門1-12-1 虎ノ門第一法規ビル<br>福田事務所内         | 03-3508-0104 |
|        | 劇 団 阿 修 羅     | 157 東京都世田谷区南烏山2-33-15 川崎方                   | 03-3309-8633 |
|        | 三 浦 半 島 劇 団 海 | 230-01 神奈川県三浦市南下浦町菊名56                      | 0468-88-3142 |

生徒・児童の皆さん、多くの演劇ファンの方々、このたびの震災の苦難を乗り越えて自らの生活と活動を立て直すために共に奮闘して行きましょう。

私達劇団コロは、一月十三、十四両日にわたって公演した「空き缶・トピア」(原作・井上ひさし、脚色・演出・小林 裕)の興奮と感動がさめやらぬ内に、あの地震に見舞われました。幸にも、事務所・稽古場や道具器材のあるガレージ等々、劇団の物的財産は、大きな破損も出ずに済みました。劇団員の中には、劇団へ来るのに交通の便が悪くなり苦労している者、家具が子供の上に落ちるのを身をもって防いだ者や、知人が神戸市内にいて救援物資を持って行く者、又、今だに行方不明の人がいてその安否を気遣う者などがあります。全員無事で現在は公演活動も続いています。しかし、いくつかの公演が中止、延期になったり、学校公演の移動が長時間かかって困難を窮めるなど、今後に影響を残す問題も出ています。震災現場での現状打開の努力を強めると共に、やはりこういう時にこそ、政府・自治体など政治の分野でリーダーシップを発揮し、住民を励ましつつ問題を解決していく政治力が求められています。

さて、このような大変な時期でもある状態の中で、劇団コロは新稽古場の完成を間もなく迎えます。劇団コロとなりおそ十年、何とか自前の稽古場を持ちたいと長期計画を練りもしましたが、土地高騰の折り、適当な所も見当たらずあきらめておりました。そこへ大阪市内でいい物件があるという情報を知り、劇団内で様々な議論を重ねた上で十五年という資金計画を立て、新稽古場建設プランを編みました。そして、今春完成の運びとなったのです。鉄筋三階建てで一階が事務所とガレージ、二階に稽古場、三階には第二稽古場、衣裳部屋や更衣室などがあります。実際に稽古場として機能を発揮し劇団活動の拠点となるためには、まだまだ多くの仕事を必要としており、多少の時間がかかりますが、コロとして初めて手にする自前の稽古場の存在に、私達は今、非常にワクワクしています。かつて電気屋さんの倉庫であった現在の稽古場から、私達は幾つかの作品を生みだして来ました。そこには稽古場の環境・条件を奮闘

## 稽古場完成かしー

のバネにして来た劇団コロの心意気と、その心意気に応じて数多くのモノを引き出して頂いて作品と共に創って来た演出家の方々やスタッフ・役者の方々との感動の出逢いがありました。その初心を忘れず、新稽古場を新たな創造を生みだす場とするためにこれからも走り続けていきたいと思っています。

なお、稽古場建設に際し資金カンパを御願ひ致しました所、多大な御賛意、御協力を賜り誠にありがとうございます。劇団員一同厚く御礼申し上げます。(文責・坂口 勉)

追記・新住所は三月七日より左記の通りです。どうぞよろしく願ひいたします。

(546 大阪市東住吉区公園南矢田二二四一  
TEL 〇六 〇六 九五一六四〇一  
FAX 〇六 〇六 九五一六四〇五)



| 劇 団 名     | 住 所                          | 電 話          |
|-----------|------------------------------|--------------|
| 演劇集団未踏蒼生樹 | 121 東京都足立区梅島1-9-1            | 03-3880-0034 |
| 演劇サークル麦の会 | 241 横浜市旭区川島町1927-9 河住靖一方     | 045-373-4571 |
| 川崎演劇塾     | 133 東京都江戸川区北小岩7-3-20 吉岡方     | 03-3659-8704 |
| 劇団津演      | 214 川崎市多摩区寺尾台2-8-1 小川雅功方     | 044-951-9819 |
| 演劇研究所     | 514 三重県津市大門31-28 仏教会館内 岸武雄方  | 0592-26-1089 |
| 劇団はにわ     | 420 静岡市秋山町2-1715             | 054-271-0177 |
|           | 462 名古屋市北区福德町18A-507 下高原多美子方 |              |

## 西 会 議

| 劇 団 名      | 住 所                           | 電 話          |
|------------|-------------------------------|--------------|
| 劇団京芸       | 612 京都市伏見区納所北城堀31-18          | 075-631-2609 |
| 人間座        | 606 京都市左京区下鴨東高木町11            | 075-721-4763 |
| 人形劇団京芸     | 611 宇治市白川鍋倉山35-20             | 0774-21-4080 |
| 関西芸術座      | 557 大阪市西成区岸里東2-10-2           | 06-661-2112  |
| 劇団潮流       | 557 大阪市西成区松1丁目6-17 橘モータープール内  | 06-658-2315  |
| 劇団未来       | 536 大阪市城東区成育1-4-25            | 06-939-5777  |
| 劇団きづがわ     | 551 大阪市大正区泉尾4-2-7             | 06-553-7991  |
| 劇団大阪       | 542 大阪市中央区谷町7-1-39-103        | 06-768-9957  |
| 劇団コロ       | 546 大阪市東住吉区公園南矢田2-4-7         | 06-695-6401  |
| 人形劇団クラテル   | 559 大阪市住之江区南加賀屋町3-1-7         | 06-685-5601  |
| 劇団息吹       | 578 東大阪市中野244-14              | 0729-64-4441 |
| 演劇集団わたち    | 553 大阪市福島区福島6-12-17 川村ビル4F    | 06-458-1455  |
| 大阪府職劇研     | 540 大阪市東区大手前元町 大阪府職労第2書記局内    | 06-941-0351  |
| 演劇集団和歌山    | 641 和歌山市和歌浦南1-1-14            | 0734-45-4537 |
| 劇団四紀会      | 650 神戸市中央区元町通2丁目9-1-612       | 078-392-2421 |
| 劇団どろ       | 652 神戸市兵庫区大開通7-4-7 谷垣ビル4F     | 078-576-6488 |
| 神戸職演連      | 650 神戸市中央区下山手通9-9-7 西藤ビル2F    | 078-351-6969 |
| 劇団市民劇場やぎ   | 664 伊丹市大鹿5丁目67 貫名俊行方          | 0727-82-2573 |
| 劇団かすがい     | 663 西宮市小松南町1-13-19 樋口伸広方      | 0798-46-9564 |
| 劇団月曜会      | 730 広島市中区榎町4-27 岩井方           | 082-234-9656 |
| 劇団若者座      | 755 宇部市松山町4-10-24 東洋針灸科内(天羽方) | 0836-21-7468 |
| 演劇サークル・トラム | 753 山口市東山2-9-10 藤原方           | 0839-22-0393 |

| B                          | 劇 団 名   | 住 所                        | 電 話          |
|----------------------------|---------|----------------------------|--------------|
| 山<br>ブ<br>ロ<br>ッ<br>ク<br>静 | 劇団やまなみ  | 400 甲府市青沼1-8-5 梅津方         | 0552-33-9556 |
|                            | 劇団静芸    | 420 静岡市昭府町1丁目10-27         | 0542-73-0604 |
|                            | 劇団からっかぜ | 431-02 浜松市篠原町21505         | 0534-49-0937 |
|                            | 劇団火の鳥   | 420 静岡市阿倍口団地5-38-308 泉地 守方 | 054-296-1297 |
| 中<br>部<br>ブ<br>ロ<br>ッ<br>ク | 岡崎演劇集団  | 444 岡崎市元欠町3-10-3 浅井方       | 0564-21-2614 |
|                            | 劇団名芸    | 468 名古屋市天白区平針1丁目1808       | 052-803-2922 |
|                            | 劇団名古屋演集 | 451 名古屋市西区庄内通4-16-3        | 052-524-5975 |
|                            | 劇団名古屋   | 456 名古屋市熱田区新尾頭町2-2-19      | 052-682-6014 |
|                            | 上野市民劇場  | 518 上野市丸の内 共同ビル3F          | 0595-23-5252 |
|                            | 劇団すがお   | 511 桑名市森忠睦美丘1058           | 0594-31-4210 |
|                            | 劇団夜明け   | 508 中津川市北野丸山               | 0573-65-4937 |
|                            | 劇団はぐるま  | 500 岐阜市西野町1丁目              | 0582-65-1852 |

## 個人加盟

| 氏 名     | 住 所                   | 電 話          |
|---------|-----------------------|--------------|
| 桜井裕子    | 921 金沢市山科3丁目6-10 早川方  | 0762-44-2802 |
| 大橋喜一    | 210 川崎市幸区小向仲野町3-2-406 | 044-533-3779 |
| 岡田和義    | 176 東京都練馬区羽沢2-12-8    | 03-3991-1723 |
| こうじ谷 一朗 | 924 石川県松任市若宮町2-4      | 0762-75-2755 |
| 大原穂子    | 215 川崎市麻生区万福寺2-14-5   | 044-966-8125 |

## 友好劇団

| 劇 団 名      | 住 所                         | 電 話          |
|------------|-----------------------------|--------------|
| アーツステージくしろ | 085 釧路市貝塚1-6-19 加藤猛春方       | 0154-42-8009 |
| 劇団新芸       | 047-02 小樽市銭函町3-23-162 鹿角優一方 | 0134-62-3254 |
| 劇団河童       | 090 北見市幸町8-3-4 扇谷国男方        | 0157-24-3357 |
| 劇団湖(うみ)    | 068-21 三笠市本郷町578-9 加藤元方     | 01267-2-3044 |
| 釧路演集       | 085 釧路市寿2-5-13 中山知征方        | 0154-51-7846 |
| 劇団ベルソナ     | 062 札幌市豊平区4条12丁目8-4 秋元博行方   | 011-811-9036 |
| 函館創芸       | 040 函館市川原町2-5 長谷川潔方         | 0138-53-7520 |
| 劇団海鳴り      | 094 紋別市潮見町2-3-40 我孫子正好方     | 01582-3-3238 |

## 編集後記

●秋さん（前編集長）の姿は、今はない、これからもない。悲しみはつり、無念このうえないのです。『演劇会議』の試練はこれからという時、秋さんの経験から多くを学ぼうとしていた時、秋さんは去ってしまったのです。批評家としても、多に活躍して戴きたいた願っていた時、去ってしまったのです。更に思いつるのは、

思います。

私達はこの特集の意味を深く認識し、考えていきたいと

●「敗戦五十周年を迎えて」は、元東京新聞文化記者で、現在は演劇批評を専門に活躍されています宮岸泰治氏にお願いし、心良くお受けして戴き、心よりお礼を申し上げます。寄稿なされる皆様方の努力に応えるためにも

の反響がありました。

●「阪神大震災の特集の必要性から」は、元東京新聞文化記者で、現在は演劇批評を専門に活躍されています宮岸泰治氏にお願いし、心良くお受けして戴き、心よりお礼を申し上げます。寄稿なされる皆様方の努力に応えるためにも

●阪神大震災の被災状況下で、阪神地域の劇団は、きわめて困難な環境の中で、多数の被災報告の原稿を寄せていただき、心からお礼申し上げます。東京では、この被災状況を広く知っていただきたいと思い、『演劇会議』発行を待たず、新劇人会議を通じて各劇団に、「ニュース」として、三月初旬に配送させて戴きました。全リ演加盟劇団には全リ演「事務局ニュース」として同時期に配送しました。このニュースによって、各劇団からは、被災地域の演劇人の苦闘している姿に、深い感動を覚えると同時に、被災地劇団の一日も早い復興を願わずにはいられません、等の反響がありました。

願います。

●表4の広告がとれません。二段、二組の広告が必要なのです。広告料については相談したいと考えます。

みなさんのご協力を！



（文責・境野）

演劇会議 87号 1995年4月10日発行

定価 700円（送料240円）

編集委員 早川昭二 境野修次 石垣政裕 栗原省 赤松比洋子 楠本幸男

発行所 演劇会議発行所

〒135 東京都江東区森下5-11-8 荒川ビル 吉川複写工業内（境野修次）

電話 03(5600)0270 FAX 03(5600)0271

誌代振込先（郵便振替）口座番号 00200-4-78639

全日本リリズム演劇会議事務局（〒211 神奈川県川崎市幸区古市場2-109（京浜協同劇団・城谷護）

| 劇団名      | 住 所                                   | 電 話          |
|----------|---------------------------------------|--------------|
| 劇団演劇街    | 753 山口市中国街1-3 やの舞台美術内                 | 0839-24-0075 |
| 劇団あしぶえ   | 690 松江市砂子町209-3                       | 0852-27-3050 |
| 劇団こじか座   | 790 松山市木屋町4丁目35-1 酒井方                 | 0899-24-3415 |
| 福岡現代劇場   | 810 福岡市中央区薬院1-6-5-410                 | 092-751-7982 |
| 劇団生活舞台   | 815 福岡市南区長丘2丁目15-4-401 平原義行方          | 092-922-9737 |
| 劇団道化     | 818-01 太宰府市大字太宰府2629-10               | 092-271-5090 |
| テアトル・ハカタ | 812 福岡市博多区下川端町9-15 溝口ビル3F             | 06-488-9215  |
| 劇団螺線館    | 660 尼崎市杭瀬北新町3-47 尾尻コーポ4F              | 08669-2-4325 |
| 岡山職場演劇集団 | 719-11 総社市富原480-3 岩城方                 | 0886-23-5670 |
| 劇団阿波っ子   | 771 徳島市佐古三番町8-17 船越智子方                |              |
| 又 川 邦 義  | 563 池田市井口堂3-1-6（個人加盟）                 | 0727-61-9641 |
| サークル瞬    | 602 京都市上京区仁和寺街道千本東入<br>西陣文化センター（友好劇団） | 075-431-3169 |
| 演劇集団あり   | 683 米子市昭和町23-2 宮倉方（友好劇団）              | 0859-33-9302 |

| 議長団     | 所属劇団   | 住 所                           | 電 話          |
|---------|--------|-------------------------------|--------------|
| こばやしひろし | 劇団はぐるま | 501-01 岐阜市寺田852 円成寺           | 0582-51-0490 |
| 後 藤 陽 吉 | 青年劇場   | 184 小山市市貫井南町5-12-13           | 0423-81-1590 |
| 中 沢 研 郎 | 京浜協同劇団 | 211 川崎市幸区古市場2-109             | 044-555-4066 |
| 中 野 健 司 | 劇団支木   | 030 青森市長島4-21-3 劇団支木内         | 0177-77-4677 |
| 仲 武 司   | 関西芸術座  | 606 京都市左京区上高野上荒蒔町1-1          | 075-701-2570 |
| 藤 沢 薫   | 劇団京芸   | 615 京都市西京区榎原内垣外町<br>25-1A 403 | 075-391-5039 |
| 梶 武 史   | 劇団四紀会  | 673 明石市東野町1-5-1009            | 078-911-1513 |
| 猿 渡 公 一 | 福岡現代劇場 | 814 福岡市早良区有田2-10-4            | 092-831-1696 |

### 事務局

|         |        |                                    |              |
|---------|--------|------------------------------------|--------------|
| 城 谷 護   | 京浜協同劇団 | 211 川崎市幸区東古市場9-21 事務局長             | 044-544-3737 |
| 浅 野 真理子 | 劇団はぐるま | 500 岐阜市西野町1-11 劇団はぐるま内             | 0582-65-1852 |
| 加 納 美千子 | 劇団大阪   | 542 大阪市中央区谷町7-1-39-103<br>(西会議事務局) | 06-768-9957  |

### 編集委員

|         |        |                         |              |
|---------|--------|-------------------------|--------------|
| 早 川 昭 二 | 劇団銅鑼   | 168 杉並区和泉1-9-12-201 編集長 | 03-3323-8943 |
| 境 野 修 次 | 劇団石るつ  | 134 江戸川区西葛西3-15-8-701   | 03-3804-0507 |
| 石 垣 政 裕 | 仙台小劇場  | 983 仙台市太白区西中田5-23-1     | 022-264-2340 |
| 栗 原 省   |        | 643 和歌山県有田郡吉備町庄684-32   | 0737-52-5963 |
| 赤 松 比洋子 | 劇団きずがわ | 585 吹田市竹谷町36-2 古川方      | 06-388-7513  |
| 楠 本 幸 男 | 演集和歌山  | 640 和歌山市加納271-14        | 0734-73-7589 |